

平成8年度国庫補助事業(3)

芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書

— 阪神・淡路大震災復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 —

寺田遺跡(第55地点)

2015年3月

芦屋市教育委員会

平成8年度国庫補助事業（3）

芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書

— 阪神・淡路大震災復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 —

寺田遺跡（第55地点）

2015年3月

芦屋市教育委員会

例 言

1. 本書は、芦屋市教育委員会が平成8年度国庫補助事業として実施した阪神・淡路大震災における埋蔵文化財緊急発掘調査(震災復興調査)の概要報告書である。発掘調査費・遺物整理費等の総額は206,000,000円である。また、報告書(本書)作成を実施した平成26年度の発掘調査費・遺物整理費・報告書印刷製本費等は、総額3,200,000円である。補助率は、ともに国1/2、県1/4、市1/4である。
2. 発掘調査は、森岡秀人(芦屋市教育委員会文化財課係長・当時)、竹村忠洋(同文化財課係員・当時)両名の助言の下、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所に派遣された神野 信(千葉県)・吉田東明(福岡県)の支援職員が担当した。国庫補助金に係わる事務は、山本英明(文化財課課長・当時)・森岡秀人・岡田きよみ(同課庶務担当職員上半期・当時)・久家登志子(同課庶務担当職員下半期・当時)が担当し、文化庁記念物課の岡村道雄(主任文化財調査官・当時)・坂井秀弥(文化財調査官・当時)の両氏、兵庫県教育委員会社会教育文化財課の榎本誠一(課長補佐・当時)・井守徳男(課長補佐・当時)・長谷川誠(主査・当時)・村上賢治・山本誠の諸氏、同県教育委員会埋蔵文化財調査事務所の大村敬通(副所長・当時)、復興調査班の山本三郎(班長・当時)・小川良太(班長・当時)・水口富夫(主査・当時)の諸氏から種々ご指導を賜った。
3. 当該年度に届出があり、確認調査を行ったのは131地点である。平成7年度ならびに当該年度の確認調査の結果を受けて、本発掘調査を実施したのは10遺跡、32地点である。これらの実績報告については、平成17年度に、『平成8年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査-震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認・本発掘調査-実績報告書集(以下、『実績報告書集』と略記。)](『芦屋市文化財調査実績報告集1』)によって、その内容を公にしている。これは、支援職員が限られた期間でまとめた実績報告であるため、調査地点によっては多くの出土遺物が未整理・未報告の段階のものを含んでいた。そこで、これらの貴重な埋蔵文化財の保存・活用を図るため、平成24年度より再整理作業に着手し、平成24年度に『平成8年度国庫補助事業(1) 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書-阪神・淡路大震災復興・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査-三条九ノ坪遺跡(第15地点)・月若遺跡(第35・37地点)・月若遺跡(第36地点)・栗平遺跡(第26地点)・栗平遺跡(第29地点)・栗平遺跡(第31地点)・大原遺跡(第21地点)』(『芦屋市文化財調査報告 第95集』)以下、『第95集』と略記。)を刊行した。次いで、平成25年度に『平成8年度国庫補助事業(2) 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書-阪神・淡路大震災復興・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査-芦屋庵寺遺跡(Z地点)・芦屋庵寺遺跡(第45地点)・芦屋庵寺遺跡(第49地点)・寺田遺跡(第77地点)・寺田遺跡(第89地点)・寺田遺跡(第90地点)・打出小樋遺跡(第22地点)』(『芦屋市文化財調査報告 第97集』)以下、『第97集』と略記。)を刊行した。本書は、平成8年度に本発掘調査を実施した寺田遺跡第55地点の概要報告書である。なお、土層や遺構の認識は、『実績報告書集』や図面・記録等に従い、多少の用語の統一を図るとともに、その後の周辺調査によって新たに付け加えられた知見を盛り込んだところがあるが、基本的には、発掘調査時の所見に従っている。なお、寺田遺跡第55地点の所在地は芦屋市三条南町23-2である。
4. 出土遺物・資料整理作業は、平成8年度には、支援職員の神野 信・吉田東明ならびに森岡・竹村・木南アツ子(芦屋市教育委員会文化財課嘱託・当時)が担当し、その指導の下、下記の芦屋市臨時の任用職員(調査員・調査補助員・整理員・整理補助員・当時)が従事した。
相澤敦子 荒木幸治 石野照代 岩戸晶子 伊勢かほる 一色伸朗 牛山恵美 梅本素子 奥谷由香
岡本久仁子 奥出淑子 柏木明子 片岡亜紀 木村健明 久保ふく子 古瀬由賀子 小島静子 斉藤里加
桜井雅子 笹山美津子 高月祐治 竹林裕一 館 真史 戸塚由美子 中井みどり 永野 香 永井達也
中西邦子 仲谷由利子 福田竜馬 丸谷 明 漢 健 森木省悟 若林純也 渡部智博

5. 平成26年度に実施した遺物・資料整理作業、報告書（本書）の編集・作成作業は、芦屋市教育委員会生涯学習課再任用職員（学芸員）森岡秀人、同課嘱託白谷朋世（学芸員）が担当し、同課係長竹村忠洋（学芸員）と同課嘱託西岡崇代が補助した。上記の職員・嘱託のほかに、下記の臨時的任用職員、文化財ボランティアが従事した。

（臨時的任用職員） 須田佑子

（文化財ボランティア） 相澤敦子 梅本素子 久保ふく子 小島静子 中井みどり 仲谷由利子

本事業に関わる事務は、同課課長長岡一美、同課係長竹村が担当した。また、本事業の実施に際しては、兵庫県教育委員会文化財課から指導・助言を受けた。

6. 本書の執筆は、調査時の調査担当者の実績報告書や記録をもとに、森岡・白谷・西岡が行い、編集は白谷が担当した。調査担当者の氏名と併せて、目次に執筆分担者の名を掲げている。なお、第2章第2節は、1～5を西岡が主担し、6の出土遺物については、弥生時代から古墳時代を森岡が、奈良時代以降を白谷が分担した。また、7は白谷が主担した。
7. 本書の調査地位置図には、平成8年度に使用していた、『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図および利用の手引き』（芦屋市文化財調査報告 第24集）芦屋市教育委員会 1993 添付の『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図』を用いている。このため、現状地形や遺跡範囲と異なる部分がある。
8. 方位については、真北を用いた。標高については、東京湾平均海水準（T.P.）で表示している。
9. 標準土色帖で判定した褐色の「褐」字は、本書では「褐」を代字として使用した。
10. 図版の遺物写真は、出土した遺物から代表的なもののみ収録しており、遺物番号は遺物実測図の番号と一致している。
11. 本書を作成する上で引用および参照した文献は、キッコウ括弧で表記した。なお、発行機関が教育委員会の場合は「教委」と省略して記している。また、引用・参照文献などは、巻末に集約している。
12. 平成8年度の調査・整理作業において、勇 正廣、都出比呂志、富井 眞、藤川祐作、古川久雄、村川行弘、矢野健一、山本徹男諸氏の協力を賜った。
13. 平成26年度の整理作業において、朝井琢也、森森敦子、伊藤敦史、今井真由美、上田裕人、上田 諒、奥田 尚、川部浩司、國下多美樹、桑原久男、高 正龍、櫻井拓馬、柴田将幹、田畑直彦、寺岡 洋、寺前直人、山本亮諸氏にご教示を賜った。

目 次

目 次

例 言

第1章 阪神・淡路大震災20年と震災復興調査

- 第1節 大震災から20年を経て……………（森岡秀人）…… 1
 - 1. 阪神・淡路大震災から丸20年
 - 2. 震災被害状況の現段階での確認
- 第2節 震災下で進められた埋蔵文化財保護行政……………（森岡）…… 1
 - 1. 地震被害対応と遺跡の初期保護施策
 - 2. 二段構えの文化庁通知（『当面の取扱い』と『基本方針』）
 - 3. 再起動された発掘調査と報告書の刊行
- 第3節 震災復興調査における寺田遺跡の発掘成果の二、三の整理と第55地点……………（森岡）…… 2
 - 1. 創造的復興の事業と関係深い寺田遺跡
 - 2. 黎明期の弥生時代集落の変遷解明
 - 3. 中世段階の散居型集落の展開
- 第4節 今年度の復興調査出土資料の整理作業と報告書の公開を終えて……………（森岡）…… 3

第2章 寺田遺跡の調査成果

- 第1節 地理的・歴史的環境……………（西岡崇代）…… 5
- 第2節 第55地点の調査……………（神野 信・吉田東明・西岡・森岡・白谷朋世）…… 6
 - 1. 調査に至る経緯
 - 2. 発掘調査の方法
 - 3. 発掘調査の経過
 - 4. 調査区の層序
 - 5. 検出遺構
 - 6. 出土遺物
 - 7. まとめ

報告書抄録

引用・参考文献目録

第1章 阪神・淡路大震災20年と震災復興調査

第1節 大震災から20年を経て

1. 阪神・淡路大震災から20年

忘れることのできない阪神・淡路大震災の発生から数えて20年の歳月が瞬く間に経過した。芦屋市内の街並みからは、この震災の爪跡が景観的にはまったく消え去り、震災の体験者だけが、さりげなく目に付くその微証（被災残欠としての亀裂、小段差、傾き）から、当時の災害の生々しいようすを思い出すことができる。意識的な語り伝えや繰り返して実施される初動研修が、きわめて重要な節目の年が到来したと言ってよい。兵庫県では、「震災復興と文化財の保護」実行委員会が主催する阪神・淡路大震災20年事業の一環として、県内を巡回する震災パネル展「震災と文化財」が実施され、平成27年（2015）1月18日にはシンポジウム「震災復興と埋蔵文化財」が開催された。

市内では、震災復興を目的とした発掘調査は既になくなり、過去の遠い出来事になったが、市域に限れば、文化財保護業務において、復興に伴う記録保存のための発掘調査報告書作成作業は完了していない。目下なお進行中のことに属し、平成8年度分第3冊目となった本書の公開もその業務の成果の一端である。

被災者はかなり亡くなり、確実に高齢化が進行している。震災時に生まれていない人々もやがて芦屋市職員として仲間入りし、枢要部を占めてくる年齢構成を迎えつつある。現状で多いのは、山麓台地の地権者の変動に伴う中規模開発であり、群衆墳や石切場跡の事前調査が今年度は進められた。また、東日本大震災に伴う復興調査が現在進行中であり、震災復興はさまざまな業務の中で継承の術が講じられねばならない。埋蔵文化財保護業務の上では、復興調査の報告書作成事業を通じて、当時の緊急事態対応を学んでいくことが、その一つの方法と思われる。

2. 震災被害状況の現段階での確認

地震動初期による壊滅的な被害 20年前の平成7年（1995）1月17日未明、淡路島北部を震源地とする大規模な地震が発生し、その当初、「兵庫県南部地震」と呼ばれた。世に言う「阪神・淡路大震災」である。芦屋市内要所においては、これまで未経験であった震度7という強烈な地震動が記録され、いわゆる「震災の帯」が市街地中央の、とくに阪神電鉄-JR線間の東西2kmに及んだ。特徴的な揺れは1.0～1.5秒間隔で起こり、老朽化した木造家屋はその前半期の大揺れが原因で、あっという間に倒壊した。数秒から10秒までの初期の地震動に損壊の集中がみられる。分厚い軟弱

な堆積層上に立地する人家や公共施設、ライフラインに壊滅的な被害がもたらされた。

未知の活断層が動いた可能性があるものの、周知の活断層を動かした地震波と泥粘土性の堆積物を伝った地震波の合一が、この震災の帯を形成したとする説など、最近は有力な考え方も大きく分かれている。地理・地質・災害の分野についての即時的諸研究のその後の進捗状況を今日の目線で照覧する必要がある。

被害統計の変化 この地震による市内犠牲者の数は、訂正が何度も加えられ、平成15年3月において6,402人と発表されており、市内死亡者は444人を数える。被災した建物は、全壊3,915棟、半壊3,571棟となっており、著しい損壊を受けた。その結果、避難者を受け入れた諸施設は、6月18日の閉鎖まで機能し、深刻かつ不自由な日常生活を強いられた数多くの市民がいたのである。その間、復旧や救援に当たった市職員の活動は、各部署において全力をあげ継続した。

第2節 震災下で進められた埋蔵文化財保護行政

1. 地震被害対応と遺跡の初期保護施策

地震が発生した平成6年度の第4四半期は、多くの避難者対応業務や文化財の所在確認、損壊状態把握に追われた。同時進行的に文化財被害状況の把握に伴う緊急課題にも直面した。平成7年2月6日には、文化庁文化財保護部記念物課の調査官や企画官の現地視察も進み、兵庫県と芦屋市も災害下の遺跡保護について、一定の方針を協議した。被災と関わる市内遺跡の面積は101haを超えることが判明し、本市の埋蔵文化財調査体制では対応は全く不可能という事態に直面した。

今後の取扱いをめぐる、被災市町には、災害救助法が適応され、該当地の広域なエリアを対象とする大きな枠組みでの復興を目指した抜本的な方針が早い時期に求められた。



第1図 兵庫県と芦屋市の位置

2. 二段構えの文化庁通知（「当面の取扱い」と「基本方針」）

街並み・人心の復旧・復興と文化財保護は容易に両立するものではない。優先順序を十分考慮した被災後の1ヶ月が経過した。その間、文化庁は、震災にある多くの自治体の現状を踏まえて、平成7年2月23日に、庁保記第144号による文化庁次長通知「阪神・淡路大震災に伴う復旧工事に係る埋蔵文化財の当面の取扱いについて」を出し、同年5月末までに着工する震災復旧のための工事について、文化財保護法に定められた諸届出および通知を広範囲にわたって不要なものとした。3月29日には、文化庁次長からの「阪神・淡路大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱いに関する基本方針について」の通知を受け、同年6月1日以降における保護手続きに関する基本原則が定められた。

被災地の早期の復興が急務であるとの認識に立ち、速やかに、その関連事業の円滑な推進と埋蔵文化財保護行政の緩和との整合性を採る方針が整っていった。また、より具体的な「適用要領」や「取扱いマニュアル」も定められ、さらに柔軟で適正な取扱いを進めた。芦屋市は平成7年6月1日から文化庁行政についても平常事務を再開させ、弾力的な確認調査と発掘調査を実施した。

3. 再起動された発掘調査と報告書の刊行

本書の公刊がその記録保存の一部を担っている平成8年度は、確認調査・発掘調査のピークの年度となった。予想した通り、発掘調査件数が増加の一途をたどり、本発掘調査も36件を数えた。兵庫県に基盤を置いた全国支援と国庫補助の財源確保によって、それら未曾有の件数の事前調査はすべて実施され、終了後の実績調査報告も関係者の努力によりものされて現在に至った。

平成24年度からは「発掘調査概要報告書」刊行のための再整理に着手し、「芦屋市文化財調査報告第95集」[芦屋市教委2013]・「芦屋市文化財調査報告第97集」[芦屋市教委2014]ならびに本書に結実するとともに、現在もその作業が継続している。このほか、単年度をまとめて概観する報告書が刊行できたのは、平成7年度[芦屋市教委1996]と平成12年度以降分の「芦屋市文化財調査報告第65集」[芦屋市教委2007]・「芦屋市文化財調査報告第72集」[芦屋市教委2008]である。その他に関しては、個別遺跡、地点ごとの報告書として、震災復興住環境整備事業や土地区画整理事業、都市計画道路建設事業にそれぞれ伴う形で刊行したものがあがり、原因者負担によって記録保存の達成に至った経緯がある。

第3節 震災復興調査における寺田遺跡の発掘成果の二、三の整理と第55地点

1. 創造的復興の事業と関係深い寺田遺跡

兵庫県は、平成7年7月にこの地震被害からの復興を「創造的復興」と位置付けている。成熟社会として21世紀を切り拓いていく方向性を示し、いわゆる「ひょうごフェニックス計画」を策定した。この傘下でさまざまな推進プログラムが作成され、課題の解決に向けて取り組みが進められた。とりわけ埋蔵文化財行政については、当初から、復興調査の長期化が予想されたので、本市では、平成8年度以降、国庫補助事業として支援調査とともに、基本的には市営の発掘調査も実施していく方針を定めた。

この創造的復興は、都市計画道路山手幹線街路事業と密接に関わり、阪神間を結ぶ主要な復興道路として位置付けられた、とくに規模の大きい月若遺跡・寺田遺跡を縦貫する計画となったことから、道路予定地隣接部を含め主として芦屋川右岸側での大規模調査が多数見込まれることになった。以下では、本地点と関わる寺田遺跡の動向のうち、本書と深く絡む弥生時代と中世についての知見の一部を整理しておきたい。

2. 黎明期の弥生時代集落の変遷解明

概述した震災復興調査は、平成7～9年度の全国支援、平成10・11年度の兵庫県支援を中心に実施されたが、その間行われた発掘調査及び確認調査において、最も対象面積の広がった寺田遺跡では、縄文・弥生・古墳時代や古代・中世を通じて震災前の成果を塗り替えるほどの調査成果がもたらされた。中でも本書で報告する第55地点との関連で、集落の遷移動態や性格づけなど、総合的な検証が可能になった弥生時代集落の動向を以下に示す。

弥生時代の前期に属する農耕開始期の環境選択については、地形が急激に下降する西側斜面に河道SR401の南層を中心に第Ⅰ様式後半～第Ⅱ様式期の生活堆積層があり（第151地点）、これが中期前葉段階にも及ぶので、集落の居住区界を考究する上に看過できない時期と遺構である。これ以西には小区画水田など生産域が広がる蓋然性は大きい。一つの証左として、第153地点における流路などの存在をあげておきたい。

第16地点（土坑墓）、第27地点（土坑）、第133地点（堅穴住居2棟・土坑・落ち込み）、第142地点（群集貯蔵穴）、第152地点（堅穴住居・集石土坑）、第153地点（河川ないしは自然流路）、第168地点（群集土坑墓）には機能の解明可能な遺構が広がっている。生活面は各所で平安時代前期以降～中世の削平を被っており、真正の前期生活面がうかがわれる場所は限られているが、低所ほど残りが良いという結果を得ている。

第I様式土器片の散布範囲は、第1地点（西半部）や第5・17・20・24地点などにもおよび、空間的にはより南北に広がっていることは明らかである。微高地や河川の自然堤防の上に居を構えた遠賀川集団の通有のありようとは異なって、東川の分岐扇状地の扇端から扇尖に向けて集住地を見い出した動的な選地が読み取れることに注視すべきであろう。

寺田遺跡自体は、ひとまず浜浜を選んで生活を営み始めた北青木遺跡（神戸市東灘区）を生成し得た集団が、第二段階の動きとして、より高度のある本庄町遺跡（神戸市東灘区）・清水遺跡・前田遺跡などへの展開を試みたのち、さらに第三段階のミクロ的な移住を伴う集落動態の渦中に生まれたものと言える。その移動形態は異なるかもしれないが、神戸市東灘区に所在する本山遺跡と、遺跡の継続性や本格的な環濠を築造しないことでも共通しており、遺構ごとの比較なども今後必要である。とくに本山遺跡では、近畿地方最古級の土器が出土しており、編年的にも、北青木遺跡の成立を越える遠賀川式土器と突帯文土器が明証できる点など、局所的な違いもまた大きいからである。本地点の弥生時代遺物は、前期・中期がみられ、前期終末～中期初頭の土器類が核をなす。混在的な共存は、遺構および包含層に認められ、遺構単位の明確な推移を追っていくが、並と並が全体の9割以上を占め、鉢は多少みられるものの、高杯や蓋の類は確認できなかった。多条沈線化傾向と貼付突帯の比率が少ないこと、櫛指波状文の採用が抑制的なことや漸移器形存在から、広義の移行期が中心であることが判明する。それは、前期後半・中期前半の居住区の上昇化・東漸化とも関係付けられ、集落の変遷を記述するにあたって大きな意義を有している。

3. 中世段階の散居型集落の展開

中世遺跡としての寺田遺跡は、先ず古代末～中世前期の建物跡や集落跡の類が増え、注目される。本遺跡内部では、第70・81・83・96・100・117・118・132・139・141地点などに顕著な遺構・遺物が見い出されており、中世集落についての分析は可能である。掘立柱建物跡の確認例は、第70地点（4棟）、第81地点（1棟）、第83地点（1棟）、第96地点（1棟）、第100地点（1棟）、第127地点（1棟）、第132地点（2棟）、第139地点（6棟）を数え、遺構の重心は現状では大きく東西の二つに分かれる点の特徴となっている。また、東の一群は第83地点の西半部の2基の土坑しかみられない建物遺構空白地帯を隔て、さらに2つの建物群に弁別できるようである。全体的にみて、建物のグレードなどは東の扇状地高位面ほど高くなる傾向が認められる。東グループ西群の第139地点では、建物規模やその密集度、相互配置からみて、最も中核要素の高いのは、空間地を挟んで南北に並存するS B103

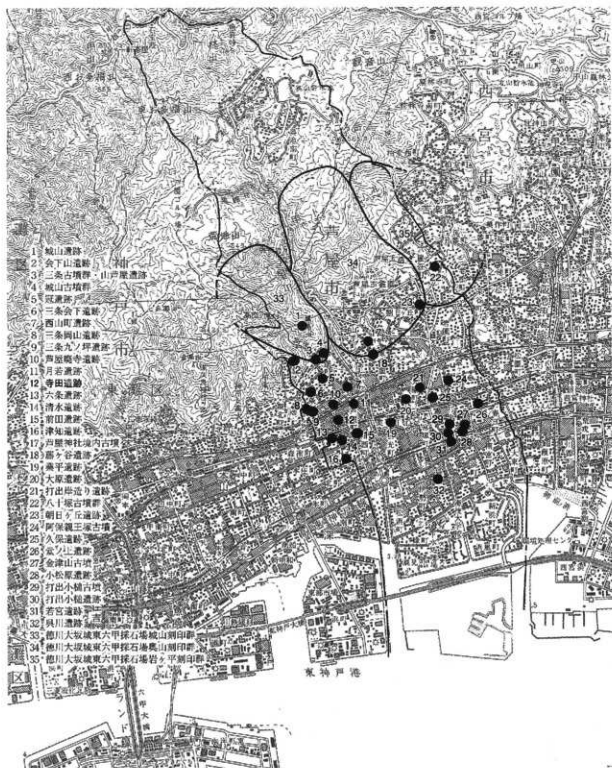
とS B104～106のグループである。とりわけS B103の建物は、調査範囲外を含め規模の大きさが注目されよう。第70・81・100地点の掘立柱建物跡は同一の大型建物に合成されることが推測され、その規模が東西5間（約11m）、南北5間（約9.5m）の総柱建築になる可能性（S B02）も少なくない。この大型建物は、11世紀末～12世紀初頭頃に比定されており、面積的にみても当地域周辺では最大クラスになるものである。この建物の周辺では、幅5mに近い堀状の遺構が東西や南北を囲郭するかのごとく存在し、他の建物を体系的に区分した上位階層の屋敷地の観を呈する。これらは東神戸～芦屋の条里型地割に規制されており、緩傾斜地形に則り共通して建物方位を西に振る。言わば、自然な建物立地であり、奈良時代や平安時代前期の建物跡が総じてそれに逆らう南北軸に近い方位を採用するのと対照的な有様を示す。奈良時代以降には、官衛的建物の存在である邸家や郷家などの公的建築物には歴史的なステージの違いが看取され、家屋の分布に土地割との結び付きの強まりを感じに近き中世世界の展開が読み取れる。居住者は例えば名主・在家層以上の階層から成り、この地域では、古代条里制と土地区分とが密接に踏襲された中世村の先駆的風景が展開したのではないだろうか。

次に、14～15世紀の中世集落については、遺物の出土は認められるものの、遺構群としての構成は前半段階より鈍い。第117～119地点では南北朝前後のものが認められ、土坑・落ち込みなどが確認でき、東川の両岸地域にやや先行する土組井戸なども検出されている（第132・141地点）。第157・150地点などを筆頭に耕作地を示す証左が多く、生産域が扇状地上に広く及んできたことも示唆している。段差のみられる耕作地の展開過程にはその傾斜地に対する開発の手法といったものも窺われる（第150地点）。第167地点のように、より上流部に集落の本体を推測させた調査地もあるので、本調査地点の成果を加えた構造的素描が今後の課題となる。

第4節 今年度の復興調査出土資料の整理作業と報告書の公開を終えて

震災の復興調査は、先ず財政的措置が大幅に図られた。次いで人的支援については、早急の支援依頼が、全国知事会会長から各都道府県知事宛に行われ、自治省と文化庁も各自治体との調整を附て、受け入れ自治体である兵庫県に各都府県・政令指定都市から専門職員が必要人数派遣された。平成7年4月に県内の遺跡調査に携わる兵庫県埋蔵文化財調査事務所に「復興調査班」が置かれ、全国の支援専門職員を受け入れる場となり、調査環境が確保された。

本書は、平成26年度の国庫補助事業として、平成8



第2図 芦屋市内主要遺跡分布図 1/50000

年度事業の出土遺物の再整理作業が実り、第3冊目に相当する発掘調査概要報告書の発刊に至ったものである。例言に示した復興調査当時の体制で実施された応急整理を継ぎ、補填、深化を試みたものである。寺田遺跡第55地点の遺物の再確認や記録の所在の確認といった基礎作業から行った。

阪神・淡路大震災は、日本という国が高齢化の兆し

を見せ始めた社会の下で勃発したまったく未経験の都市直下型地震であった。交通をはじめとする都市基盤が完全に麻痺し、崩壊することが身染みてわかった。この非常時下における発掘調査活動は、本市の歴史を辿る上に根幹となる貴重な文化遺産の数々を救うことにつながり、地域本来の歴史像の更新に大変意義ある成果と更新をたらしたのである。

第2章 寺田遺跡の調査成果

第1節 地理的・歴史的環境

寺田遺跡は、芦屋市三条町・三条南町・西山町に所在する、縄文時代後期から近世に至る複合遺跡である。本遺跡は、昭和35年（1960）の市道工事に伴って、土器が出土したことを契機に、遺跡の存在が明らかになった。昭和59年（1984）に、はじめて発掘調査が行われ（寺田遺跡第1地点）、これまで第232次に及ぶ調査が行われており（平成27年3月31日現在）、当市において最も調査地点と報告書刊行の多い遺跡である。

寺田遺跡は、芦屋川と東川が形成した扇状地上から扇状地間低地に立地しており、標高16～26mを測る緩傾斜地に展開する。周囲には、月若遺跡・芦屋庵寺遺跡・三条九ノ坪遺跡が、JR線を南に越えると、前田遺跡・清水遺跡・六条遺跡が展開しており、市域において、遺跡が濃密に集中するエリアである。特に寺田遺跡においては、阪神・淡路大震災後の復旧・復興調査と、平成12～21年度にかけて実施された都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査において、多くの知見を得ることができた。また、近年は山手幹線周辺の開発に伴う発掘調査も実施されるようになり、ますます情報量が増えつつある。なお、本遺跡の範囲は、東西約400m、南北約300mを測る（第3図）。

寺田遺跡は、既往調査から縄文時代～中近世の遺構・遺物が検出され、時代によって遺構の分布域が大きく変動していることが明らかになっている。弥生時代前期については、第1章第3節2で述べており、続く弥生時代中期頃は、遺跡北部から中央部において集落が盛行する傾向があり（第55・95・127・137・142・168・178地点）、自然流路や溝、土坑など、多様な遺構が多く検出されている。また、集落規模そのものも大きくなることが分かっている。弥生時代後期前半になると、遺構や遺物の検出率はかなり減少傾向をみせるが、今回報告する第55地点においては、第3遺構面において、大型円形竪穴住居と溝2条が検出されている。弥生時代後期後半～内土器併行期になると、遺構が増加し、方形を呈する竪穴住居も多く確認され、当地点においても、第2遺構面で多数の竪穴住居や溝などが検出されている。

古墳時代では、掘立柱建物跡や造り付け竈をもつ方形の竪穴住居跡が遺跡中央部～東部の範囲で散見される（第95・127・130・132・139・178地点）。当地点においても、造り付けの竈をもつ方形の竪穴住居などが確認されている。弥生時代後期後半～古墳時代初頭まで、当地点を含む周辺において、集落が盛行していたことが窺われる。中期には韓式系土器の系譜を引く土師器が出土することともあわせて、渡来系住民の存在が想

定できる。また、市域最大の須恵器窯や鉄製U字形銀先片、滑石製鈴鐺車など、特徴的な遺物も出土している。

古代になると、遺跡中央部をはじめとして河川被害を受けない場所を選んで掘立柱建物が多数建ち並んだようである（第1・90・127・152・168・178地点）。当地点における古代の遺構の検出は少なかったが、掘立柱建物跡を検出した。また、新羅系軒瓦などの古代瓦が出土しており、寺田遺跡の北東に位置する芦屋庵寺遺跡とのつながりを想定させる遺物も出土している。周辺の調査では、奈良時代の遺構や遺物も濃厚で、特に、第90地点からは、墨書土器や土馬などが出土している〔芦屋市教委2014a〕。墨書土器は、「大領」「少領」と書かれているものを含んでおり、「大領」「少領」は、郡司の長官と次官を指していることから、官衙的な性格が濃厚な遺物であり、菟原郡家との関わりが考えられている。なお、この「大領」「少領」を含む墨書土器5点は、平成27年（2015）1月に芦屋市指定文化財に指定されている。平安時代では、第1地点において、前期の総柱建物跡数棟が検出され、中には、表面を手斧で削った直径30cm大の柱根が残存する柱穴もみられた。また、皇朝十二銭である和同開珎も出土しており、官衙の可能性が高い調査地点である〔古代学協会1985〕。

平安時代末～鎌倉時代初めにも多くの掘立柱建物跡が確認されている。第139地点におけるこの時期のビットからは、在地の東播磨系須恵器鉢とともに日宋貿易に伴ってたらされた黄釉鉄絵陶器盤（平成25年度芦屋市指定文化財）が、掌大に割られて埋納されており、大いに注目されている。



第3図 調査地位置図 1/5000

第2節 第55地点の調査

1. 調査に至る経緯

芦屋市三条南町23-2に所在する当該地（敷地面積約1,530㎡）は、平成7年（1995）1月17日未明に発生した阪神・淡路大震災による復旧・復興に伴う共同住宅建設が計画された。当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である寺田遺跡の範囲内に位置しており、基礎底までの掘削深度が5mに達することから、本市教育委員会は平成7年11月28～30日の実働3日間において、確認調査を行った。その結果、調査地に設定した第1～3トレンチのすべてにおいて、遺構・遺物包含層が確認された（第4図）（芦屋市教委1996）。そのことから、地下駐車場を伴う建築工事によって損壊を受ける920㎡については全面調査が必要と判断された。

この結果を受けて、本市教育委員会は、平成8年（1996）4月3日から8月9日にかけて、本発掘調査を実施した。

2. 発掘調査の方法

この調査では、排土置き場を確保するため、調査区を南半（Ⅰ区）と北半（Ⅱ区）に分けて、掘削した。Ⅰ層群（この用法については後述する。）は、現代の宅地造成に伴う地形改変によって大きく攪乱を受けていることから、表土・盛土層およびⅠ層群を重機によって除去し、Ⅱ層群上面より遺構の検出を開始した。Ⅱ層群を掘り込む遺構群については、遺構埋土が基盤層であるⅡ層群と区別が難しく、また、遺構検出が困難であった。このため、Ⅱ層群上面、Ⅱ層群上部、Ⅱ層群下部～Ⅲ層群上面の3段階において調査せざるを得なかった。Ⅱ層群の遺構の調査後、Ⅲ層群を除去しⅣ層群上面において遺構検出や遺物取り上げを行ったあと、Ⅴ層群の遺構・遺物の有無を確認するために、2m×2mの深掘トレンチを4基設定して、掘削した。なお、全調査区を対象として、平面直交座標系第Ⅴ系（日本測地系）に乗った5m方眼の基準杭を打設して地区割りを行い、図面作成を行うとともに、Ⅱ層群上部・Ⅳ層群上面の調査段階において、気球による写真測量を実施した。遺構平面図および、遺構断面図は、1/10・1/20で作成した。

なお、撮影は、35mmリバーサルフィルム・35mmモノクロフィルムを使用して記録を行った。

3. 発掘調査の経過

4月3日にⅠ区（調査区南半）から調査に着手した。計4面の遺構面を確認した後、6月10日に埋戻しを行った。Ⅱ区（調査区北半）の掘削は6月12日から開始し、Ⅰ区に対応する遺構面を順次調査した後、埋戻しを行って、8月9日に調査を完了した。



第4図 調査区配置図 1/800

4. 調査区の層序

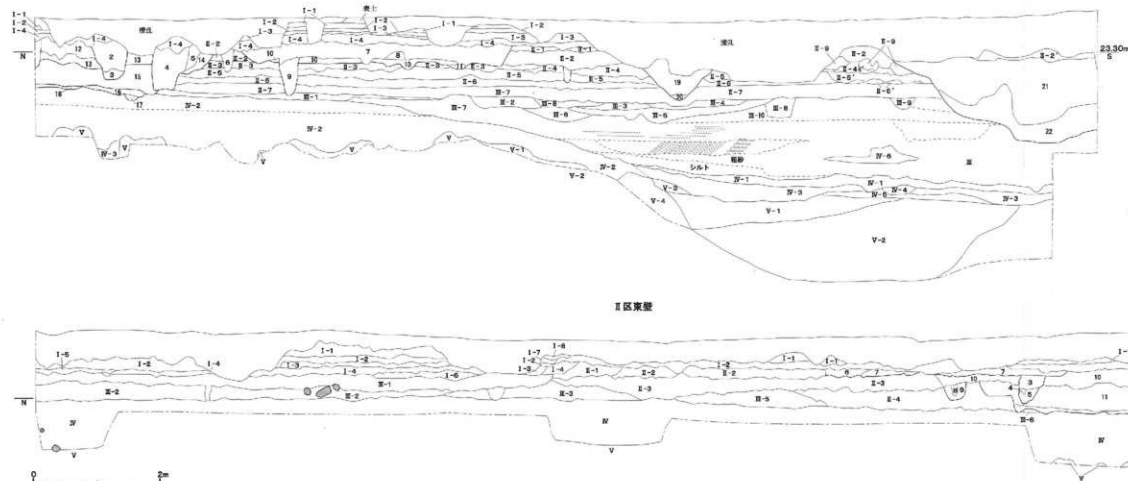
当該地は、扇状地に特徴的な土石流状の堆積であり、その堆積状況は調査区内において差異が認められるが、大きく次のように区分することができる（第5図）。なお、同一の成因をもつとみなした土層をまとめて「層群」と呼称している。

表土・盛土層…調査前の宅地造成の盛土・整地層。

Ⅰ層群…明灰色細粒砂層。間層として明灰白色シルト層を挟む部分がある。下部において酸化マンガンを沈着し、近世陶磁器を含むことから、近世以降の水田耕作土と考えられる。出土遺物は弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・陶器・磁器・瓦など多岐にわたっており、Ⅱ層群との明確な時期差を示す瓦質羽釜や中国製青磁碗、肥前系磁器碗、備前焼鉢が見られた（『実績報告書』所収「包含層出土遺物実測図」17～22）。さらに、寺田遺跡の特徴を反映する新羅南朝系軒丸瓦（第63図478）も出土している。

Ⅱ層群…暗灰褐色・黒褐色細粒砂～中粒砂層で、層厚は最大で60cmに達する。基本的にⅢ層群系堆積物の風化・土壌化層と推定されるが、弥生土器・土師器・須恵器・磁器・土製品・石器など多様な遺物を包含することから、土壌化とⅢ層群起源上の再堆積が長期にわたって繰り返された土層とみるべきかもしれない。Ⅰ層群の影響により、上部において酸化マンガンの塊状に集積しており、この部分が第Ⅰ遺構面に相当する。Ⅱ層群は、Ⅱa層（上位）、Ⅱb層（上位から中位）、Ⅱc層（下位）によって、包含する遺物に漸移的な変化が認められる。Ⅱa層は、弥生土器（畿内第Ⅱ様式・第Ⅴ様式）を少量含み、弥生時代末から古墳時代前期の土師器、古墳時代中期から平安時代初め頃までの土

1 区東壁



Ⅱ区東側

(1 区画型)

- [illegible]

- [illegible]

(continued)

- [illegible]

第5図 調査区東壁土層断面図 1/60

師器・須恵器をコンスタントに含むが、中世に下る遺物は中国製白磁がわずかに混在するだけで、瓦器・東播系須恵器・陶器や土製煮炊具である埴・釜類は見られない。なお、特徴的な遺物としては、タコツボ（第64図481）や土鍾（第64図482）がある。Ⅱb層から出土した遺物とⅡa層から出土した遺物に明確な時期差は見出せないが、総じてⅡb層出土の土器の方が残存率が上がる傾向がある。特徴的な資料では、楕円形の線刻が二つ並ぶ弥生時代後期の絵画土器片（第64図483）、叩石（第64図484）、伊壁片（第64図485・486）が含まれている。また、焼土集中部分には、竜の破片がまとまっていた（第64図487・488）。そのほか、Ⅱc層は、Ⅱa層・Ⅱb層とは異なり、ほとんど須恵器が含まれておらず、弥生時代末から古墳時代初頭の土師器が主体である。これらの様相から、Ⅱa層・Ⅱb層とⅡc層の形成時期は異なり、Ⅱc層が古墳時代前期頃に堆積し、Ⅱa層・Ⅱb層の堆積は平安時代前期を下限すると見ておきたい。

Ⅲ層群…黄褐色粗粒砂層。一部、水平のラミナ状堆積がみられ、その下位層には斜め方向のラミナ状堆積が確認される。最下部Ⅳ層群との境には明黄白色の粘性の強いシルトが堆積する。『実績報告書』には、当層において遺物を含まないと記載されているが、再整理時に上位層に由来する土師器やⅣ層群上面の遺構面に伴う第Ⅱ様式の弥生土器を少量確認した（第56図371～376・第59図419・420）。

Ⅳ層群…黒褐色シルト層。粘性が強く、部分的に10～20cm大の礫からなる礫層を挟む。東壁において、南に向かって傾斜していく様子が確認された。上部において第Ⅱ様式（中期前葉）の土器と、石廬丁や石斧など磨製石器が出土している。これらの遺物は、第4遺構面に帰属するものとして扱っている（第56図377～392・第59図421～431・第60図432～436・第61図437～441・第62図442～475）。

V層群…明黄褐色粗粒砂層。層厚は、最大で130cmを測る。ラミナ状堆積が認められる。部分的に10～30cm大の礫からなる礫層を挟む。遺物は確認しておらず、無遺物層と考える。

なお、確認調査時の土層と本調査の土層の対応関係は、以下のとおりである。Ⅱ層群は、確認調査時の第4層（包含層）に相当する。ラミナが顕著で洪水由来と考えられるⅢ層群の多くは、確認調査時の第5層に、Ⅲ層群の最下部のシルト層は、確認調査時の第8層に対応する。『第27集』で、第5層出土として報告した弥生時代後期の竜底部や内面に暗文が観察できる瓦器は、より上位から掘り込まれた遺構に伴うものとみて大過なかならう。また、Ⅳ層群は、確認調査時に第9層とした泥炭層を指す。

5. 検出遺構

本発掘調査では、Ⅱ層群上面、Ⅱ層群上部、Ⅱ層群下部からⅢ層群上面、Ⅳ層群上面において、合計4面の遺構面を検出した。以下、上位遺構面から記述する。

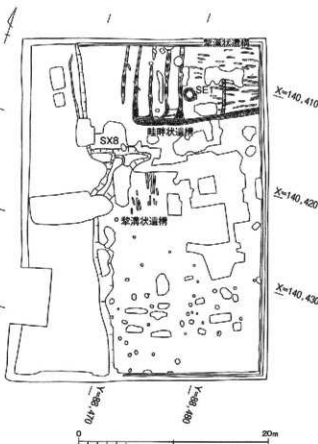
① 第1遺構面（第6図・図版1）

Ⅱ層群上面で検出した近世を下限とする遺構面である。Ⅰ層群を埋土とするピット・畦畔状遺構・犁溝状遺構・井戸（SE1）・性格不明遺構（SX8）が確認された。

ピット 調査区南半に多く、土師器・須恵器片を伴うが、遺構の年代を決定できる遺物は乏しい。

畦畔状遺構・犁溝状遺構 畦畔状遺構は調査区北東部において南北方向に6条検出された。明灰白色細粒砂が畦畔状の高まりをなすようであるが、これらの南端をつなぐ東西方向の畦畔状遺構下は、溝状に落ち込んでいる。各畦畔の幅は約30cm、畦畔間は約1.2mを測る。犁溝状遺構は、平均して幅10cm、深さ3cmを測る浅い溝で、その検出状況と形態から犁溝と考えられる。調査区北東部では東西方向に、調査区中央部では南北方向に走向する（第6図・図版1）。なお、一部は畦畔状遺構と重なって検出されている。

井戸 SE1は調査区北東部に位置しており、掘方の一部が畦畔状遺構の下位となっているので、SE1が畦畔状遺構に先行することがわかる。掘方は延約1.5



第6図 第1遺構面平面図 1/400

mの円形で、井戸枠として人頭大の花崗岩を積むが、明瞭な義込め土は認められない。井戸枠は、5～6段の石積みからなり、1～3段目までは約15～20cmの角礫を積み、4段目から上部は、少し小ぶりな10～15cm程度の重角礫を積み、枠の内径は約0.6m、深さ約1.1mの円形を呈し、底面は平坦である（第6図・図版1）。透水層となりうるV層群までは掘り抜かず、IV層群中で止まっている。弥生土器・土師器・須恵器・白磁・鉄製品が少量出土しており、中国製白磁碗（第24図1）、鉄滓（第24図2）やIV層上面出土の第Ⅱ様式壺の口縁部片（第56図379）が認められた。

性格不明遺構 SX8は、調査区西辺で検出された東西65m、南北50mの溝状の掘り込みである（第6図）。埋土は、明灰色シルト～細粒砂ブロックからなり、人為的に埋め戻された可能性がある。南部は擾乱により大きく失われていたが、南西方向に開いている。土師質や瓦質の羽釜と東播系須恵器碗・鉢（第24図3～8）が主体で、下位層に由来する第Ⅱ・第V様式の弥生土器や石器（第24図9）、古墳時代～奈良時代の土師器や須恵器、18世紀のくわんか焼1点などが混入している。性格は不明であるが、明らかに中世後期に下る遺構といえる。

② 第2遺構面（第7図・図版2）

II層群上部において確認したもので、弥生時代後期から中世までの独立柱建物・堅穴住居・焼土集中遺構・粘土集中部・溝・土坑・地滑り状の不定形の落ち込み等、多様な遺構が集中的に検出された。

独立柱建物 確実なものとして2棟が確認されている（SB1・3）。このほか、調査区南端、SI10の東側に、類似した特徴的な柱痕をもつ柱穴群が南北方向に4基並んでいたが、SB2と名付けたが、東西方向の柱穴をみつけることはできなかった。これらの柱穴の埋土は、茶褐色～暗褐色粗粒砂が主である。SB2の柱穴から遺物は出土していない。さらに、調査区東部において、古墳時代の堅穴住居（SI9・SI15）を切っている柱穴群が見出されるなど、多数の方形ピットを検出した。これらの中には明確な柱痕を伴うものや底面に柱の痕跡とみられるものや、明確な遺物として配列を組むことができなかった。

SB1は調査区の南東部に位置し、掘乱により北辺は失われているが、東西2間×南北2間と推定される。確認できる柱間距離は1.7mを測り、真北から約15度東偏する（第8図・図版3）。検出された柱穴は7基（SB1-P1～7）で、掘方は60～80cmで、深さは35～50cmを測る。埋土は暗灰褐色～明灰褐色系のシルト～細粒砂を主体とし、いずれも焼土を含む。確認された柱痕は暗灰色系である。柱穴から出土した遺物はいずれも小片であるが、古墳時代後期から飛鳥時代の須恵器杯・壺・甕や内面に暗文を有する精良な胎土の土師

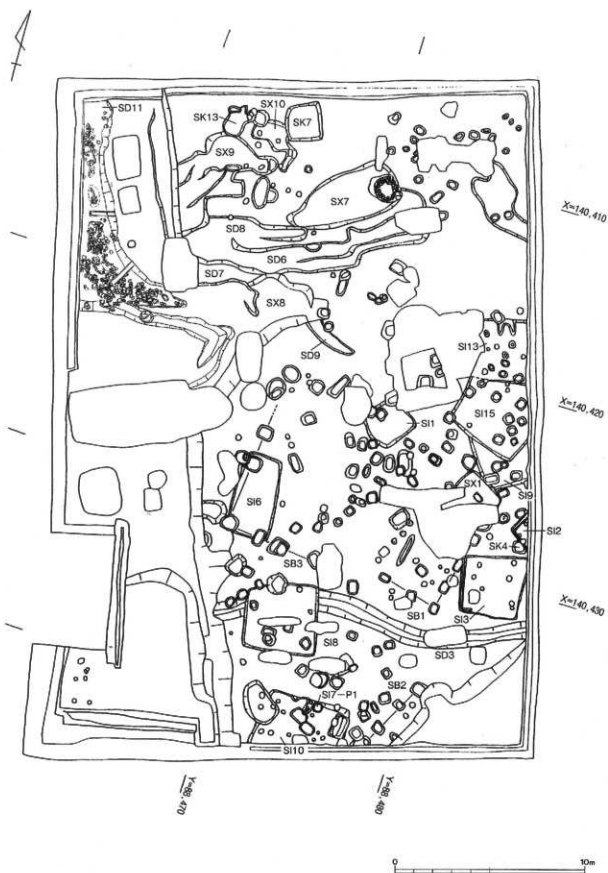
器杯である（第25図10～12、第26図14～18）。柱穴の掘方は方形で規模も60cm程度であることや、古墳時代の堅穴住居（SI3）を切ることから、本遺構は飛鳥時代から奈良時代のものであると考えられる。なお、この遺構の北西部には後述する焼土集中ピット1・2が位置する。

もう1棟は、SB1の西側に位置するSB3である（第9図・図版4）。南辺と西辺の柱穴列を確認したのみで、東西3間×南北2間が確認されているが、さらに北にのびる可能性がある。確認できる柱間距離は、1.5～1.8mである。建物は、真北から約9度東偏する。柱穴の掘方は1m前後の方形を呈し、深さは約20cmを測る。埋土は暗灰褐色～灰褐色中粒砂～粗粒砂を主体とし、明黄白色シルト質粘土の柱痕が明瞭に検出される（SB3-P1～3）。いずれのピットも、柱痕の底面を10～20cm大の花崗岩で囲むように固めている。柱穴からは土師器片・須恵器片が出土しており、古墳時代中期の須恵器杯片や土師器片がみえる（第25図13、第26図19～22）。ただし、SB3の柱穴は、鍛冶遺構に伴うと考えられるSI6を切っているため、これらの遺物がSI6に由来する可能性は高い。柱穴の規模や形態に加えて、当地域における堅穴住居から独立柱建物への変遷を考慮すると、7世紀初頭以降の建物と推定できる。

堅穴住居 遺構検出時には13基（SH1～10・13～15）と認識されたが、その後の再検討や図面の整理により、9基（SH1～3・6・8～10・13・15）に集約された。とくに調査区東部では何度も建て替えがあったようで遺構が錯綜している。しかも、これらの遺構のベースが暗灰褐色・黒褐色細粒砂～中粒砂層のII層群であるために、個々の遺構の判断や切り合い関係の認定は困難であった。ここでは、集約以前の13基の概要も記しておく。なお、SI10・13は、北壁中央に竈をもつ堅穴住居である。

SI1は調査区中央やや東寄りに位置しており、一辺約2.5mのやや不整形な方形を呈する（図版5）。炉跡・柱穴等は検出されなかった。埋土は、暗褐色～明灰色細粒砂で、一部焼土を含む。少量の土師器・須恵器片と被熱したスサ入の壁土（第28図38～41）が出土しており、須恵器杯（第27図23）や甕体部片がみられることから、6世紀中頃～後半の遺構と判断した。

SI2は北西隅のみ検出されており、大部分は調査区外にのびている（図版5）。調査区東端土層断面図（第5図）には、SI2に伴う主柱穴（第5図第17層）と硬化した床面の存在が確認できた（第5図第16層）。堅穴住居の深さは10cm程度で、埋土は暗灰褐色系でシルト～細粒砂を呈する。土師器・須恵器片が出土している。区内式併行期の土師器甕や高杯の破片とともに、須恵器杯（第27図24）や壺口縁部（第27図25）が出土しており、SI1と同時にからやや新しい時代の遺構



第7図 第2遺構面平面図 1/200

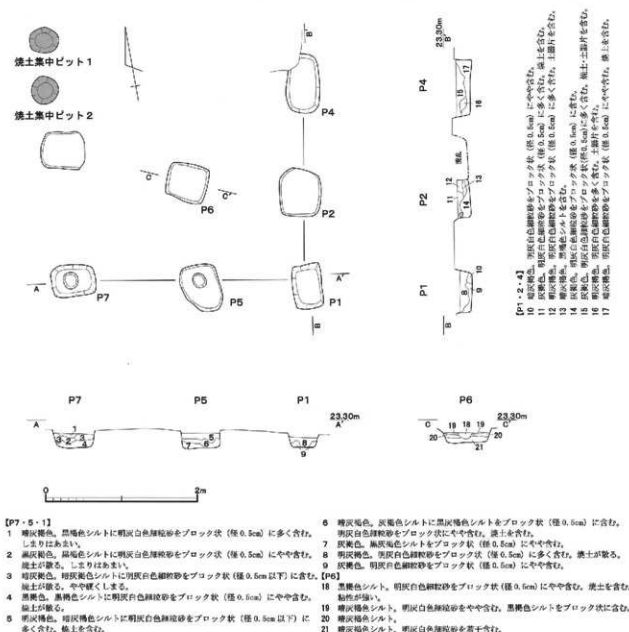
と推定している。また、S I 2内ビット3からも土師器甕体部片が出土しているが、堅穴住居に伴うものかどうかは不明である。なお、南西端部には、炭化物も検出されている。また、幅約20cmの周溝が巡り、床面において、ビットも多数検出されているが、主柱穴を確認するに至らなかった。

S I 3は調査区南東部、S I 2の南に位置する。一辺約3.5mの方形プランをなし、周溝が認められる(第10図・図版5)。埋土は暗褐色～黒褐色細粒砂を呈し、深さは検出面から約10cmを測る。主柱穴と考えられるビットが、何基か確認できたが、明確な判断はできなかった。周溝埋土は、黒褐色細粒砂を呈しており、土器を含む。床面直上からは、布留式甕3点(第27図29～31)と砥石2点(第27図32・33)がまとまって出土しており、竈的なみで一括性の高いものである。こ

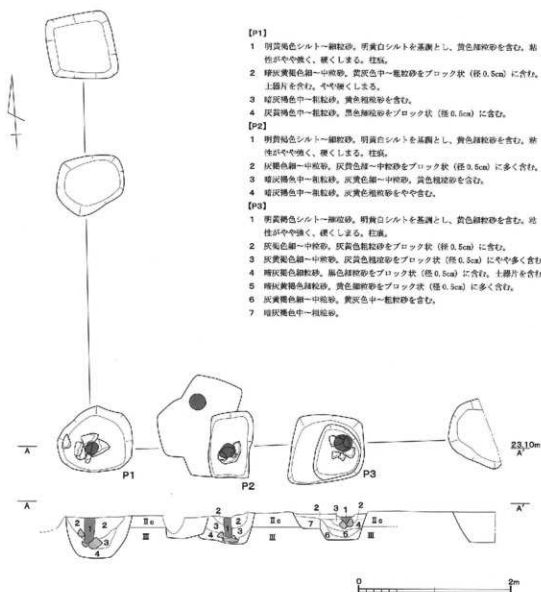
のほか、山陰西部系とみられる二重口緑壺(第27図26・27)や小型丸底甕(第27図28)、布留式甕の破片や叩石状の円礫、弥生土器の高杯などが出土している(第28図42～45)。これらの土師器は布留2式の範疇で捉えられるので、その時期の堅穴住居と考えられる。

S I 4については、S I 2の位置に検出された遺構をS I 4とした遺構配置図があるが、それ以外にS I 4とみせる遺構の記録がないので、便宜上、S I 2の下位遺構と想定することにした。須恵器小片が1点あるが、それ以外はすべてS I 3より幾分古めの土師器で、山陰系の甕(第27図35)や高杯(第27図36・37)の様相から、布留式併行期の遺構と判断した。

S I 5は、I区調査時に調査区北東端で認識されたが、II区の調査によってS I 15に統合されたようである。弥生土器片(第30図77)や須恵器片(第30図78)



第8図 SB1平面図・土層断面図 1/50



第9図 SB3平面図・土層断面図 1/50

が少量混入しているが、土器類の主体は既ね布留式期古相のものである（第29図46～52、第30図76）。中には、阿波から搬入された広口壺（47）もみられる。

S I 6は調査区中央西寄りに位置し、長軸約4.5m、短軸約2.5mの長方形を呈する（第11図・図版5）。遺構検出面において、既に部分的に灰黄色シルト質粘土による貼床状の面が認められたことから（第11図第8層）、貼床状遺構の掘方の可能性もある。この貼床状の面に伴って、鍛冶炉の底部が検出されている。鍛冶炉は、径約15cmで中央が青灰色に還元しており、外縁部が赤褐色に酸化している。また、鍛造剥片の可能性がみられる剥片が分布するエリアも2ヶ所確認された。この炉周辺より、碗形滓（第30図79～83）や炉壁片（第30図84～88）が出土している。土器類は少量の弥生土器を含むが、中心となるのは、布留式期の甕・高杯、甕（第29図53～57）などの土器で、須恵器短頸壺蓋や杯身（第29図58・59）などもみられる。なお、

53は東海系の土器である。79～83は形態と表面観察から精錬炉に付随する碗形滓とみられることから、鉄器製作工程以前の鉄器素材工程を含む工場の存在が考えられてよい。第29図59の須恵器などから、5世紀末に下る遺構と考えたい。

S I 7は、S I 10の検出に先立って調査区南西部で検出していた遺構であるが、S I 10の上層埋土と判断された。弥生土器・土器器・須恵器が出土しているが、遺物の時期にはばらつきが著しい（第29図60～64）。北西端にみられた粘土集中部で弥生時代中期前葉頃の弥生土器甕（第29図60）や6世紀後葉に下る須恵器杯身（第29図64）がみられた。

S I 8は調査区南部に位置し、一辺約3.8mの方形プランをなす（第12図・図版5）。周溝・炉跡は認められないが、床面には暗灰褐色シルト～細粒砂による貼床状の構造が認められた。埋土は暗灰褐色～灰褐色を呈する。弥生土器・土器器・須恵器や炉壁の細片が

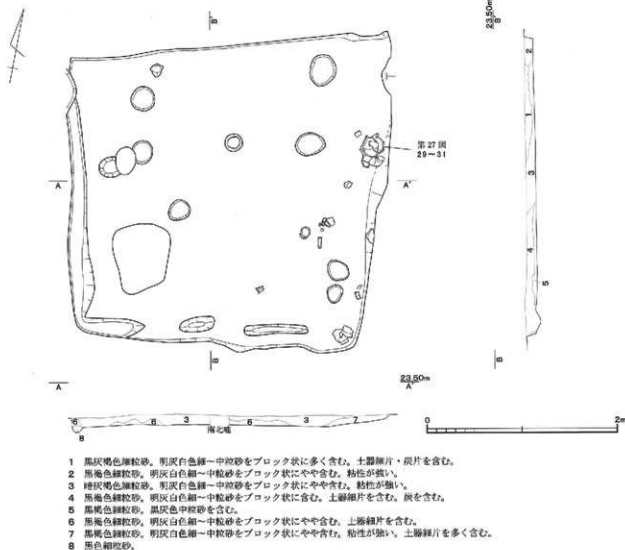
出土している(第29図65~69)。V-5段階までのV様式系高杯69や庄内1式の甕66など、近在の弥生時代後期包舍層や遺構からの二次的堆積物も含むが、住居群の配置からS I 3と前後する経営時期が想定できる。布留式新段階前半に位置付けられる甕65を指標とする年代の堅穴住居と考える。なお、石織(第31図90)や中世に下る瀬戸美濃焼版(第31図91)の混入もみられる。なお、主柱穴と想定される位置に、やや規模の小さなピットが散見される。

S I 9は調査区中央東端に位置しており、東部分は調査区外にのび、北半はS I 15に切られるが、一辺約4.2m前後の方形プランをなすと想定される。床面中央には炭片や焼土粒が集中する部分がみられ、炬を伴う可能性がある。一連の住居群の中では最も古い様相を帯びる土師器を主体とするが(第29図70~75)、少量の須恵器小片が混じり、鉄器の加工に用いられたとみられる軋石2片(第33図99・100)も出土している。他の資料を勘案すると第V様式~庄内式前期前半の堅穴住居の時期を示唆する。明確な布留式甕75なども存在

するが、多くの遺物は前述した時期幅に入り込むので、布留式期に下降する住居跡とは考えられない。

調査区南端において検出されたS I 10は、南半が調査区外で西辺をS K 5に切られるが、一辺約4.7mの方形プランをなすと考えられる(第13図・図版5・6)。埋土は暗雲色砂質土を呈する。北壁中央の竈は、堅穴内の裾部を灰色シルト質粘土で構築しているが、上部が削平されているため、天井部と煙道部は確認できなかった。出土遺物は土師器・須恵器である(第32図96~98、第33図101~108、第34図109~122)。なお、竈の内側から土師器壺(113)、甕(114・115)が、竈の東側から土師器甕口縁部片(97)と体部片(106など)、土師器鉢(110・111)がまとまって出土している。

S I 10出土の遺物は、庄内式期の鉢や甕と布留式期の小型丸底釜、高杯脚部、甕口縁部および体部に加えて、6世紀以降の土師器甕の把手や須恵器杯壺・杯身・甕口縁部などで時期にばらつきがある。しかし、竈の存在を考慮すると、庄内式併行期の遺構と重複する位置に5世紀以降に構築された堅穴住居とみるべきであ



第10図 S I 3平面図・土層断面図 1/40

る。S I 10の上層埋土とみたS I 7では、第29図64のような須恵器杯身や第31図89の土師器甕片がみられることも矛盾しないであろう。

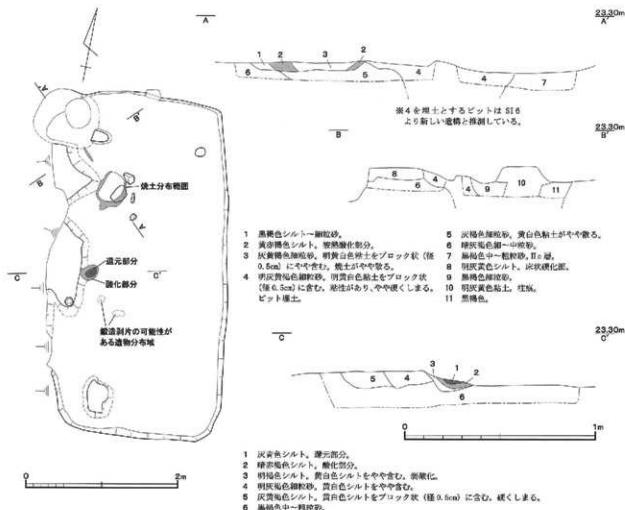
S I 13は東部が調査区外に、西部が擾乱により大きく失われている。また近世以降の水田耕作土が堅穴住居床面付近まで及んでいたこともあり、遺存状況はよくなかったが、東西2m以上の遺構である(第14図・図版6)。北壁中央の竈は、灰色シルト質粘土で構築した裾部の基部のみが検出されたが、燃焼部中央において支脚の礎が遺存していた。また、礎の南側では焼土面が確認された。形態の判明する土器は全体的に新しく、5世紀末～6世紀の土師器を主体とする(第34図123～128)。なお、123は正内3式後半～4式初頭に位置付けられる搬入庄内河内型甕である。127の丸底の甕や長胴傾向のみられる甕128は、竈の東側からまともに出て出している。これらは他の土器類より圧倒的に残存率が高く、5世紀末～6世紀初頭頃のもののなかで、住居跡の年代をここまで下げる根拠となる。

S I 14も、S I 15と同様にS I 15に統合されたと考えられる。残存状況のあまりよくない庄内2～4式併行期の大形壺・甕・高杯・小型丸底甕などの破片と弥

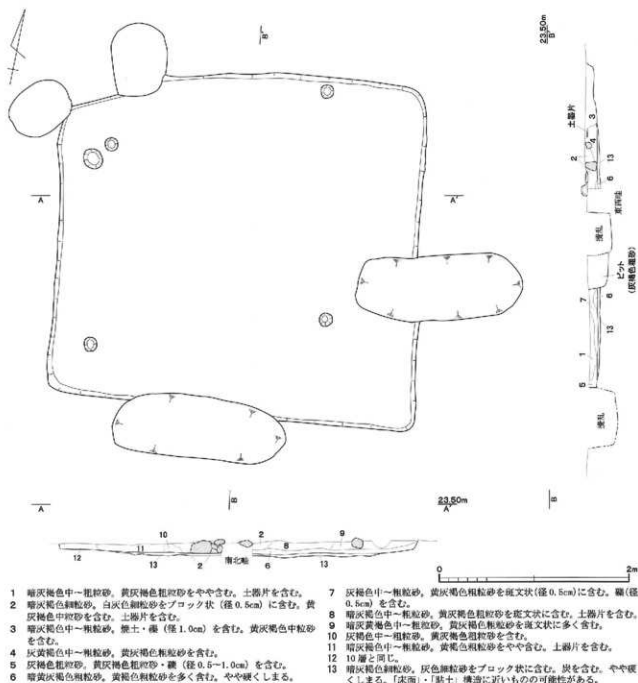
生時代後期の甕片が出土している。

S I 15はS I 9・S I 13を切り、北東隅が調査区外に広がる(図版6)。一边約4.7mの方形プランをなす「実績報告書」段階では考えられていたが、出土遺物やS I 13が甕を有することを勘案すると、S I 13がS I 15を切る遺構とみるべきである。S I 15からは5世紀代の須恵器杯蓋(第34図140)や6世紀代に下り得る甕把手(第34図139)とともに、庄内式から布留式併行期の土師器が出土している。中には庄内式併行期の加飾二重口縁甕(第34図129)や東海地方からの搬入品と思われる精製の甕形壺(第34図130)もみられるが、最も残存状態の良いものは布留式1式期の高杯(第34図133)であり、切り合い関係のあるS I 9より新しい布留式期の遺構とみておきたい。時期の下る須恵器杯や甕把手は、むしろS I 13に帰属するものであろう。

焼土集中ビット・粘土集中部 焼土集中ビットはビット中に白灰色シルト質粘土と焼土が詰まったもので、調査区南東部において5基が検出されている(焼土集中ビット1-1・1-2・2-3・4)。焼土集中ビット1-1・1-2は、径40cmを測り、SB1の北西側



第11図 S I 6平面図 1/50・土層断面図 1/20



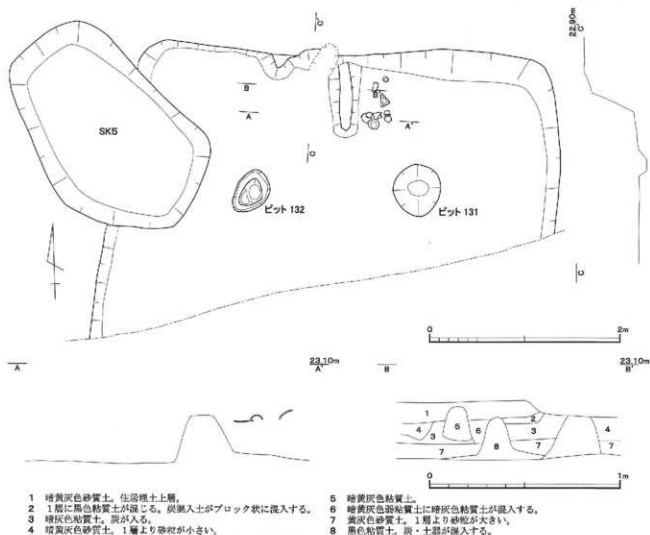
第12図 S18平面図・土層断面図 1/40

で検出された。

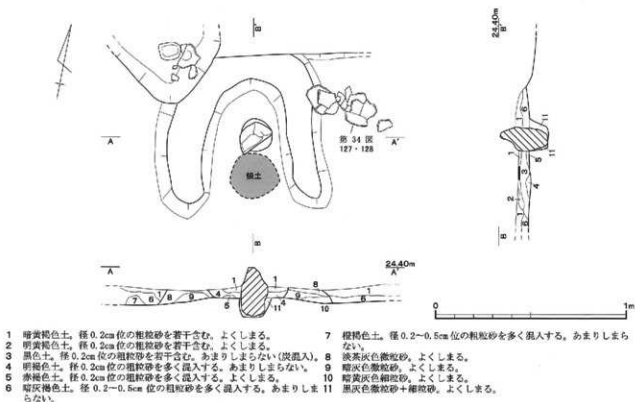
焼土集中ビット1-1では、板状のブロックで、よく酸化しているがスサを含む焼土が確認された。吸炭したためか黒褐色を呈する面をもち、炉壁を思わせるものである。焼土集中ビット1-2からは、焼土に加えて、土師器・須恵器も少量出土している。第36図には焼土集中ビット1(1-1・1-2のどちらかは不明)・2から出土した焼土の写真を示している。SX1に接する位置でも焼土集中ビット3が、南東部で焼土集中ビット4が検出されている。このうち、南東部に位置する焼土集中ビット4は、4層に分けられ、1・3層は焼土を含む(第15図)。

この焼土集中ビットに開まれるように、東西3m、南北3mの範囲で、明黄白色のシルト質粘土集中部(SX1)が認められた(第15図)。SX1は、攪乱によって大部分が失われている上に、1層群の水田によって上面が削平されていると考えられることから、全容は明らかではないが、粘土を貼った床状のものであったと推測される。

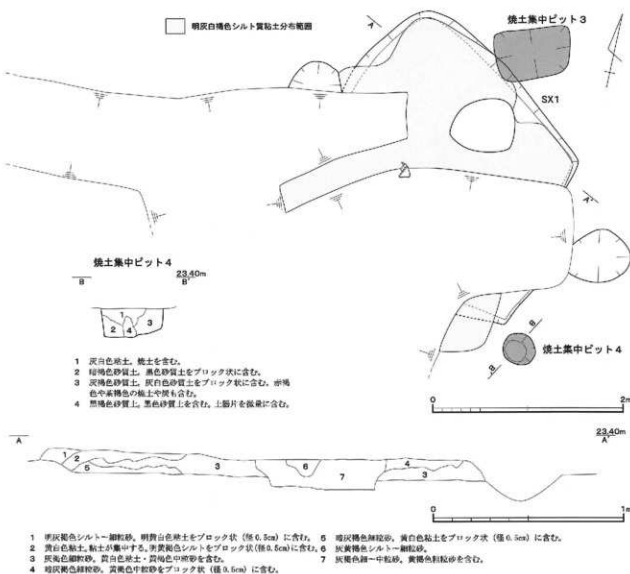
出土遺物には、布留式の土師器や奈良時代前後の土師器・須恵器(第36図141～147)がみられる。以上のことから、炉壁状の焼土をもつ焼土集中ビットや粘土集中部(SX1)は、鍛冶関係の遺構の可能性も推測される。その時期については、古墳時代よりも奈良時



第13図 S I 10平面図 1/40・土層断面図 1/20



第14図 S I 13平面図・土層断面図 1/20



第15図 SX1平面図 1/40・土層断面図 1/20

代の可能性を考えている。

溝 溝は6条検出されている（SD3・6～9・11）。

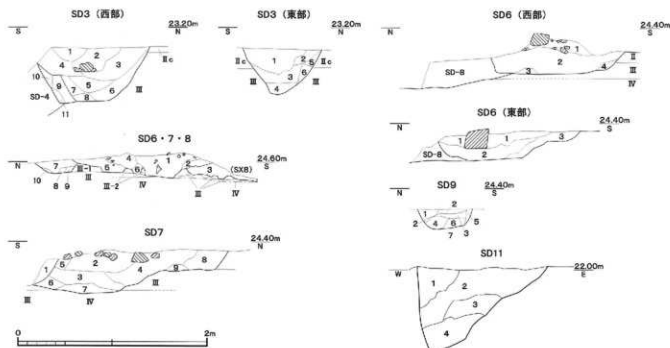
SD3は調査区南部を東西方向に緩やかに蛇行して走る溝で、SI8と切り合い関係を有する。幅は東部で約85cm、西部で約12m、深さは約50cmを測る。断面形態は東部が三角形であるが、西部では逆台形を呈する（第16図・図版6）。西部と東部では、堆積状況が異なるが、埋土はⅡ層群と類似した暗灰褐色細粒砂～中粒砂が堆積しており、特に流水を示す堆積状況は認められなかった。

伴出する遺物はあまり多くなく、弥生土器に限られる（第36図148～159）。生駒西麓部から持ち込まれた垂下する口縁部を有する広口壺148や腰岐ないしは中河内からの搬入品と思しき153、紀伊・和泉方面の立ち上がり口縁の影響を受けた第V様式壺155など、他地域との交流をうかがわせるものを含めて、第V様式前半に比定し得る。よって、遺物の様相からも、SD

3はSI8に先行するといえる。

SD6～8は、調査区北部において東から西方向に走る溝状の遺構である。この3条の溝は切り合い関係にあり、SD8はSD6に切られ、SD6はSD7に切られる（第16図・図版7）。

SD6は、幅約1.4～1.5m、深さ約30～35cmを測り、東西方向を指向する。底面は段があるが、概ね平坦である。花崗岩礫が密集して出土しており、10cm程度の礫が主体だが、約30～40cmの礫も混じる（図版7）。その間からは古墳時代の須恵器や古代瓦とともに、中世の土師質土器・東播系須恵器・瓦質土器・陶器（瀬戸美濃焼・備前焼・丹波焼）・板目調整の瓦などが出土している（第37図160～167、第38図195・196、第40・41図208～211）。なかでも羽釜の量が圧倒的に多い。へそ皿162、備前焼壺163・165、東播系須恵器鉢166、土師質焼成の羽釜167をはじめとする土師質・瓦質羽釜、瓦質塀の脚部196などからみて、SD6出土遺物の主たる年代は13世紀後半～14世紀のようであ



【SD3】

(西部)

- 1 暗灰褐色細～中粒砂。黄灰褐色細粒砂をブロック状 (径 0.5cm) に多く含む。礫 (径 0.3～0.5cm) を含む。やや硬くしめる。
- 2 暗灰褐色細粒砂。暗黄褐色シルト～細粒砂を斑文状 (径 0.5cm) に含む。黄褐色風化礫 (径 0.2～1.0cm) を含む。下部に礫 (径 5.0～10.0cm) が入る。粘性がやや強い。
- 3 灰褐色細～中粒砂。黄灰褐色粗粒砂を多く含む。礫 (径 10.0～40.0cm) をやや含む。
- 4 明灰褐色細～中粒砂。明灰白色細粒砂をブロック状 (径 0.5cm) に多く含む。
- 5 灰褐色中～粗粒砂。黄灰褐色粗粒砂を含む。礫 (径 2.0～4.0cm) を多く含む。
- 6 黒褐色粗粒砂。黄灰褐色粗粒砂を含む。黒褐色細粒砂を含む。
- 7 黄灰褐色粗粒砂。礫 (径 0.4～2.0cm) を含む。
- 8 暗黄褐色。7層と類似。黒褐色細粒砂を含む。
- 9 黒褐色細粒砂。暗黄褐色粗粒砂を含む。SD 4の埋土の可能性がある。
- 10 灰黄褐色中～粗粒砂。明灰色中～粗粒砂をブロック状に多く含む。やや硬くしめる。SD 4の埋土の可能性がある。
- 11 黒灰褐色粗粒砂。SD 4の埋土の可能性がある。

(東部)

- 1 暗灰褐色中～粗粒砂。黄褐色粗粒砂・礫 (径 0.4～1.0cm) を含む。
- 2 黒褐色中～粗粒砂。黄褐色粗粒砂をやや含む。
- 3 暗灰褐色粗粒砂。黄灰褐色粗粒砂をブロック状 (径 0.5cm) に含む。礫 (径 0.3～1.0cm) を含む。
- 4 暗黄褐色粗粒砂。礫 (径 1.0～3.0cm) を含む。
- 5 黒褐色粗粒砂。IIc層。
- 6 黄褐色粗粒砂。III層。

【SD6・7・8】

(SD7)

- 1 暗灰褐色細～中粒砂。黄褐色粗粒砂・礫 (径 0.3～0.5cm) を斑文状 (径 1.0cm) に含む。礫 (径 5.0～10.0cm) を含む。ややしめっている。
- 2 灰褐色細～中粒砂。明灰色細粒砂をブロック状 (径 1.0cm) に含む。黄褐色粗粒砂を斑文状 (径 0.5cm) に含む。
- 3 暗灰褐色中～粗粒砂。黄褐色粗粒砂を斑文状 (径 0.5～1.0cm) に多く含む。II層群の可能性もある。しめりは甘い。

(SD8)

- 1 灰褐色細～中粒砂。黄褐色粗粒砂・礫 (径 0.3～0.5cm) を多く含む。明灰色細粒砂をブロック状 (径 0.5cm) に含む。
- 2 暗灰褐色細～中粒砂。黄褐色粗粒砂・礫 (径 0.3～0.5cm) を斑文状 (径 0.5cm) に含む。
- 3 黒褐色細～中粒砂。黄褐色粗粒砂を斑文状 (径 0.5～1.0cm) に含む。

(SD8)

- 1 暗灰褐色細～中粒砂。黄褐色粗粒砂を斑文状 (径 0.5cm) にやや含む。土器片を含む。やや硬くしめる。
- 2 灰黄褐色中～粗粒砂。黄褐色粗粒砂・礫 (径 0.3～0.5cm) を多く含む。しめりは甘い。
- 3 暗灰褐色細～中粒砂。礫 (径 0.2cm) を含む。やや硬くしめる。
- 4 暗灰褐色中～粗粒砂。黄褐色粗粒砂を多く含む。しめりは甘い。

III-1 黄灰褐色粗粒砂。

III-2 黄褐色粗粒砂。

【SD7】

- 1 灰褐色粗粒砂。明灰色細粒砂をブロック状 (径 0.5cm) に多く含む。礫 (径 3.0～5.0cm) を含む。
- 2 暗灰褐色粗粒砂。明灰色細粒砂をブロック状 (径 0.5cm) に散る。土器片を含む。
- 3 灰褐色細～中粒砂。灰黄色中～粗粒砂を斑文状 (径 0.5cm) に含む。礫 (径 3.0～5.0cm) をやや含む。
- 4 暗灰褐色細～中粒砂。2層と類似するが、粒子が粗い。
- 5 黒灰褐色粗粒砂。明灰黄色粗粒砂をブロック状 (径 0.5cm) に含む。
- 6 灰褐色中粒砂。灰黄色粗粒砂を含む。
- 7 暗灰褐色中粒砂。灰黄色粗粒砂をブロック状 (径 0.5cm) に含む。礫 (径 3.0～5.0cm) を含む。
- 8 灰黄褐色中～粗粒砂。灰黄色粗粒砂を斑文状 (径 0.5cm) に多く含む。
- 9 黄灰褐色中～粗粒砂。

【SD6】

(西部)

- 1 灰褐色粗粒砂。明灰色細粒砂をブロック状 (径 0.5cm) に含む。礫 (径 1.0～10.0cm) を含む。
- 2 暗灰褐色粗粒砂。明灰色細粒砂を斑文状 (径 0.5cm) に含む。
- 3 暗灰褐色粗粒砂。灰色細粒砂を斑文状 (径 0.5cm) にやや含む。

(東部)

- 1 灰褐色。
- 2 暗灰褐色粗粒砂。明灰色粗粒砂をブロック状 (径 0.5cm) にやや含む。
- 3 暗灰褐色細～中粒砂。黄褐色粗粒砂を斑文状 (径 0.5cm) に含む。

【SD9】

- 1 橙褐色微粒砂+径 0.2cm 位の粗粒砂に暗灰色微粒砂+径 0.2cm 位の粗粒砂がブロック状に混入。よくしめる。
- 2 暗褐色微粒砂+径 0.2～0.5cm 位の粗粒砂が混入。よくしめる。
- 3 暗灰褐色微粒砂+粗粒砂。よくしめる。
- 4 暗灰褐色微粒砂+粗粒砂に黒色微粒砂+粗粒砂がブロック状に混入。よくしめる。
- 5 暗褐色微粒砂+粗粒砂。よくしめる。
- 6 暗灰色微粒砂+粗粒砂。よくしめる。
- 7 暗黄褐色微粒砂+粗粒砂。

【SD11】

- 1 明灰褐色粗粒砂。明灰色粗粒砂をブロック状 (径 0.5～1.0cm) に多く含む。礫 (径 1.0～5.0cm) を含む。
- 2 暗灰褐色細～中粒砂。灰色粗粒砂をブロック状 (径 0.5～1.0cm) に含む。黒褐色シルトをブロック状 (径 0.5cm) に含む。
- 3 灰褐色細～中粒砂。
- 4 明灰褐色中～粗粒砂。

第16図 第2遺構面 S D 土層断面図 1/40

る。ただし、瓦については、古代のものと中世のものがあり、板目調整の瓦208・209は極めて良質で、芦屋市域であり類例をみない。

SD7は、幅約2m、深さ約45cmで、底面は少しへこみがあるものの、概ね平坦である。第1遺構面で検出されたSX8に東側を切られているが、東西方向を指向すると推測される。埋土は灰褐色～暗灰褐色を呈し、細粒砂～中粒砂からなる。西部を中心に、10～25cm程の礫が集中する部分があった（図版7）。遺物は弥生土器・土師器・須恵器・土師質土器・瓦質土器・陶器（丹波焼・瀬戸美濃焼・備前焼）・磁器（白磁・青磁）・土鍾・製塩土器・イダコ壺・瓦など多様なものがみられる（第37図168～170、第38図197～202、第40・41図212～216）。主体は173～176の煮炊具や貿易陶磁179・180、備前焼指鉢199など、中世の遺物である。これらの帰属年代は14世紀～15世紀前半を中心とするもので、SD6出土のものより新しく感じられる。これは、遺構の切り合い関係とも一致する。ただし、起径の杯蓋171や製塩土器172、布目瓦213～216など奈良時代の特徴的な遺物もみられるので、周辺には当該期の遺構が広がっていたことを示唆する。

SD8は、SD6の北側で、西部はSX9に切られる溝状遺構である。東西方向を指向し、幅は1m以上あるが、SD6に切られるため不明である。埋土は暗褐色系の細粒砂～中粒砂である。SD6やSD7のような礫は伴わない。遺物は弥生土器・土師器・須恵器・土師質土器・陶器（常滑焼）・土鍾などで、中世の遺物が目につくものの、弥生時代や古墳時代の遺物の比率がSD6・7よりも高く、須恵器の種類や量が多い。また、検出時に鉄滓や焼土もみられた（第37図181～190、第39図203～206）。

選I字状口縁をもつ第I様式後半の弥生土器壺181は、第4遺構面においても類例の乏しい器形である。須恵器は、壺184、杯H壺185、杯身186・187など古墳時代後期から奈良時代に偏在する。奈良時代の把手付土壺203もみられる。また、砂粒の付着の多い204は精錬鉢であろう。SD7出土の煮炊具と時期が重なるが、奈良時代の遺物がある程度まとまっていることや、SD7との切り合い関係を考えて、奈良時代の遺構が埋没する最終段階で15世紀代の遺物が流入したとみることもできよう。

SD9は、幅60cm～100cm、深さ20cmを測り、埋土は褐色～淡褐色を呈し、微粒砂と粗粒砂が混じる。北西から南東方向を指向し、北端は第1遺構面から切り込むSX8に切られる。南東部の溝収束部の底面には、20cm程度の礫が5石集石する。古墳時代後期の土師器・須恵器と土鍾が出土している（第37図191～194、第39図207）。SD9はSD6・7・8・11に近接し、SX8に切られる遺構であるが、これらに顕著な中世遺物を全く含んでいないことや、周辺の溝群と指向方向が

異なることから、古墳時代後期～飛鳥時代の遺構とみたい。

SD11は調査区西部において、東側から調査区西壁に沿って北方向に湾曲する溝状遺構であるが、溝の西肩が調査区外となるため、溝であるのか、斜面を段状に整形したカット面であるのかは明らかではない。幅は3.5m以上、深さは約90cmである。埋土は灰褐色系で、細粒砂～中粒砂からなる。断面形態は三角形を呈する。底面は少し東側が高いが概ね平坦で、埋土中に径10～40cmの花崗岩礫が集石しており、特に南東部の収束部から蛇行部にかけて多くみられる（図版7）。この礫は、SD6につながるようにみえる。また、出土遺物は弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・土師質土器・瓦質土器・陶器（常滑焼・備前焼）・磁器・土鍾・瓦など実に多形である。ただし奈良時代前半までの遺物は少なく、奈良時代後半から平安時代前半の遺物が一定量認められる。その後13世紀から15世紀頃までの遺物が継続的に認められる。前者は双耳壺（第42図226）や精製の短頸壺（第42図225）など、官衙的な様相を帯びたものが含まれているが、後者は煮炊具や鉢など、一般集落の調理具が多い。

寺田遺跡の既往調査では、第1章第3節で言及したように、古代末から中世初頭にかけて一度ピークがあり、次いで南北朝前後にも遺構や遺物のまとまった検出事例が知られている。一方、14～15世紀については、遺物の出土は認められるものの、遺構は乏しい。当調査地点で確認された当該期の遺構も溝であり、建物跡や土坑群は認識されなかった。SD6～8・11は、いずれも中世後半を主たる年代とする遺構であるが、煮炊具を基準にみると、微妙な時期差がある。SD6はSD7より古相を呈しており、土層の切り合い関係からも、並走するSD6～8は、SD8→SD6→SD7と走り替えが想定できそうである。一方、SD11は、13世紀後半～15世紀と長期にわたる遺物が認められることから、SD6～8の一群とSD11を並存と捉えると、これらの溝で南辺と西辺を区画された屋敷地と推定することも可能であろう。備前焼壺（第37図163・165、第43図262）や貿易陶磁（第37図179・180、第43図264～267）などの存在に加えて、在地のものとともに出土する他地域から持ち込まれたとみられる鉢や煮炊具（第42図243～246）の充実ぶりからも、当調査地点に在地勢力の拠点を考えた。

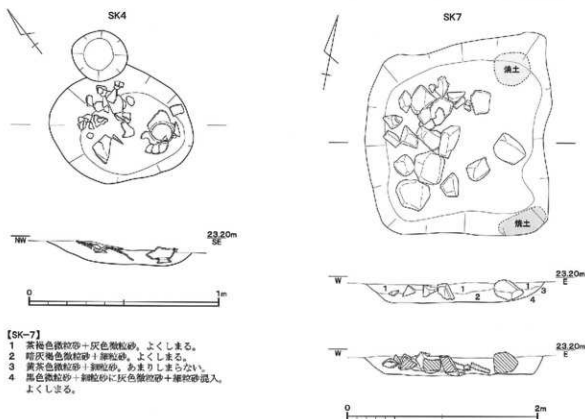
土坑 調査区全体で多数の土坑を検出した。多くは土師器片・須恵器片を伴うが、時期の確定できる遺構は限られる。特徴的な遺構としては、SI2の南西辺に接するSK4が挙げられる（第17図・図版7）。長軸長約75cm、短軸長約60cm、深さ約10cmを測る。土色・土質等の注記がないため、埋土の詳細は不明だが、単一層である。この遺構からは、一箇体に復元可能な、布留1式でも新しい段階の土師器高杯（第52図311）

が出土しているほか、他の個体も細片ながら僅かに混じる。

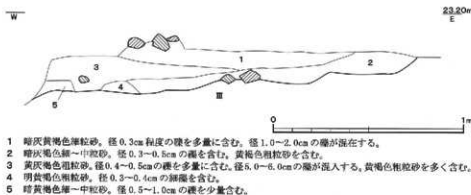
また、調査区北端に位置するSK7は長辺20m、短辺1.9m、深さ約20cmを測る大型土坑でほぼ正方形に近い様相を呈する。埋土は2層に分けられ、上層は茶褐色微粒砂と灰色微粒砂が混じり、下層は暗灰褐色微粒砂と細粒砂が混じる。遺構の西寄りを中心に、約40cm程度の大きさを主体とした礫が集石する。また、遺構の北東部と南東部では、焼土が確認されていることから、何らかの機能を持った施設であった可能性が高い。ここから出土した遺物は古墳時代後期の須恵器大甕体部片（第53図334）のみである。SK7の西側、SX9の肩部に位置するSK13は、奈良時代の土器を中心とする遺構で、土師器甕（第52図312・313）がみ

られる。このほか、SI7ピット1からは、和泉Ⅲ-3期の瓦器甕（第53図315）と東播系須恵器甕が出土しているので、13世紀の遺構の存在も確認できる。SX7からは、弥生土器・土師器・須恵器片と共に15世紀に下るへそ皿（第53図316）が出土している。

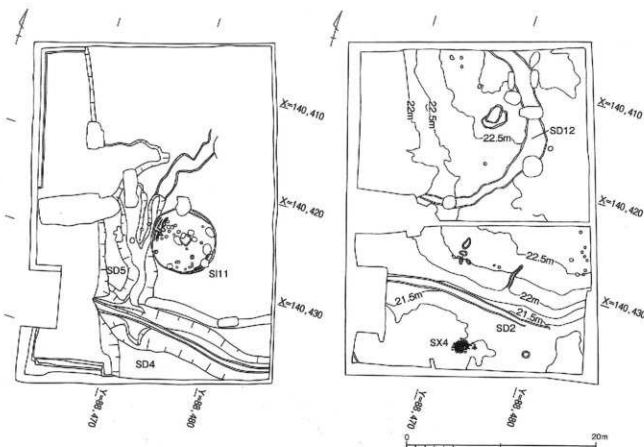
地滑り状の不定形の落ち込み 調査区北部で、不定形の落ち込み（SX9・10）が検出された。SX9は5.5×6.0mの規模の遺構で、深さは約30cmを測る（第18図・図版7）。埋土は暗褐色～黄褐色系の色調を呈し、細粒砂～粗粒砂からなる。SX9では、焼土と共に古墳時代後期から奈良時代までの遺物が多く集中して出土している。土層の堆積状況から西側の斜面への地滑り状の遺構とみなしたが、どのような原因によって生じた地滑りなのかは不明である。土師器甕（第52



第17図 SK4平面図・土層断面図 1/20・SK7平面図・土層断面図 1/40



第18図 SX9土層断面図 1/20



第19図 第3・4遺構面平面図 1/400

図118)・土師器塀ないし瓶の把手(第53図335)や須恵器杯蓋(第52図319・320)・杯身(第52図322)・短頸壺蓋(第52図323)に加えて、甕(第52図325)・横瓶(第52図326)・平瓶(第53図336)・布目瓦(第52図333)など、律令期の遺物がみられる。

本調査地点で律令期の遺構は顕著ではないが、これらの多様で特徴的な遺物の存在は、寺田遺跡の官術的要素を反映しているとともに、中世以降の土地利用によって削平された古代の遺構群の存在を推測させる。

SX10は、30×20mの規模の遺構である。北東部分はSK7によって切られる。SX10出土の遺物は微細な土師器・須恵器のみであるが、概ねSX9と同様の年代観で理解できよう。

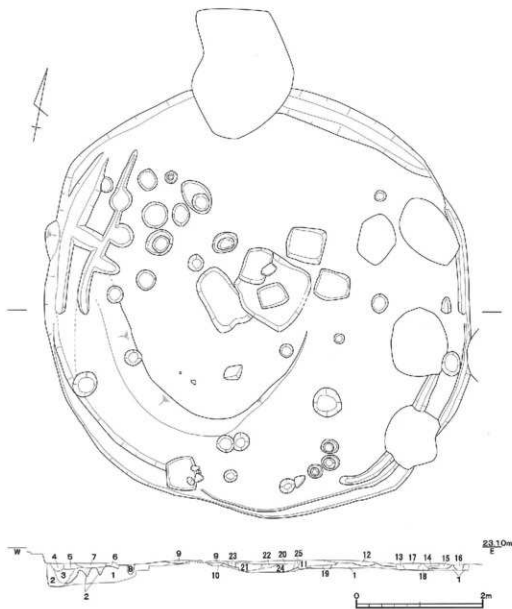
③ 第3遺構面(第19図)

Ⅱ層群下部からⅢ層群上面にかけて、弥生時代後期(第V様式)の遺構を検出している。ただし、本遺構面で検出された遺構は、本来Ⅱ層群を掘り込んでいるため、遺構埋土がⅡ層群と近似していた。そのため遺構の判別が困難であったことから、Ⅲ層上面での検出となった。この遺構面では、竪穴住居1棟(SI11)と溝2条(SD4・5)を検出しており、各遺構からは弥生時代後期の遺物を伴っている。

竪穴住居 SI11は、調査区のほぼ中央において検出された、径約7mの大型の円形竪穴住居である(第20図・図版8)。深さは、検出面から約20cmを測る。

埋土は暗灰褐色～黒褐色系の色調で、細粒砂～中粒砂からなる。また、中央部分において、炉跡とみられる被熱痕跡が認められる。炉跡の埋土は2層に分けられ、上層が赤褐色細粒砂～中粒砂からなる焼土部分、下層は灰褐色細粒砂～中粒砂からなる。炉跡周辺には、炭や焼土が散布する部分も確認された。また、部分的に周溝が巡るが、一部周溝が二重となっていることから、重複あるいは拡張していると想定される。SI11は正円形を呈する住居で、本地域では第IV様式から第V様式前半に盛行する。それを裏付けるかのように、床面上から弥生時代第V様式前半の土器が出土しているほか(第54図341～348)、炭化材片が出土している。高杯342は淡路北部沖積地から、343はより西の地域からの搬入土器であり、344・345も東部瀬戸内系の高杯であり、やはり搬入土器の可能性が高い。また、台石とみられる人頭大以下の平らな珸岩がみられた。この住居の住人の出自を思わせる高杯形土器の際立った特徴は、SI11に鉄器工房などを含めた特殊な性格を与えるヒントになるだろう。

溝 SD4は幅約5.0m、深さ約1.9mを測る(第21図・図版8)。断面形態は三角形を呈し、調査区の南東から北西方向に緩やかに蛇行している。Ⅲ層群を大きく掘り込んでおり、埋土もⅢ層群と類似した明黄褐色粗粒砂がラミナ状に堆積し、上部には30～40cm大の花崗岩礫が集中して堆積していることから、土石流に



- 1 黄褐色細～中粒砂。黒色砂がまだらに入る。下方から上方にかけて粒子が大きくなる。埋藏層。
- 2 黒灰色細～中粒砂。礫(径2.0～6.0cm)を少量含む。明灰色中～粒粒砂を粒状に含む。
- 3 暗褐色細～中粒砂。礫(径0.5～2.0cm程度)を少量含む。明灰色細～中粒砂を斑文状(径0.5cm)に含む。
- 4 暗褐色細～中粒砂。黄褐色細粒砂をブロック状(径0.5cm以下)に含む。黄白色細礫(径0.3～0.5cm)を含む。
- 5 黒褐色細～中粒砂。灰褐色中～粒粒砂を斑文状(径0.5cm)にやや含む。黄白色細礫(径0.3～0.5cm)をやや含む。
- 6 暗褐色細～中粒砂。黄白色細礫(径0.3～0.5cm)を含む。やや硬化している。
- 7 黒灰色細～中粒砂。黄白色細粒砂をブロック状(径0.5cm)にやや含む。灰白色細礫(径0.3～0.5cm)を含む。粘土・炭・土器片を含む。
- 8 黒褐色細粒砂。黄褐色細粒砂をやや含む。
- 9 暗褐色細～中粒砂。黄褐色細粒砂(径0.5cm)を含む。粘土が散る。硬化しており、腐化していると思われる。
- 10 赤褐色。凝結・腐化した厚層。砂礫。
- 11 暗褐色細～中粒砂。明灰色細粒砂を斑文状(径0.5cm)にやや含む。黄白色細礫(径0.3～0.5cm)を含む。炭・土器片・粘土が散る。やや硬化している。
- 12 暗褐色細～中粒砂。明灰色細粒砂を斑文状(径0.5cm)に含む。黄白色細礫(径0.3～0.5cm)を含む。炭がやや散る。硬化している。
- 13 黄褐色細粒砂。灰褐色細粒砂ブロック(径0.5～1.0cm)をやや含む。しりりは多い。
- 14 黒褐色細粒砂。明灰色細粒砂をブロック状(径0.5cm)にやや含む。黄白色細礫(径0.3cm)を含む。やや硬化している。周縁部。
- 15 暗褐色細～中粒砂。明灰色細粒砂を斑文状(径0.5cm)に多く含む。黄白色細礫(径0.2～0.4cm)を含む。やや硬化している。
- 16 黒褐色細粒砂。14層と連続。
- 17 暗褐色細～中粒砂。明灰色細粒砂を斑文状(径0.5cm)に含む。黄白色細礫(径0.3～0.5cm)を含む。粘土・炭が散る。
- 18 暗褐色細～中粒砂。明灰色細粒砂・暗灰色細～中粒砂の混合。やや硬化している。
- 19 暗褐色細～中粒砂。明灰色細粒砂をブロック状(径0.5cm)に含む。黄白色細礫(径0.2～0.5cm)を含む。
- 20 灰褐色細粒砂。黒色シルト質細粒砂をブロック状(径0.5cm)にやや含む。灰色細礫(径0.3～0.5cm)を含む。炭が散る。
- 21 暗褐色細粒砂。黒色シルト質細粒砂をブロック状(径0.5cm)に含む。灰色細粒砂を斑文状(径0.5cm)に含む。土器片を含む。
- 22 暗褐色細粒砂。灰褐色細粒砂を斑文状(径0.5cm)に多く含む。しりりは多い。
- 23 黒褐色細粒砂。明灰色細粒砂をブロック状(径0.5cm)に含む。土器片をやや含む。
- 24 黒褐色細粒砂。灰色細粒砂をブロック状(径0.5cm)にやや含む。白色細礫(径0.3～0.5cm)を含む。炭がやや散る。硬くしめる。

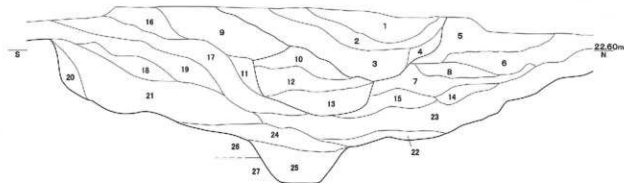
第20図 S I 11平面図・土層断面図 1/60

よって埋没したことが想定できる。埋土が河川堆積と類似した状況を示していることなどから、自然流路の可能性も認められるが、断面形態が左右対称をなすことから、人為的なものと認識した。当遺構の遺物は乏しいが、最下層から弥生時代中期の多様な甕(第54図

349～351)や底部(第54図353)、第V様式の高杯(第54図352)が出土している。S I 11との関係からみて、SD 4の機能時の時期を示唆する土器片である。

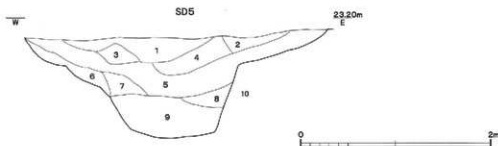
SD 5は、北から南に走向し、SD 4と交わる溝である(第21図・図版8)。幅はSD 11に切られている

SD3・SD4



[SD3・SD4]

- 1 黒褐色細粒砂＋径0.5cm位の粗粒砂。若干礫の礫が混入する。硬くしめる。
- 2 1期よりやや明るい。硬くしめる。
- 3 黒黄色細粒砂。礫の礫を多く含む。硬くしめる。清楚。
- 4 暗黒黄色細粒砂＋径0.5cm位の粗粒砂がわずかに混入する。それほどしまりはない。清楚な層上。
- 5 暗黒黄色細粒砂＋径0.5cm位の粗粒砂がわずかに混入する。それほどしまりはない。
- 6 黒黄色細粒砂。それほどしまりはない。
- 7 暗黒黄色細粒砂。ややしまりがある。
- 8 暗黄色細粒砂。しまりはない。
- 9 1・2層とはほぼ同じ。礫の礫がやや多く混入する。硬くしめる。
- 10 暗黒黄色細粒砂＋径0.5cm位の粗粒砂。礫の礫が混入する。ややしまりはない。
- 11 暗黄色細粒砂＋細粒砂。それほどしまりはない。清楚な層上。
- 12 暗黒黄色細粒砂＋径0.5cm位の粗粒砂。小礫がやや混入する。しまりはない。
- 13 暗黒黄色細粒砂＋径0.5cm位の粗粒砂。小礫がわずかに混入する。しまりはない。清楚。
- 14 黒灰色細粒砂。しまりはない。
- 15 黒灰色シルト。しまりはない。
- 16 1層とはほぼ同じ。硬くしめる。遺物を若干含む。
- 17 黒灰色細粒砂に細粒砂がブロック状に混入する。礫の礫をわずかに含む。しまりがある。
- 18 暗黄色細粒砂＋径0.5cm位の粗粒砂。しまりはない。
- 19 黒灰色細粒砂＋径0.5cm位の粗粒砂。小礫をわずかに含む。ややしまりがある。
- 20 暗黄色細粒砂＋径0.5cm位の粗粒砂。しまりはない。
- 21 黒灰色細粒砂＋径0.5cm位の粗粒砂。礫の礫をやや含む。それほどしまりはない。
- 22 黒色細粒砂。しまりはない。
- 23 21層よりやや明るい。それほどしまりはない。
- 24 暗黄色細粒砂に径2.0cm位の小礫を多く含む。しまりはない。
- 25 暗黄色細粒砂＋微粒砂。ややしまりがある。
- 26 暗黄色細粒砂＋微粒砂。ややしまりがある。
- 27 灰白色シルト。よくしめる。



[SD5]

- 1 暗黄色細粒砂。粗粒砂をわずかに含む。よくしめる。
- 2 暗灰色細粒砂。よくしめる。
- 3 暗黄色細粒砂＋黒灰色細粒砂ブロック。よくしめる。
- 4 黒黄色細粒砂＋粗粒砂。よくしめる。
- 5 暗黄色細粒砂＋粗粒砂。径0.3～1.0cm位の小礫をわずかに含む。よくしめる。
- 6 暗灰色細粒砂＋粗粒砂。あまりしまらない。
- 7 暗黄色細粒砂＋微粒砂。あまりしまらない。
- 8 暗灰色細粒砂＋粗粒砂。あまりしまらない。
- 9 暗黄色細粒砂。径3.0cm～礫の礫を多く含む。しまりはない。
- 10 暗黄色細粒砂＋粗粒砂。しまりはない。

第21図 第3遺構面SD土層断面図 1/40

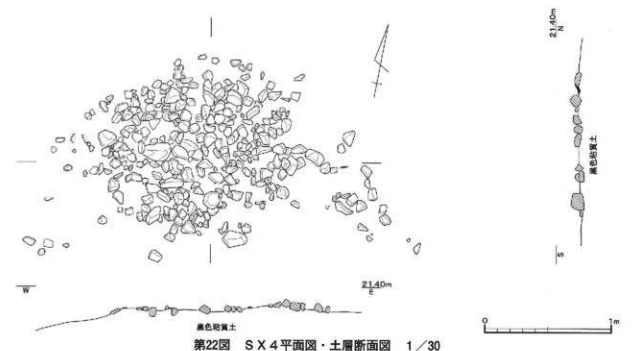
ため不明だが3mより、深さは約1.1mを測る。SD4とは埋土が異なる。II層下部と類似した黒黄色細粒砂～微粒砂が堆積しているが、SD4以南ではその続きが確認できなかった。また、その合流部におけるSD4の南壁が流路の攻撃面状にやや傾かれていることから、両者は同時並存したものと考えられる。SD4との交差点よりやや北で、2条の溝が合流していたが、その合流点より上流域にあたる部分は、攪乱や削平・流失により、検出できなかった。逆台形の断面形態を呈すると考えられるが、SD4との合流点ではV字状をなしている。伴出する遺物は極めて乏しいが、

第II様式の底部穿孔壺（第54図354）や第V様式の高杯（第54図355）が確認できた。

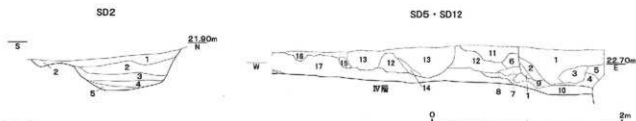
溝からの出土遺物は、第4遺構面由来のものを巻き上げ、第3遺構面機能時の遺物が少量流入したもので、その後急速に埋没したのであろう。SD4・SD5の並存は遺構機能から類推して問題ない。また、SI11に先行する土器類の比重が高く、遺構間の前後関係に矛盾はない。

④ 第4遺構面（第19図）

IV層群上面で確認した弥生時代中期（第II様式）を主体とする遺構面である。確認調査時に、第9層上面



第22図 SX 4 平面図・土層断面図 1/30



【SD2】

- 1 黄褐色微粒砂と径0.3～0.5cm位の粗粒砂。たたくしる。
- 2 増黄灰色。径0.3～1.0cm位の粗粒砂と径0.5cm位の礫混入。あまり含まれない。
- 3 黄褐色微粒砂。あまり含まれない。
- 4 暗褐色細粒砂と径0.1～0.2cm位の粗粒砂。あまり含まれない。若干の炭分を含む。
- 5 暗赤灰色粘土。よくしる。

【SD5・SD12】

【SD5】

- 1 黒褐色細～中粒砂。径0.2～0.4cmの礫を含む。
- 2 灰白色中～粗粒砂。径0.2～0.5cmの礫を非常に多く含む。
- 3 灰褐色細粒砂～礫。径0.2～5.0cmの礫が主体。黒褐色細粒砂が混じる。
- 4 明灰褐色細～中粒砂。径0.2～0.4cmの礫をやや含む。黒褐色細粒砂をブロック状（径1.0～2.0cm）に含む。
- 5 灰白色中～粗粒砂。径0.3～3.5cmの礫を多く含む。

【SD12】

- 6 灰褐色中～粗粒砂。径0.1～1.5cmの礫をやや含む。灰黒褐色細粒砂をまだらに含む。
- 7 灰褐色中～粗粒砂。径0.2～3.0cmの礫を含む。

- 8 灰褐色細～中粒砂。径0.1～1.0cmの礫をわずかに含む。灰白色細粒砂をまだらに含む。
- 9 暗灰褐色細～中粒砂。径0.1～3.0cmの礫を含む。
- 10 明灰褐色中粒砂。明灰褐色細粒砂が水平方向にラミナ状に入り、黒褐色細粒砂・茶褐色細粒砂がまだらに入る。

(その他の土層)

- 11 暗灰褐色細～中粒砂。径0.1～0.7cmの礫を含む。明灰褐色細粒砂をブロック状（径0.5cm）に含む。
- 12 灰褐色細～中粒砂。径0.2～2.0cmの礫をやや含む。灰白色細粒砂をブロック状（径0.5cm）に含む。
- 13 黒褐色細～中粒砂。径0.4～6.0cmの礫を含む。特に径3.0～6.0cmの礫は底部に集中して入る。茶褐色細粒砂と黒褐色細粒砂が細かく底充填に入る。
- 14 灰褐色細粒砂。径0.2～0.4cmの礫をわずかに含む。よくしる。
- 15 明灰褐色細～中粒砂。径0.5～3.0cmの礫を含む。灰白色細粒砂、黒褐色細粒砂がまだらに入る。
- 16 灰褐色中～粗粒砂。径0.2～0.7cmの礫を含む。
- 17 明灰褐色細粒砂。径0.4cmの礫をやや含む。灰白色細粒砂をブロック状に、黒褐色細粒砂をまだらに含む。

第23図 第4遺構面SD土層断面図 1/40

で当該期の土器が出土していた事実と一致する。この遺構面は、洪水に由来すると考えられるⅢ層群によってバックされた状態で旧地形を検出することができた。また、礫集中部（SX 4）と溝2条（SD 2・12）が検出されている。

旧地形 北から西および南に向かって緩やかに下る地形をなしているが、調査区南縁部において浅い小支谷が東西方向に入り込む影響から、南斜面は急激に落ち込む。この遺構面直上からは、凹線文出現以降の土器を全く含まない弥生時代中期前葉（第Ⅱ-1・2様式）を中心とする土器（第56図371～392、第59図

419～431、第60図432～436、第61図437～441、第62図442～471）と石庖丁・石斧といった石器（第62図472～475）が散漫的に出土しており、小支谷を隔ち傾斜変換点では土器片がまとまって出土し、その周辺には炭化物片・焼土粒の集中分布が認められた。これに伴う土坑等の掘り込みは認められず、炉または焚き火跡の可能性があるが、特に被熱酸化した部分などは検出されなかった。

土器は在地のものが大半を占め、377のように第Ⅰ～4段階に属するものも少量認められる。あくまで凹線文出現以降の土器を全く含まない弥生時代中期前

業（第Ⅱ-1・2様式）に主軸を置く。加えて、播磨からの搬入品371・372や、本地域では珍しい山形の突起部を作る口縁部をもつ山城から近江南部の壺373も含まれていた。また、石器は、緑色片岩製磨製石廬丁472と粗質の粘板岩製で半欠の打製石廬丁473、棒状の叩石の損傷欠片474、閃緑岩質砂岩製の太型蛤刃石斧の刃部折損品475が確認できた。

礫集中部 小支谷の底面において、東西約3m、南北約1.8mの範囲で、約10cmの礫を主体とし、20cm程度の礫も含む、礫集中部（S X 4）が検出されている（第22図・図版8）。礫は数き詰めのように密集していた。礫の上面の高さは揃って平坦であり、ここに使用された石材は、在地の六甲花崗岩（黒雲母花崗岩）や花崗斑岩（第55図e）に加えて、丹波古生層系の頁岩（第55図a）や砂岩（第55図b～d）、布引花崗岩（花崗閃緑岩）やそれを貫く岩脈に由来する玢岩（第55図f）など、他所から持ち込まれた角礫・重角礫が認められる（奥田尚氏のご教示による）。よって、S X 4は人為的な遺構と考えられる。なお、礫に混じって弥生土器の壺・鉢・甕がまぎって出土しており、底部片は20個体を超えている（第55図356～368、第57図393～407、第58図408～418）。なかには、第Ⅰ-4様式に属する特徴を備える広口壺361・362もみられるが、櫛指直線文・波状文が多量で表れており、中心となるのは、第Ⅱ-1・2様式である。

溝 当遺構面では溝2条（S D 2・12）が検出されている。S D 2は、谷状地形の底面の北縁に沿って、東から西方向にのびるもので、幅約1.4m、深さ約40cmで、逆台形の断面を呈する（第22図・図版8）。底面は平坦で、壁も直線的に掘り込まれ、明らかに人為的なものである。遺構埋土は、Ⅲ層群に類似した明黄褐色粗粒砂がラミナ状に堆積しており、底面付近では明黄灰色シルト層がみられる。溝の東側は途切れているが、地形から考えるとⅣ層群に關係する遺構ではなく、Ⅲ層群中から掘り込まれた溝の最下部が、第4遺構面を確認された可能性もある。Ⅲ層群中に掘り込み面が存在すると仮定した場合、Ⅲ層群も単独の洪水によるものではなく、比較的短期間に断続的に見舞われた洪水によるものの可能性があり、その間隙に形成されたとも考えよう。なお、当遺構から、遺物は全く出土していない。

S D 12は、調査区北半分の緩斜面上で検出されたもので、北から弧を描いて西にのびる（第22図・図版8）。北側は調査区外となるため全容は不明だが、長さは16m以上になると考えられる。最大幅は約2.5m、深さは約45cmを測る。底面は平坦で、S D 2と同様に遺構埋土はⅢ層群と類似した明黄褐色粗粒砂が堆積しており、調査区北端断面のⅢ層群中において、逆台形の断面が確認された。当遺構からは少量であるが、弥生土器が出土しており（第56図369・370）、S X 4と同様

に基本的にⅡ-1・2様式の範疇で捉えることができる。また、市内最古の円形周溝墓の可能性を考慮してもよいのかもしれない。

6. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、27ℓ容量のコンテナ58箱分と多い。これは、当該調査地点が、寺田遺跡の中心に位置することを如実に語っている。その内訳は、弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・陶器・磁器・土師質土器・瓦質土器・瓦・鉄製品など、実に多岐である。ここでは、遺構出土遺物と包含層ならびに攪乱から出土した遺物に分けて記述する。なお、遺構出土遺物は、遺構面ごとにまとめて記述する。

① 第1遺構面遺構出土遺物（第24図）

この遺構面から検出した遺構からは、弥生土器・土師器・須恵器・白磁・鉄製品などが出土しているが、遺構の年代の根拠となり得る遺物は乏しかった。

S E 1からは、弥生土器・土師器・須恵器・白磁・鉄製品が少量出土しており、中国製白磁碗（第24図1）、長軸6.4cm、短軸5.1cm、厚さ2.9cm、重さ83.1gの碗形滓（第24図2）やⅣ層群上面出土の弥生土器片（第56図379）と接合した第Ⅱ様式壺口縁部片もみられた。

S X 8からは、下位層に由来する弥生土器（第Ⅱ・第Ⅳ様式）や石器、古墳時代～奈良時代の土師器や須恵器とともに、土師質や瓦質の煮炊具と東播系須恵器碗・鉢が出土し、18世紀のくわかん碗が1点混入していた。第24図に示したものは、3が磨盤型の土師質羽釜、4が東播系須恵器鉢、5が東播系須恵器碗、6～8が瓦質羽釜、9が砂岩製の石皿である。

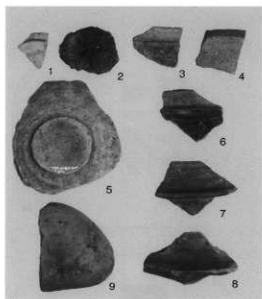
② 第2遺構面遺構出土遺物（第25～53図・図版9）

この遺構面では弥生時代後期から中世までの掘立柱建物・竪穴住居・焼土集中ビット・粘土集中部・溝・土坑・地滑り状の不定形の落ち込み等、多岐にわたる遺構が検出されたので、出土遺物も多種多様である。

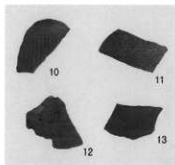
掘立柱建物 S B 1の柱穴から出土した遺物は古墳時代後期から飛鳥時代の須恵器杯・壺・甕や内面に暗文を有する精良な胎土の土師器杯である。第25図10は須恵器壺、11は肩部に櫛指波状文を施す須恵器壺、12は須恵器杯蓋である。第26図14～16は土師器杯で、14・15は内面口縁部直下に沈線が巡り、16は2段の放射状暗文がみられる。17は須恵器杯蓋、18は須恵器杯身である。

S B 2の柱穴から遺物は出土していない。

S B 3の柱穴からは土師器片・須恵器片が出土しており、古墳時代中期～後期のものである。第25図13は須恵器杯蓋、第26図19・20は土師器壺、21は甕の把手片、22はT K 217の須恵器杯身である。ただし、S B 3の柱穴は、最晩遺構に伴うと考えられるS I 6を切っているため、これらの遺物がS I 6に由来する可能性は残る。



第24図 第1遺構面遺構出土遺物
1・2 SE1出土 3～9 SX8出土



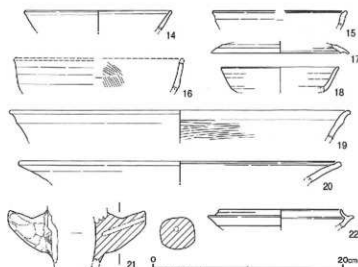
第25図 第2遺構面
SB出土遺物 (1)

竪穴住居 第27図にS I 1～4、第29図にS I 5～9、第34図にS I 10・13・15出土遺物の実測図を示し、主な遺物の写真を図版9に収めている。第28・30～33図に図化できなかった遺物の写真を掲げている。

S I 1からは、少量の土師器片・須恵器片と被熱したスサ入りの壁土（第28図38～41）が出土している。第27図23は復元径13.2cmの須恵器杯身で、未満測の杯片や壺体部片とともに6世紀中頃～後半の時期とみられる。

発掘面積の限られたS I 2については、あまり遺物の提示ができないが、土師器片・須恵器片が出土している。庄内式併行期の土師器壺や高杯の破片とともに、須恵器杯（第27図24）や壺口縁部（第27図25）が出土している。24はS I 1出土の23より形式的に新しい。25は、口縁端部をシャープに引きのばし、鋭角的に外傾する外端面に鋭い凹線文を1条施す。口縁部の上面はやや凹みをもたせつつ広く平滑な仕上げとする。

S I 3は、東壁下の床面直上において布留式壺3点（第27図29～31）と砥石2点（第27図32・33）がまとまって出土しており、編年のみで一括性の高いものであ



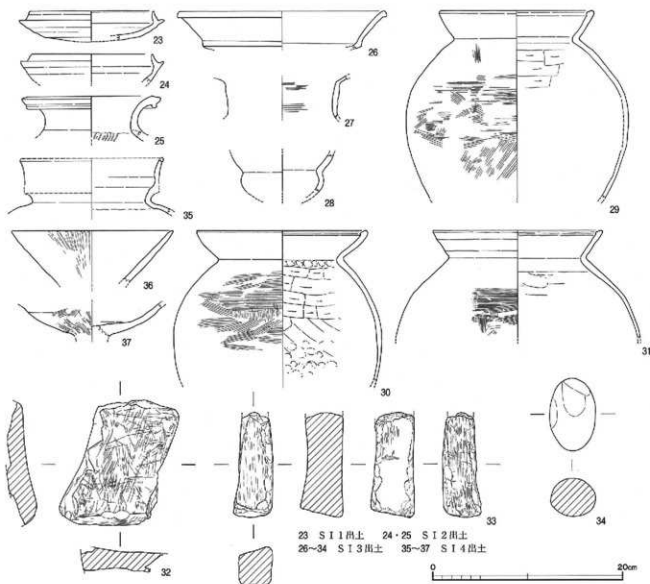
10～12・14～18 SB1出土（ビット1:10 ビット2:18 ビット4:11・14
ビット7:12・15～17）
13・19～22 SB3出土（ビット1:19・21 ビット2:20・22 ビット4:13）

第26図 第2遺構面SB出土遺物 (2) 1/4

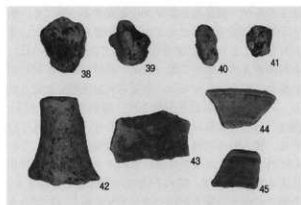
る。この他、第27図には29～31と釣り合いのとれる二重口縁壺26・27、小型丸底壺28および叩石状の円蓋34を図示し、第28図に弥生土器の高杯脚部42、布留式壺体部43、布留式壺口縁部44・45の写真を掲げている。

26は、二重口縁の口縁部は立ち上がって大きく外反し、外端部を肥厚させて少し丸味をもたせて終わる。回転調整が行き届き、器形・手法ともに山陰西部からの搬入品である。27は二重口縁壺の頸部である。26と同一個体と認識するが、頸部上端の接合部がまいたため図上復元せずに2つに分けて掲載している。外面にはヨコハケを下地に施す回転調整痕が残し、内面は細かな横方向のハケ調整を加える。小型丸底壺28は、器面調整のヘラミガキは後退するものの、布留2式の範疇に入るものである。淡黄褐色を呈し、胎土中に微粒砂を含むが、精製品を緩やかに志向する。他にも、胎土が悪く脆弱で図化できなかった小型丸底壺が2、3点存在しており、ほぼ同時期のものでもある。29～31は、布留形壺AのE類やF類（森岡・西村2006）が経年的に変化したものとみられ、布留2式古段階に比定される。いずれも口縁部を内彎させ、端部を肥厚させる。29は口端の外側面に影をもち、全体を丸く収める。30・31は拡張部を内側面に緩傾斜させる。これらの外面上半には布留式壺特有のヨコハケを回転作用により施す以外は、斜め方向のハケ調整を多用する。内面は右回りの横方向のヘラズリを施し、いずれも胴部中位ぐらいから器厚を減ずる。

土器以外に石器がみられる。32は残欠状態で出土したが、置き砥石の上面部分で、478gを測る。器面は漆黒色に近い頁岩質で、緻密な岩石組織である。砥面は凹み、一定方向の細条線を伴う使用痕がみられる。また、左側面も使用によって平滑になっている。33も



第27図 第2遺構面SⅠ出土遺物(1) 1/4



第28図 第2遺構面SⅠ出土遺物(2)

38~41 S I 1 出土 42~45 S I 3 出土

砥石である。石材は片麻状閃緑岩で、3面の使用面が確認できるが、欠損している。狭い幅で凹む対向する2面には線状痕が残る。長さ11.1cm、幅4.0cm、厚さ3.1

cm、重量342gの方柱状を呈する中砥である。34は明確な使用痕を欠くものの、特定住居に伴う叩石状の円礫なので掲載している。白色を呈し、緻密な砂岩である。

この他、42は弥生時代後期の高杯脚部である。43は布留式変体部、44・45は布留式寛口縁である。

S I 4 から出土した遺物は、須恵器小片1点を除き、S I 3 より幾分古めの土師器である(第27図35~37)。

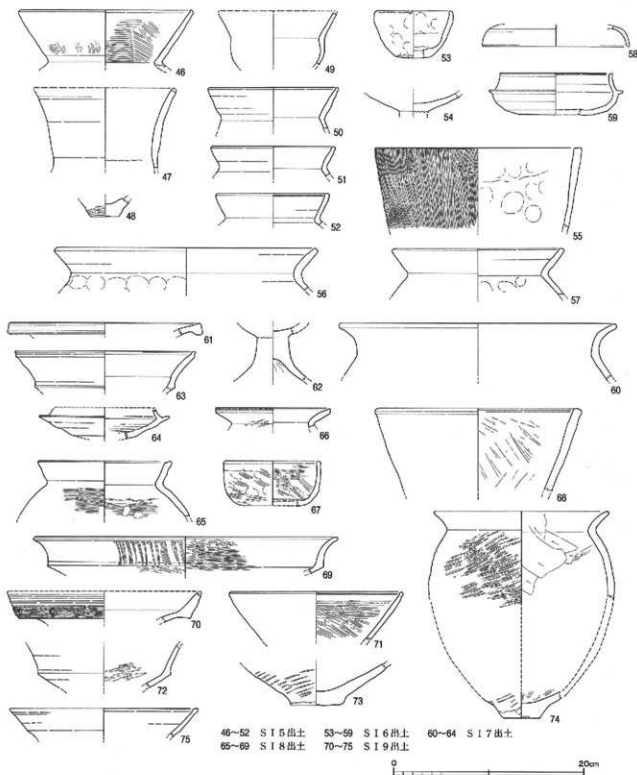
35は「5」字状の口縁部を有する山陰系の甕であるが、在地的な胎土を有する。径0.5mm程度の砂粒を多く含み、明るい褐色を呈するが、内面および器壁は焼成不良である。口縁部立ち上りの屈曲はあまい。36は高杯杯部片で、内外面にミガキ調整を加え、とくに外面は縦方向を採る。杯部はやや内湾気味ながら直線的にシャープな稜線をみせ、当地域幅年では古式土師器西摂第5様式[森岡・竹村2006]に下るものとみられる。色調は明褐色で、胎土は精良である。口縁部や脚部以

下を欠く37も布留式への移行を示す高杯であるが、胎土や色調は大きく異なる。

S I 5には弥生土器片（第30図77）や須恵器片（第30図78）が少量混入しているが、土器類の主体は布留式期古相のもので、第29図46・47が壺、48・49が鉢、50～52と第30図76が甕である。

復元口径17.6cmの46は内湾気味に斜め外方にのび

る口縁部をもつ壺で、口端は内側に摘み出すようにシャープに肥厚する。横斜め方向のハケ調整ののち、ヨコナデを適宜加えて仕上げており、体部との境界は鋭い。口端付近は黒化するも、全体は淡黄褐色の焼き上がりである。長頸壺47は、胎土中に吉野川流域の結晶片岩の細粒片が多量に認められるので、阿波産の搬入品とわかる。色調は暗褐色を呈し、器質は砂っぽく



第29図 第2遺構面S I出土遺物(3) 1/4

荒れやすい。口縁部を短く復元してしまったが、菅原氏による阿波編年〔菅原2006〕のⅤ-1段階のものと考えたい。布留式期には顕在率の低い形式と思われる。48は小形の鉢の底部で、水平方向の底面を抑圧するタキが打圧角度をもって使われている。底面には指頭圧痕と指紋が残る。明褐色を呈し、胎土中に3mm大以上の白色長石やカリ長石粒を含む。49は「く」の字に外反する口縁部を有する鉢形土器で、小さな底部をもつ可能性がある。内面部位の縁は実測図はどきついてもではない。細粒砂を含む、淡黄褐色を呈する。

50は、口縁部を直線的に外反させる庄内式模倣甕で、端部は庄内甕の積み上げ折り曲げをよく残す。庄内Ⅴ式期〔米田1994〕のものであろう。51・52は小型の布留式甕で、口縁部は内彎する。76は、布留式甕の体部片で、内面に指頭圧痕ないしは指関節圧痕を残し、外面のハケメは水平方向のものが退行する。また、77は弥生時代後期の壺底部、78は短脚の須恵器高杯である。

ⅤⅠ6は伊勢周辺より、梶形漆（第30図79～83）や埴壁片（第30図84～88）が出土している。土器類は少量の弥生土器を含むが、中心となるのは布留式期ものである。第29図53～57が土師器で、53・54が高杯、55が壺蓋、56・57が甕である。58・59は須恵器で、58が短頸壺蓋、59が杯身である。

脚柱を欠く53は、深い内彎気味に立ち上る杯部を有する東海系の高杯で、胎土や色調も在地の土器と比べて違和感をもつ。ただし、作り自体はかなりローカルなものといえ、伊勢沿岸のものとは異なる。分割成形の高杯杯部54は布留式期に入るものと思われる。55は口径21.6cmを計測する甕で、丁寧な作りの口縁端は平滑で、中央がやや凹む。15～20cm程の粘土帯を積み上げて作っている。56は大型の甕口縁部で白っぽい焼き上がり、砂粒を比較的多く含む。口頸部の形態からは布留式期でも布留4式ぐらいの位置まで下がるとみてよからう。布留式甕57は、口縁端を水平に作るもので、回転調整が行き届く。59は陶器窯の製品でⅡ型式1段階、内傾する口端部に段状凹線が鋭く走る。暗灰紫色を呈し、素地は精良である。58は59よりも新しく7世紀に下る。他にも同時期の杯身細片がみられる。

79～83は形態と表面観察から精錬炉に付随する梶形漆とみられる。最も大きい79は、径5.5cm大で、最大厚2.7cm、重量100.9gを測る。80は17.2g、81は24.8g、82は10.1g、83は23.3gと大きさの割に重量感がある。また、埴壁の中には、84～86のようにスサを含むものが認められるとともに、87・88のように金属の融着から龍羽口の一部ともみえるものもある。

ⅤⅠ7からは、弥生土器・土師器・須恵器が出土しており、第29図60～62は弥生土器、63は土師器、64は須恵器である。また、第31図89は土師器断片である。60・64は粘土集中部出土である。

60は復元口径28.8cmを測る大型の甕で、胎土中に大粒の暗灰褐色粒を数多く含む敷入品である。弥生時代中期前葉のものであろう。褐色を呈し焼成良好な61は第Ⅴ様式後半の器台受部で、入念にヨコナデ調整を加える。62も第Ⅴ様式の高杯である。63は二重口縁部の口縁部片である。一次口縁端に大きく外反する二次口縁部を貼り付け、細く積み上げる口端の外端面に1条の擬凹線を施す。シャープな作りで、庄内式の新しい役所に属する。64は6世紀後葉に下る須恵器杯身である。この様に、遺物の時期にはばらつきが著しい。

ⅤⅠ8は、土師器に加えて、少量の弥生土器や微細な須恵器片、石礫（第31図90）、中世の瀬戸美濃焼片（第31図91）、伊賀の細片を出土している。住居群の配置からⅤⅠ3と前後する経営時期が想定でき、布留式甕第29図65を指標とする年代の堅穴住居とみられる。第29図に掲げた65～68は土師器、69は弥生土器である。

口縁部端部を広く匙面状に内傾させる65は、河内32期〔杉本2006〕、大和上ノ井手遺跡ⅤE030下層〔安達・木下1974〕、和泉布留2式新段階後半～布留3式初頭〔西村・池峯2006〕、寺沢布留3式〔寺沢1986〕、米田布留式Ⅲ期〔米田1994〕にほぼ併行するもので、森岡・西村が布留式新段階前半に位置付けている資料である〔森岡・西村2006〕。口頸部の起き方や無造作な不連続の全面ヨコハケにもその特徴が反映している。内面のヨコケズリも不整ハケに転換している点に留意したい。器質も細粒砂を均質的に混ぜ、明るい肌色の焼成を示す。他の布留式甕に比べて器壁も厚く、より新しい様相を帯びる。66・69はこの土器に確実に先行するものであり、堅穴住居の存続時期より古いものが混在したと考える。甕口縁部66は口縁先端の積み上げと口端部の擬凹線などから、庄内1式の小皿型とみられる。淡赤褐色の明るい焼き上がりで、連続ラセンタキの痕跡を残す。復元口径32.0cmの69は、Ⅴ-5段階までのⅤ様式系高杯で、杯部外面に暗文風のタテヘラミガキを施す。内面は横方向の調整で、有稜部の稜線はシャープである。近在の弥生時代後期包含層や遺構からの二次的堆積物とみて大過ないだろう。焼成は良好で、褐色を呈する。67は古代に下る土器なのか、口端部を丸く収める。在地的な律令期の土器とみられるが、古墳時代（6世紀）に遡るものかもしれない〔辻1999〕。55と器形の類似する68は、外傾する端部に丸味をもち、平滑な仕上げとする。胎土・焼成ともに良く、明褐色を呈する。器種は不分明である。90は凹蓋式のサヌカイト製の石礫で、残存長2.6cm、厚さ0.4cm、重さ1.1gである。91は淡灰緑色の釉がかかる甕の口縁部である。

ⅤⅠ9は床面中央に炭片や焼土粒が集中しており、一連の住居群の中では最も古い様相を帯びる土師器を主体とするが、少量の須恵器小片が混じり、軽石2片（第33図99・100）も出土している。第29図には合計6

点の土器(70~75)を掲げているが、他の資料を勘案すると第V様式~庄内式期前半の竪穴住居の時期を示唆する。

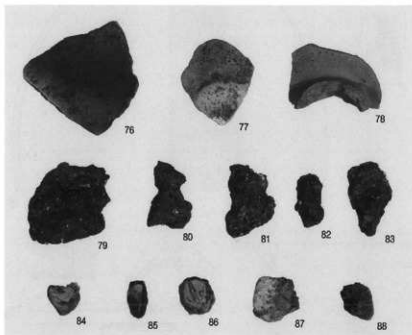
加飾壺70は、その特徴から米田分類庄内式期Ⅱ〔米田1994〕に帰属するもので、Xa期吉備型甕、布留甕A類を伴出する船橋遺跡井戸5などに類似品がみられる。逆「L」字状の一次口縁より60°前後短く拡張する二次口縁を有すると説明されるもので、波状文と竹管文付円形浮文などで飾る、一次口縁外面部に二次口縁の貼り付け痕を残す。高杯72や甕73・74などが当該期にあっては古相を示すが、高杯71は布留式期に下るようである。75は明確な布留式甕であるが、住居の年代とは考え難い。この他、第32図92は布留0式前半の甕口縁部、93は直口壺口縁部、94は庄内式期初頭の高

杯口縁部、95は高杯脚部で、庄内式期の資料が認められる。

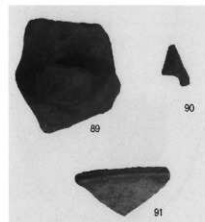
不整半球形の軽石99は径5.5cm、厚さ4.2cm、重さ23.4gで、条線状の使用痕がみられる。99から剝離した100は長軸5.0cm、短軸2.9cm、厚さ1.6cm、重さ3.9gで、これらは鉄器の加工に用いられたのであろう。

S I 10は調査区南端の方形プランの竪穴住居である。出土遺物から時期の検討は困難だが甕をもつ段階の住居であり、相関関係がうかがわれる遺物がみられる。第32図96~98、第33図101~108、第34図109~118は土師器、第34図119~122は須恵器である。

庄内Ⅰ式に遡る109は銅簀期 of 庄内甕で、摂津地域では早くに影響を受けての出現を示唆する。搬入品ではなく、褐色を呈し、胎土も西摂産である。他にも庄

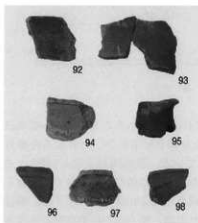


第30図 第2遺構面SⅠ出土遺物(4)



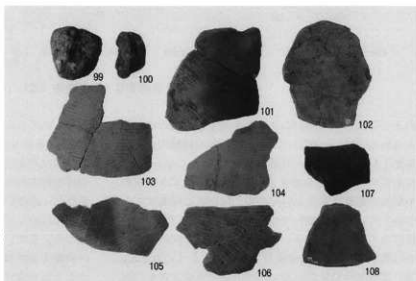
第31図 第2遺構面SⅠ出土遺物(5)

76~78 SⅠ5出土 79~88 SⅠ6出土
89 SⅠ7出土 90~91 SⅠ8出土

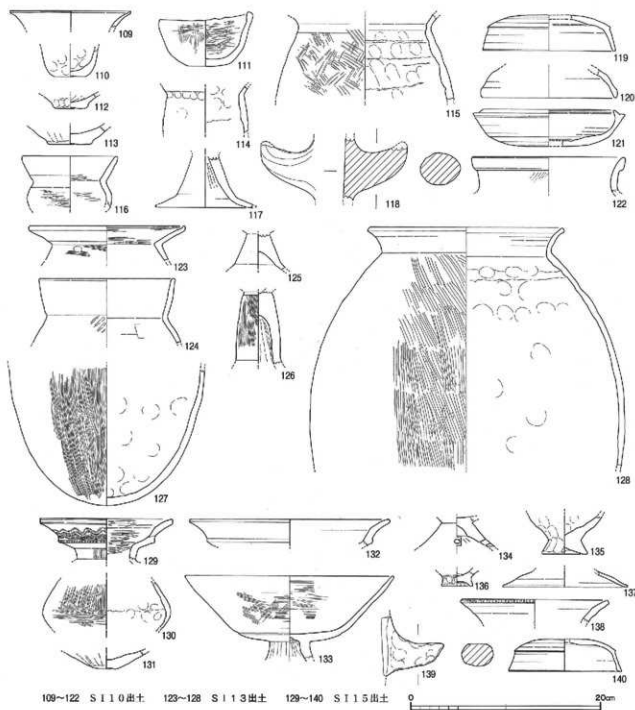


第32図 第2遺構面SⅠ出土遺物(6)

92~95 SⅠ9出土 96~98 SⅠ10出土
99・100 SⅠ9出土 101~108 SⅠ10出土



第33図 第2遺構面SⅠ出土遺物(7)



第34図 第2遺構面SⅠ出土遺物(8) 1/4

内Ⅰ・Ⅱ式のやや細かいタタキを有する体部片が多くみられる(101~106)。これらの内面には102のように指頭圧痕・指ナデ痕の明瞭なものも少なくない。110は小型の鉢で褐色を呈する。111のようなボウル状の小型鉢の類例は数少ないものの、庄内式に帰属するのであろう。平底の112・113は、112が小型の鉢、113が壺になる可能性がある。114は粘土帯接合痕の残る甕の口頸部で、タタキ調整痕が下地にあるようにみえる。甕の頸部片115は幅1.5~2.0cmの粘土帯接合痕を内面に残す粗雑な作りで、外面のタタキおよび板ナデ痕も

粗い。いずれも庄内式段階といえるだろう。小型丸底壺116は布留2式より新しいもので、ヘラミガキ調整の簡略化が起こっている。脚端部を欠く117は、布留式初期の典型的な高杯の脚部である。胎土も大きく変化した、微砂から成り、明るい黄褐色を呈する。脚柱内面には絞り目をとどめ、横方向の回転調整がかなり加わる。また、96~98の甕口縁部や外面に細かいハケメ調整を施す107・108(接合関係を有する同一個体)のような布留式甕もみられる。他に、6世紀以降に比定される甕把手118、杯蓋120、杯身121、壺口縁部122

や、淡紫色を呈する古式の杯壺119もある。119は天井部のヘラケズリの範囲は広く、部位界の稜は鋭く突出的で、I型式5段階に遡る資料である。

なお、土師器壺113や壺114・115は甕の内側から出土したもので、甕の東側から、土師器鉢110・111や壺の口縁部片97と共に、106を含む多くの体部片がまとまって出土している。S I 10出土の遺物は、時期にばらつきがあるが、甕の存在を考慮すると、庄内式併行期の遺構と重複する位置に、5世紀以降に構築されたとみらるべきである。これは、S I 10の上層埋土とみなしたS I 5から出土した土師の主体が布留2式であることも矛盾しないであろう。

S I 13も甕を有する堅穴住居で、形態の判明する土器は全体に新しく、5世紀末～6世紀のものを主体とする。然焼部中央において支脚の礫が遺存していた。第34図に図示した6点(123～128)は土師器である。

123は希少な搬入庄内河内型甕である。胎土中には大阪平野沖積地特有の角閃石・黒雲母片の微粒を多く含み、全体的に器質は細粒砂からなる。内面は口頸部まで強く割り込み、界線は鋭い稜線が走る。外反する口縁部端は上方に摘み上げ、その外面側にはナイーブなヨコナゲ調整が加わる。庄内3式後半～4式初頭に位置付け可能であり、土器移動の盛行期とみて大過ない。チョコレート色というよりは薄い灰褐色を呈し、器壁中に黒色芯をもつ。124は二次焼成を受けた煎煎に供した製塩土器の破片で、壺形になる。底部は尖るか丸底になるだろう。おそらく庄内式末から布留式初期にかけてのものと思われる。125は短頸の高杯で、胎土や色調から布留式期に下るものであろう。丸みを帯びた高杯脚柱部で、脚部が一気に外反する126は布留式期のもので、素地土は良い。127の丸底の甕や長頸傾向のみられる壺128は、甕の東側からまとまって出土している。外面のタテハケと内面の指頭圧痕が顕著なもので、明るい黄灰色を呈する点で共通する。他の土器類より圧倒的に残存率が高く、5世紀末～6世紀初頭頃のものである。

S I 14から出土した遺物は、残存状況のあまりよくない弥生時代後期の葉片と庄内式併行期の大型壺・高杯・小型丸底甕などの細片で、図化しなかった。

S I 15から出土した土器は12点図化した(第34図129～140)。5世紀代の須恵器杯壺140や6世紀代に下り得る飯把手139とともに、庄内式から布留式併行期の土師器が出土している。

129は口縁部外面を加飾する二重口縁の甕で、非常に短い頸部が特徴的である。短く外反する口縁部には櫛指波状文を施し、その下端を細かなビッチで刻む。赤彩していた可能性があり、明黄褐色を呈する。130は器壁が薄く、表面を褐色に焼き上げる精製した瓢形甕で、東海地方からの搬入品と思われる。黒斑が目立つ131は胴の横張する壺底部で、底面は10円玉程度の大

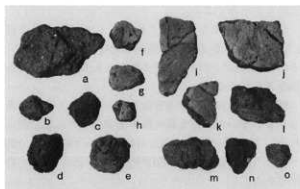
きさである。庄内式のものであろう。132は二重口縁の壺か高杯が判断がつかない。杯部の深い高杯133は、不整ながらもヨコミガキで調整する。杯の端部は丸く収めており、布留1式期の高杯である。黄褐色を呈し、胎土は全体的に精良である。134は椀形高杯の脚部であろう。明るい褐色で焼成は良好である。135は粗雑な作りの鉢底部で、器表は荒れている。136も小型の鉢とみられる。その他、高杯裾部の137や口縁部端に刻み目をもつ138のように、庄内式～布留1式期までの壺・高杯などの破片が目立つとともに、5～6世紀の土師器片も含んでおり、飯把手139もみられる。径12.0cmを測る須恵器杯壺140は、口縁部や天井部境の稜はシャープで、端部は凹面状の段差をなす。5世紀末の資料である。なお、鉄釘片1点も出土している。

遺物の主体は布留2式であり、遺構の年代はこの段階とみたい。甕139と須恵器杯壺140は、切り合い関係を有するS I 13に帰属するものかもしれない。

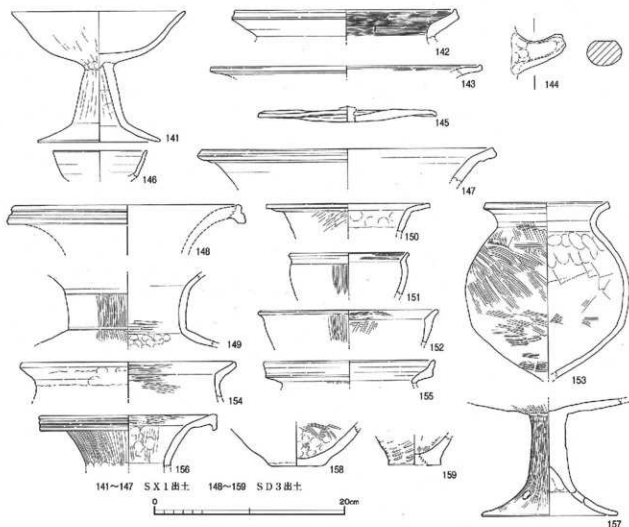
焼土集中ビット・粘土集中部 調査区南東部において検出された焼土集中ビットには、白灰色シルト質粘土と焼土が詰まっており、ビット2には土師器・須恵器の細片も含まれていた。第35図には焼土集中ビット1・2から出土した焼土の一部を掲げている(a～o)。最大のaは、長軸11.2cm、短軸6.9cm、最大厚3.3cmを測る。堅く焼きしまっている酸化している淡褐色～黄灰色面と裏側の灰色面をもつa～e・l～oと、板状で幾分軟質の淡灰褐色面と、その裏面で吸炭した色を呈して堅い面をもつf～kの2通りが認められる。これらはスサを含む状態のものが多く、とくにkの裏面は棒状ないし木目の顕著な板状の圧痕がみられる。これらは如壁の一部と想定している。

焼土集中ビットに囲まれるように検出されたS X 1の出土遺物には、布留式の土師器や奈良時代前後の土師器・須恵器(第36図141～147)がみられる。

141は布留3式初頭に属する高杯で、口縁部は丸く収めつつ外反する。小型精製器種類が解体していく段階のものであろう。砂粒を含み、淡い褐色を呈する。142・143は奈良時代の煮炊具の口縁部片である。甕の



第35図 第2遺構面焼土集中ビット出土焼土
a～h ビット1出土 l～o ビット2出土



第36図 第2遺構面SX1・SD3出土遺物 1/4

把手144も同時期とみて大過ない。焼け歪みの著しい145は播磨産の可能性のある須恵器杯蓋で、平城Ⅰ～Ⅱ期のものではなかろうか。146は杯G身であり、復元口径は10.0cm。灰色を呈する7世紀後半代のものである。壺147は口頸部片で、上方に外反してのび、途中外反角度を変えて口縁端部に至る。端部は意識的に肥厚させて断面方形に仕上げられ、端面には浅い凹線が走る。胎土・色調ともに非陶呂産で、やはり奈良時代のものとみてよい。

炉壁状の焼土をもつ焼土集中ピットや粘土集中部(SX1)は、鍛冶関係の遺構の可能性が考えられる。その時期については、布留式期よりも奈良時代の可能性を考えている。

溝SI8に先行するSD3から出土した遺物はあまり多くないが、弥生時代第V様式前半の土器に限られる(第36図の148～159)。148・149・158が壺、150～152が鉢、153～155・159が甕、156が器台、157が高杯である。

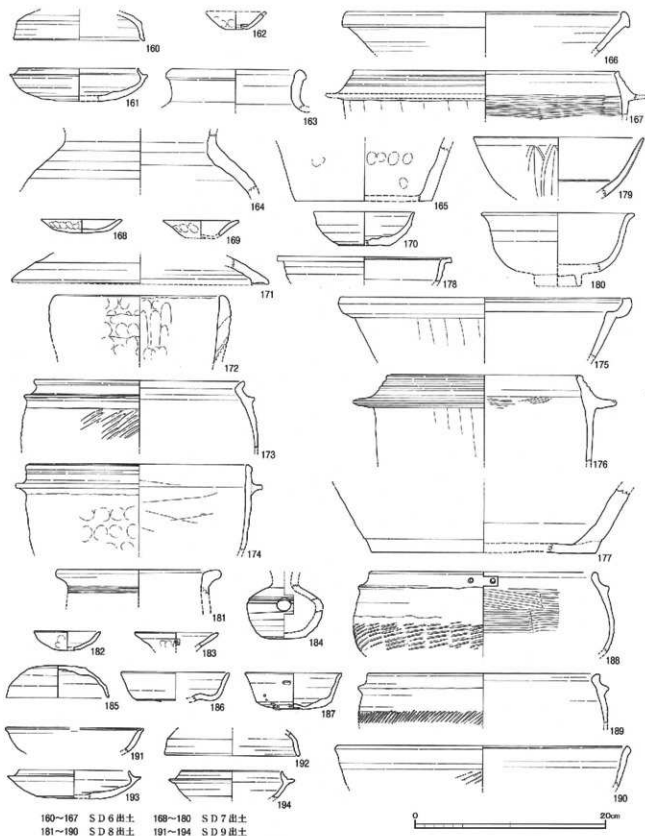
垂下する口縁部を有する広口壺148は粗放な擬凹線で口縁部外面を飾る。角閃石・雲母を含む中河内、生

駒西麓部の土器である。広口壺頸部149は端正な作りをなし、明褐色に焼き上げられている。150はタキ成形の「く」の字状口縁鉢である。口縁部には端面をもち、平底を有するであろう。短く外反する口縁部をもつ小型鉢151や鉢152も同時期のものである。153は半完形品で時期を押さえやすいものの、底部を欠く。口縁形態、端部の作りともにいわれる庄内式壺とは異なっており、V-1様式への帰属の可能性を十分残す壺である。角閃石を含んでおり、色合いも暗茶褐色である点、讃岐ないしは中河内からの搬入品と考えてよい。器壁は厚い。154も中河内、生駒西麓部からの搬入土器とみられ、角閃石が目立つ。後期の壺とみてよい。古備型壺の口縁部片のようにみえる155は、胎土からみると吉備からの搬入品とは思えない。むしろ、紀伊・和泉方面の立ち上がり口縁の影響を受けた第V様式壺とみるべきであろう。淡い褐色を呈する。156は中空の器台である。口縁部端面は2条の形骸化した凹線を施す。焼成堅緻で、褐色を呈する。V様式前半に比定し得る。第V様式の土器は他にもあり、脚柱を丁寧に作る高杯157も後期前半のものであろう。突出

する平底の壺底部158や二次焼成を受けた甕の底部159は、第V様式初頭のものである。

SD6の花崗岩礫密集部分から、古墳時代の須恵器や古代瓦と、中世の土師質土器・東播系須恵器・瓦質

土器・陶器（瀬戸美濃焼・備前焼・丹波焼）・瓦などが出土しており、中世の遺構といえる。代表的な須恵器・土師質土器・陶器を第37図に8点（160～167）図示し、第38図に陶器・瓦質土器2点（195・196）、第

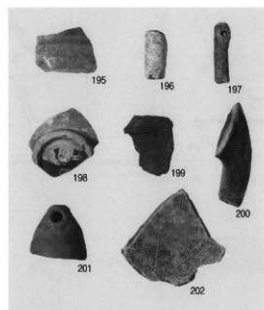


第37図 第2遺構面SD6～9出土遺物 1/4

40・41図に瓦4点(208～211)の写真を示している。

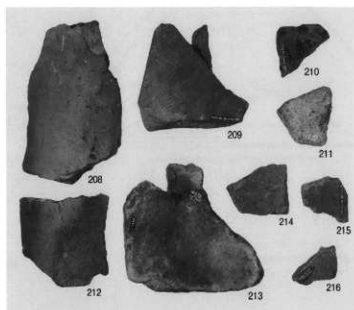
須恵器杯蓋160と杯身161は6世紀の須恵器である。162は比較的丁寧な作りのへそ皿で、14世紀代のものであろう。163～165は陶器甕で、163と165が同一個体の可能性のある備前焼、164が常滑焼である。163は小さな玉縁状の口縁部をもち、外面は褐色、断面は灰色～灰白色に染色する甕で、13世紀後半～14世紀代のものといえよう。166は口縁部が内外に拡張して断面三角形を呈する東播系須恵器鉢で、同時期のものとみてよい。167は土師質焼成の羽釜で口縁部に3条の段を有する。羽釜については、167の他にも土師質、瓦質

ともに多くの破片がみられ、13～14世紀のものが何個体も存在していることがわかる。195は瀬戸美濃焼の瓶の体部片、196は瓦質塙の脚部片である。208・209は焼し瓦で、丸瓦の208は凹面に布目痕に加えて目の粗い板目調整がみられる。平瓦209も凹面に同一原体による板目調整がみられる。このような調整の瓦は極めて良質で、芦屋市域でありま類例をみない。一方、210・211はともに土師質焼成で淡褐色を呈する古代の平瓦で、210の凹面には布目痕、凸面には縄タキ痕が残る。瓦については、古代のものと中世のものがみられるが、SD6出土遺物の主たる年代は13世紀後



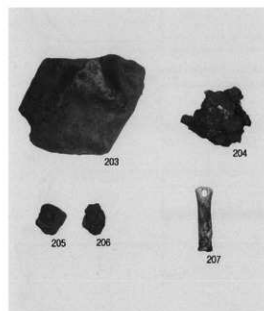
第38図 第2遺構面SD6・7出土遺物

195・196 SD6出土 197～202 SD7出土



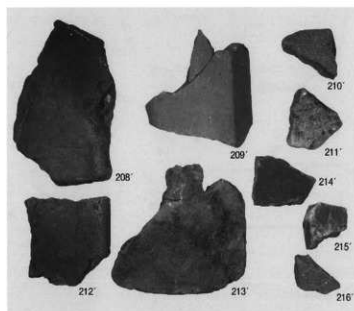
第40図 第2遺構面SD6・7出土瓦(1)

208～211 SD6出土 212～216 SD7出土



第39図 第2遺構面SD8・9出土遺物

203～206 SD8出土 207 SD9出土



第41図 第2遺構面SD6・7出土瓦(2)

208'～211' SD6出土 212'～216' SD7出土

半～14世紀のようである。

SD7も礫を多く含む部分を中心に、弥生土器・土師器・須恵器・土師質土器・瓦質土器・陶器（丹波焼・瀬戸美濃焼・備前焼）・磁器（白磁・青磁）・土錘・製塩土器・イダコ壺・瓦など多様な遺物が出土している。第37図には13点（168～180）の遺物を図示し、第38図には6点（197～202）、第40・41図に瓦5点（212～216）の写真を提示した。168・169は手づくねの土師質小皿で、169はへそ皿である。須恵器170は内縁する体部に僅かに外反する口縁部をもつ奈良時代の杯である。171は復元径23.6cmと推定される超超の杯蓋で、返りは僅かに下方に突出する。製塩土器172は3mm大の砂粒を多く含む軟質焼成で、粘土組織接合が明確に残る。砲弾形に復元できる奈良時代のものである。このような製塩土器は、「大領」「少領」の黒青土器を出土した寺田遺跡第90地点の池状遺構（S4）からもまともに出土しており〔戸田市教委2014a〕、官衙的な色彩を帯びた資料とみることもできる。173～176は中世の煮炊具で、173が指磨型の土師質羽釜、174が口縁部外面に1条のみの段をもち、体部を指押さえる・ナデで仕上げる瓦質羽釜、鉄網形土師質土鍋で口縁部の彎曲が強い175、口縁部に多条の凹線をもつ摂津・河内に通有の瓦質羽釜176など、多様である。また、177は淡橙色の常滑焼甕底部、178は古瀬戸の皿である。179・180は貿易陶磁の青磁碗で、灰オリブ色の179は14世紀の龍泉窯系の鎮墓井文碗、厚手で淡緑色に発色する180は15世紀前半に下る端反り碗である。

197は残存長5.9cm、重さ12.8gの棒状有孔土錘である。淡青灰色で器面が荒れている198は、極めて厚い高台をもつ青磁碗で、15世紀に下る直口碗であろう。口縁部が上方と下方に拡張する199は、胎土に砂粒を含み赤褐色～暗褐色に発色しており、乗岡福平の中世4期〔乗岡2000〕、15世紀前半の指鉢である。200は瓦質塼の脚部で、内面に放射状の指目のある202は瓦質指鉢である。これらの層属年代は14世紀～15世紀前半が中心といえる。

201は須恵質のイダコ壺の把手片で、奈良時代～平安時代に遡ろう。212は凹面には布目痕と板目調整がみられる丸瓦であるが、SD6出土の208と比べると、粗雑な作りで焼成もあまい。213は全体に表面が劣化しているが、凹面に布目痕のみられる土師質焼成の平瓦である。214・215は軟質焼成の燻し瓦で、凹面に布目痕、凸面には縄タタキ痕がみられる。須恵質焼成の216の凹面にも布目痕がみとめられる。

SD8からは、弥生土器・土師器・須恵器・土師質土器・陶器（常滑焼）・土錘などが出土している。中世の遺物が目につくが、古墳時代～奈良時代の遺物が比較的多く、特徴的な弥生土器もみられる。また、精錬滓や焼土も含まれる。第37図に図示した10点（181～190）は弥生土器・土師質土器・須恵器で、第39図

の4点（203～206）は土師器、精錬滓、焼土である。

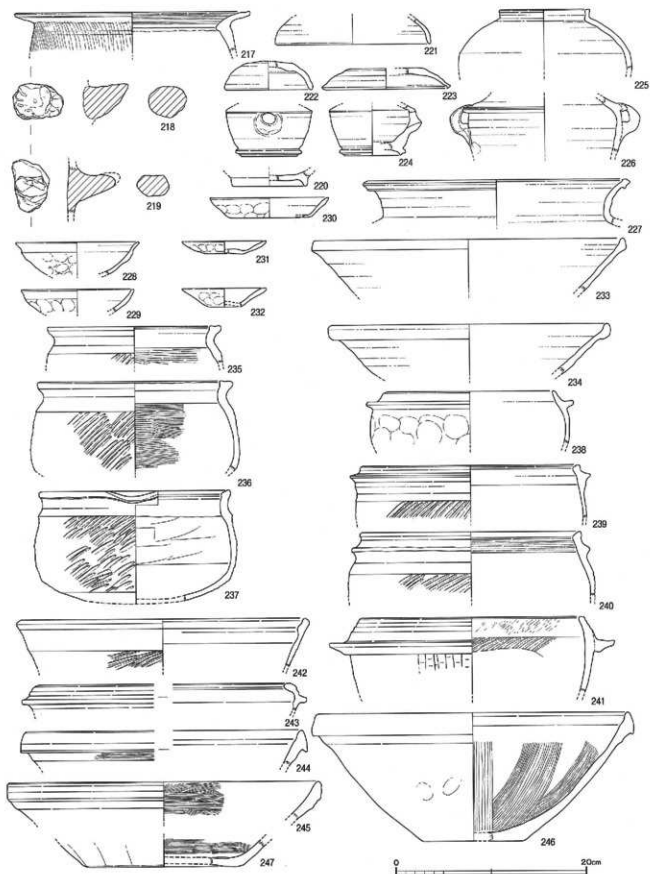
181は逆「L」字状口縁をもつ弥生土器甕である。ヘラ指沈線がみられ、第I様式に遡る。なお、第4遺構面において弥生時代中期前葉の土器がまともに出土しており、逆「L」字状口縁化した甕（第62図454）が1点存在するが、典型的な逆「L」字状口縁の甕は当調査地点では181のみである。182・183は土師質小皿で、手づくねの182は口縁部に煤の付着があるので灯火具として使用したことがわかる。183は水箆した精良な粘土を用いたへそ皿のようであるが、焼成後に内面と外面の両方から径2.5mmの円孔を穿っている。須恵器は4点図示したが、184は丸みのある胴部をもつ甕、185は杯H蓋、186・187はやや深めの杯身である。188～190のように中世の煮炊具もまともに出土しており、188・189は指磨型の羽釜、190は鉄かぶと形の土鍋である。また、203は奈良時代の把子付土鍋、204は精錬滓、205・206は焼土である。砂粒の付着の多い204は歪な形状で、縦・横約6cm、厚さ約4cmで、重さ104.5gを測る。205・206はスサがみられ、軽量である。

SD8は、土層の切り合い関係から、SD6・7に先行すると考えられる。奈良時代の遺物がある程度まともになっているが、奈良時代の遺構が除々に埋没する最終段階で、183・188～190のように、SD7出土の煮炊具と時期が重なる15世紀代の遺物が流入したとみることでもきよう。

SD9は、古墳時代後期の土師器・須恵器と土錘が出土している（第37図191～194、第39図207）。

191は土師器杯で、口縁端部が僅かに外反しており、飛鳥時代のものである。須恵器杯蓋の192や杯身193・194は6世紀末葉以降に比定できる。また、207は棒状有孔土錘で、残存長6.1cm、重さ11.0gである。このような土錘は、191～194と共伴しても何ら差支えない形態である。

SD11の出土遺物は弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・土師質土器・瓦質土器・東播系須恵器・陶器（常滑焼・備前焼・唐津焼）・磁器・土錘・瓦など実に多彩で、量も多かった。このため、すべてを図示することはできないので、ここでは寺田遺跡における本調査地点の特性を示す遺物と、遺構の年代の根拠となる遺物に限って報告している。第42図には、土師器4点（217～220）、須恵器7点（221～227）、瓦器2点（228・229）、土師質土器14点（230～243）、瓦質土器4点（244～247）を、第42図には、東播系須恵器9点（248～256）、瓦質土器5点（257～261）、陶器2点（262・263）、磁器4点（264～267）、瓦3点（268～270）の実測図を収録した。また、第44図には須恵器6点（271～276）、第45図には土鍋脚部5点（277～281）と甕片2点（282・283）および陶器1点（284）、第46図には陶器7点（285～291）、第47図には鉄製品4点（292～



第42図 第2遺構面SD11出土遺物(1) 1/4

295)、土鍾2点(296・297)、石製品1点(298)、第48・49図には瓦6点(299~304)、第50・51図には平瓦6点(305~310)を挙げている。

217は8世紀の長胴釜、218・219は低ないし高の把手である。高台をもつ220は回転土師器の底部で、10世紀頃のものである。

221は6世紀後葉の杯蓋、222は杯口蓋で、7世紀に下る。つまみの欠損している223は、天井部が平らな笠形で、口縁部が僅かに内側に屈曲する奈良時代中頃の杯蓋である。224は注口下部に粘土を貼り足し、低い高台をもつ器で、特異な形態といえる。短頸壺225は、球形の胴部に直立する口縁部をもつもので、胎土は精良、焼成も堅靱な優品である。226は双耳壺の肩部片で、突帯端部に凹線状のナデを施す。227は外反する口縁部の端部を縁帯状に肥厚させた甕である。須恵器については223・225~227の他にも、奈良時代半ばから平安時代前期の杯・瓶・壺・甕などの破片が相当量認められる。第44図の271は平版の体部であろうか。胎土は極めて良好で変化点付近に横方向の明瞭なナデが巡る。カキメの顕著な横車体部の272や、底部外面を丁寧なヘラケズリで仕上げた超径の杯身274もみられる。273・275は長頸壺体部で、273は自然釉の付着と窯壁の融着が顕しい。276は焼成の極めて良好な甕である。また、第45図の282・283は当該期の甕片であろう。

228・229は13世紀前半の和泉形瓦器碗で、228は外面の指頭瓦痕が著しい。ともに暗文は観察できず、229は炭素の吸着が悪く淡灰色を呈している。

230~232は、精良な胎土を用いた手づく成形の皿で、231は復元口径8.8cmを測る。231・232はへそ皿に復元できよう。これらは14世紀代に下るものである。鉢233・234は、形態や調整が東播磨系須恵器と共通するが、焼成状態は土師質である。233は胎土にチャート片を含み、淡橙色~淡灰橙色を呈する。口縁部が内外面に拡張する234は、器面が灰褐色、断面が淡灰褐色を呈する。焼成状態から東播磨系須恵器とはいえないが、酸化焼成などで土師質化した東播磨産ではないかと思えるほど東播磨系須恵器に似ている。その編年観を援用すると、233は13世紀前半、234は13世紀後半~14世紀前半のものであろうか。235~243は土製の煮炊具で、235~237は播丹型の甕である。体部外面は平行タキ痕を残し、内面は板ナデないしハケメ調整で仕上げている。口頸部の立ち上がりが短く、235・236は玉縁状の口縁部を内側に巻き込む形態で、237は片口を有する口縁端部に内傾面をもつなど、長谷川編年Ⅵ期(1450~1520年)に比定できる〔長谷川2006〕。238は内響気味に立ち上がる短い口縁部をもつ羽釜である。播磨型の羽釜239・240は鈔の退化が著しく、播丹型と同様、長谷川編年Ⅵ期のものである。241は水平に伸びる鈔と外面に段状のナデを施す口縁部をもつ羽釜で、後述する瓦質羽釜の260・261と同様に14世紀

以降の摂津地域に一般的にみられる。図示したものは241のみであるが、他にも20個体以上の出土を確認している。242は鉄かぶと形の鍋で、口縁部は内側に肥厚する。これもやはり長谷川編年Ⅵ期のものであろう。243は小さな鈔と内側に強く屈曲する短い口縁部をもつ羽釜で、極めて良質の胎土を用いている。茶釜の影響のもとに大和で使われているものに似ているが、芦屋市域での出土は珍しい。244・245は口縁部の断面が三角形で口縁帯状に発達した鉢である。ともに断面は淡灰褐色であるが、244は外面が、245は内面・外面の器面が暗灰色を呈しており、瓦質土器とみている。芦屋市域での出土量は乏しいが、和泉地域では東播磨系須恵器鈔の代わりにこのような瓦質鉢が盛行するので、これらは和泉からもたらされたものと推測している。244の内面はナデ調整で、外面は口縁部がヨコナデ、口縁部直下に板ナデないしハケメが残るが、体部は粗いヘラケズリで仕上げている。また、245は内面に目の細かいハケ調整が施され、外面は口縁部がヨコナデ、体部がヘラケズリである。内面には放射状の節帯の描目のみられる播鉢246は244に似た口縁部形態で、胎土も244・245と良く似ている。平底の247は内面がハケ調整、外面がヘラケズリで、煮炊具の底部であろう。東播磨系須恵器片は煮炊具片に次いで多くみられるが、出土しているものの大半が鉢で、碗・皿類はほとんどみられなかった。図示したものでは248が小形鉢、249~255は鉢で、256は甕であるが、小形鉢は通常の鉢が口端部を拡張する13世紀半ば~14世紀においても拡張は小さいので、口端部を僅かに内上方に伸ばして丸く収める248は、13世紀半ば以降のものともみても差支えない。口端部にナデを施すことで僅かに拡張する249は古相を留めており、12世紀後半~13世紀に普遍的にみられる。250~253は口縁部の拡張が大きくなる。口縁部形態を中世土器研究会2014年度分類〔中世土器研究会2014〕に照らし合わせると、250・252が口縁端部を内外または上下に拡張する「B3類」、251・253が口縁端部を内方または上方に拡張する「B1類」になる。拡張の程度からみて、13世紀後半~14世紀前半に比定したい。254は底部外面にもナデ調整がみられるが、255は明瞭な回転糸切り痕が残る。256は口縁部が勢いよく外反し、口端部先端を上方に摘み出している。体部外面には矢羽根状のタキを施し、内面に当て具痕が残る。

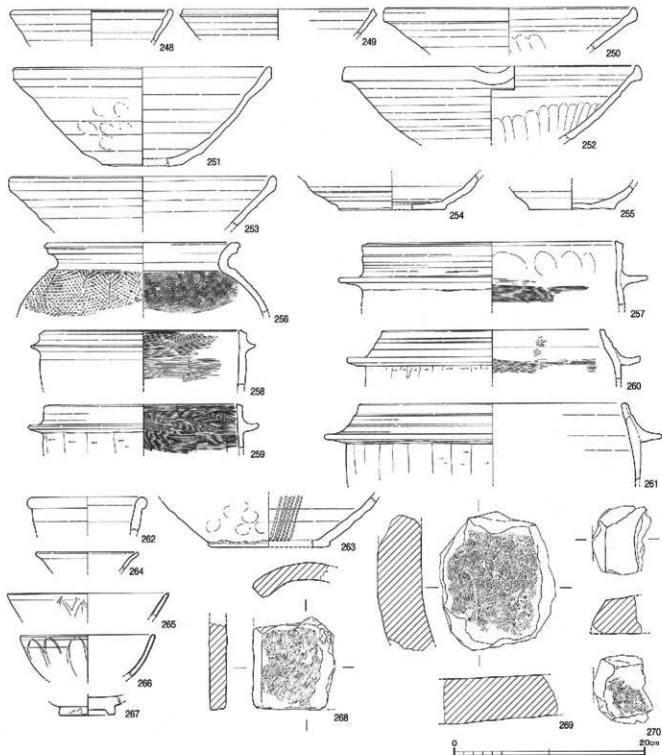
羽釜も多く、かつ形態は多岐である。水平に伸びる鈔に、外面に2条のナデを施してほぼ直立する口縁部をもつ257、鈔は極端に小さく口縁部の立ち上がりも短い258、口縁部の凹線状のナデの1条のみの259とともに、外面に段状のナデをもつ口縁部がやや内彎しながら立ち上がる260・261のような羽釜が多く出土している。さらに、煮炊具としては、第45図の277~281のように土製の脚部片も散見される。

262は小さいながらもはっきりした玉縁状の口縁部をもつ備前焼甕である。外面は黄褐色がかり、断面は灰色を呈するもので、13世紀代のものであろうか。263は橙色に発色しており、内面に描目のみられる備前焼播鉢である。S D11から出土した陶器で最も新しいものは、第45図284の初期唐津焼であるが、これは混入とみている。その他、陶器では、灰色を呈する無釉陶器の小型瓶口頸部285や、常滑焼甕片286～291も

みられた。286～289が褐色に発色しているのに対して、290・291は灰かぶりや黄灰色である。このうち、286・287・291には押印文がみられる。

磁器では264が口壳の白磁皿で、265～267が青磁碗である。265は淡灰緑色の龍泉窯系の鎗蓮弁文碗、266は265より黄色がかった蓮弁文碗、267は淡青灰色の粗製の碗底部である。

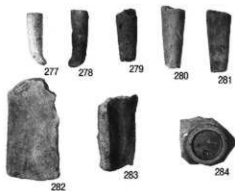
瓦も出土しており、268は凹面に布目痕の残る薄手



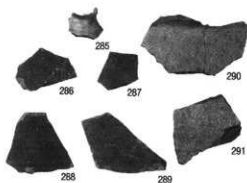
第43図 第2遺構面S D11出土遺物(2) 1/4



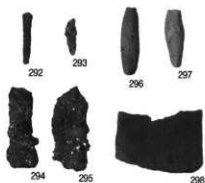
第44図 第2遺構面S D11出土遺物 (3)



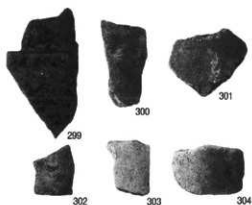
第45図 第2遺構面S D11出土遺物 (4)



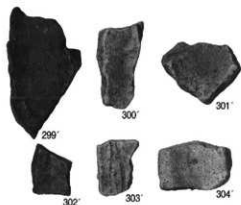
第46図 第2遺構面S D11出土遺物 (5)



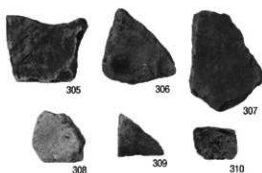
第47図 第2遺構面S D11出土遺物 (6)



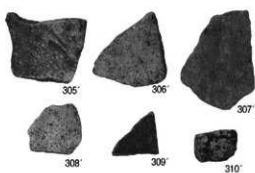
第48図 第2遺構面S D11出土遺物 (7)



第49図 第2遺構面S D11出土遺物 (8)



第50図 第2遺構面S D11出土遺物 (9)



第51図 第2遺構面S D11出土遺物 (10)

の丸瓦で、胎土はきめ細かな粘土である。厚さ4cmを超える269は磨滅の進んだ軒平瓦で、瓦当の模様は観察できないが、曲線型であることがわかる。花崗岩風化粒である長石・石英片を多く含む胎土はざらついている。シャモットを多く含む270は、ヘラで斜めに切り落とされており、古代の道具瓦とわかる。また、第48～51図の古代瓦299～310は、299～304が丸瓦、305～310が平瓦である。すべての凹面に布目痕が残っており、302は模骨痕が、303は布端の圧痕がみられる。凸面に縄タギがみられるのは、302・305～309である。玉縁のある299は歌賀の焼し瓦で、307・309は淡灰色の瓦質焼成であり、それ以外は軟質で淡黄橙色を呈する。

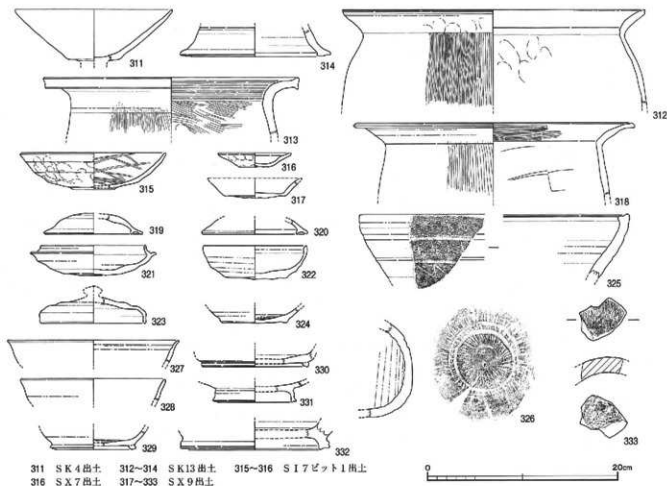
さらに、第47図に紹介したように、断面方形の鉄釘292・293や板状の鉄製品294・295、管状土鍾296・297とシルト質粘板岩の砥石も出土している。292は残存長4.3cm、一辺0.8cm、重さ4.3g、293は残存長3.2cm、一辺0.8cm、重さ3.4gである。銚部分に砂粒の付着が目立つ294と295は同一個体のものであるが、接合はできなかった。294は残存長7.0cm、最大幅2.6cm、砂の付着していない部分の厚さ0.8cm、重さ25.1g、295は残存長7.3cm、最大幅3.3cm、砂の付着していない部分の厚さ0.9

cm、重さ37.1gである。296・297はともに良質の粘土で作られており、同時に使用されたものかもしれない。296はほぼ完形で、残存長5.8cm、最大径1.6cm、重さ10.8g、写真の上部が欠損している297は、残存長5.0cm、最大径1.6cm、重さ10.3gである。上下が欠損し、表面も剥離している298は、幅7.4cm、残存厚1.2cmで、表面に線条痕が観察できる。

このように、SD11出土遺物には奈良時代中頃から平安時代前期の遺物が一定量認められる。その後、13世紀から15世紀初頭頃までの遺物が継続的に認められる。前者は双耳壺や精製の短頸壺など官衙的な色彩を帯びたものが含まれているが、後者は煮炊具や鉢など一般集落の調理具が多い。

土坑 土坑の多くは古墳時代から奈良時代の土師器片・須恵器片を作う傾向があるが、中世の遺構も認められる。ここでは特徴的な遺物を出土したSK4・SK13・SI7内ビット1・SX9の遺物を第52図に図示し(311～333)、SK7・SX9の遺物の写真を第53図に掲げている(334～340)。

SK4からは、土師器のみが出土していて、主たる遺物は精製品高杯311である。やや内彎しながら直線的に開く杯部を有し、明褐色に焼き上げられている。



第52図 第2遺構面SK4・13、SI7ビット1、SX7・9出土遺物 1/4

素地に砂粒などを全く含まない。脚柱部や裾は知り得ないが、布留1式でも新しい段階のものであろう。

S K 7 から出土した遺物は須恵器大甕体部片1点(第53図334)のみである。焼成は堅緻で、丁寧な平行タタキにカキメを加える古墳時代後期のものである。

S K 13は奈良時代の土器を中心とする遺構で、土師器・須恵器片がまとも出土している他、中世に下る土師器片・陶器片も少量みられる。312は律令期の胎土を示す長胴甕の一部であり、口縁端部の調整は端整である。313はより時期の下る甕で、粗いハケで調整する。褐色を呈し、砂粒を混える。314は古墳時代の須恵器脚台である。

S I 7ピット1からは、残存率が2分の1以上の瓦器碗と東播磨須恵器碗片が出土している。瓦器碗315は和泉型Ⅲ-3期に比定できる。

S X 7からは、弥生土器、土師器、須恵器と共に15世紀に下るへそ皿316が出土している。

地滑り状の不定形の落ち込み 調査区北部の不定形の落ち込み(S X 9・10)のうち、S X 9では焼土と共に古墳時代後期から奈良時代までの遺物が多く集中し、若干中世に下るものが混在していた(第52図317~333、第53図335~340)。焼土集中部付近にも8世紀前後の遺物がまとも出土しており、土師器の甕や高杯、須恵器の杯・高杯・壺片や布目瓦がみられた。図示したものは、317・318・335が土師器、333が瓦で、他は須恵器である。ロクロ成形の317は平底で口縁部が外反ぎみに開く土師質小皿で、鎌倉時代のものであろう。318は体部外面のタテハケが顕著な律令期の長胴甕と考えられる。杯蓋319・320は内面に小さな返りをもち、本来は宝珠つまみを有するものである。杯身321は短い立ち上がり有する6世紀末頃の杯耳であるが、322は平底の底部に内彎気味に立ち上がる

体部をもつ律令期の杯身である。323はつまみがあったと思われるが、こちらは口縁部が垂直に立ち上がり、天井部が平坦であることから、短頸蓋甕といえる。324は明確な平底をもつ碗で、317に近い年代のものといえる。外面に櫛掻波状文と沈線の加飾がみられる325は播磨で生産された7世紀代の大形甕の口縁部である。326は小振りの横瓶の体部片で、放射状の櫛掻列点文に棒状工具による二重の同心円を加えている。327~333は焼土集中部付近から出土した。327~331は杯身、332は登ないし瓶の脚部である。333は凸面縄タタキ、凹面布目が確認でき、瓦としては粘質の焼成である。また、335は土師器場ないし飯の把手、336は提瓶の口頸部、337は自然軸の垂下がみられる壺体部、338~340は甕である。本調査地点で律令期の遺構は顕著でないが、これら多様で特徴的な遺物の存在は、寺田遺跡の官衙的要素を反映しているとともに、中世以降の土地利用によって削平された古代の遺構群の存在を推測させる。

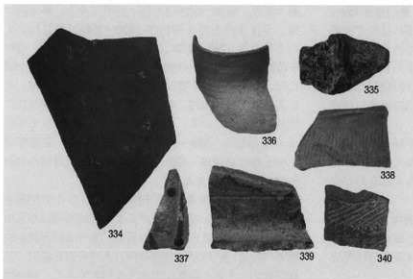
S X 10出土の遺物は微細な土師器・須恵器のみで、概ねS X 9と同様の年代観で理解できる。なお、『実録報告書』所収「堅穴住居等出土遺物実測図」20の播磨型羽釜はS X 10出土となっているが、周辺の中世滑(S D 6~8・11)からの混入とみるべきである。

③ 第3遺構面遺構出土遺物(第54図)

この遺構面で見出した、堅穴住居S I 11と溝S D 4・5からは、弥生時代の遺物が出土している。

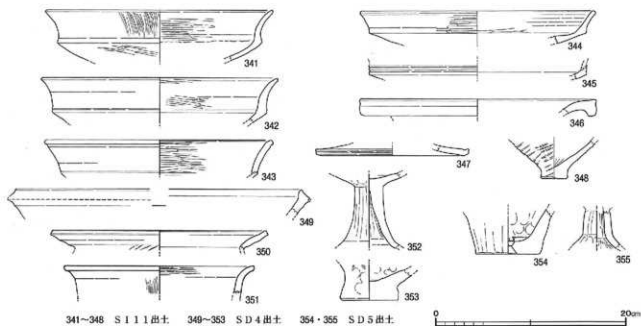
堅穴住居 S I 11は正円形を呈する住居で、本地域では第IV様式から第V様式前半に盛行する。それを裏付けるかのように、床面上から弥生時代後期前半を示唆する良好な一括資料を出土している(第54図341~348)。とくに高杯341~345はほぼ同じV-3様式前後のものといえる。広口壺346や高杯脚部347、鉢348も伴出する。破片の中には第V様式後半以降に下る土器もあるが、庄内式併行期以降のものはみられない。また、炭化材片や台石とみられる人頭大以下の平らな珒岩がみられた。

胎土精良で焼き上りの良い341・342などはハラミガキや有後部のメリハリが良い。342は淡路島北部沖積地からもたらされたものであろう。口縁端を玉縁状に収め、外面の直下に沈線を有する343は、より西の地域からの搬入土器である。口縁の立ち上りの短い344は、東部瀬戸内系の高杯でやはり搬入土器の可能性が高い。淡い褐色を呈し、胎土も良い。六甲山系の花崗岩造岩鉱物の混和は



第53図 第2遺構面SK 7・SX 9出土遺物

334 SK 7出土 335~340 SX 9出土



第54図 第3遺構面遺構出土遺物 1/4

ない。残欠345も東部瀬戸内からの外來品に該当し、杯部外面に整正な凹線文を多条巡らす。胎土・焼成ともに優れる。一方、広口壺346は生駒山西麓部からの搬入土器で、自形の角閃石が目立つチョコレート色の土器である。高杯脚裾に相当する347はやや癖をもつ端面に擬凹線が走る。タキ痕の残る348は、小形の鉢の底部と思われる。これらの土器より上の覆土中には古式土師器の壺口縁部、高杯脚部、第V様式段階の壺・甕底部、生駒山西麓沖積地産の壺体部片が少量認められる。

溝 S D 4 の遺物は乏しいが、最下層から弥生土器片が出土している（第54図349～353）。349は大型の壺口縁部で、短い口縁部は内外面ともに僅かに拡張される。中期中葉～後半のものであろう。壺口縁部350はよくヨコナデされる特徴をもつが、体部にはタキ成形がなされた痕跡をもつ。端部の洗練された擬凹線は古い要素を留めており、第IV様式と考えられる。内面にヨコハケ、外面にタテハケを行う口縁部351は、第II様式の甕片とみて大過ない。脚柱部352は第V様式1・2小様式の高杯で明褐色を呈する。S I 1 1との関係からみて、S D 4 の機能時の時期を示唆する土器片である。胎土精良で厚底の353は第II様式前半のものである。351とともに第4遺構面に由来するものが混入したのであろう。

S D 4 と交わる S D 5 から出土した遺物も極めて乏しいが、第54図354の底部穿孔甕（第II様式）や第54図355の高杯（第V様式1・2段階）はS I 1 1に先立つ土器といえる。

④ 第4遺構面出土遺物（第55～62図、図版10）

この遺構面に伴う遺物の大半は弥生時代のものであ

る。若干、上位遺構面から切り込んだ遺構に伴う古墳時代～中世の遺物の混入はあったものの、この遺構面は洪水に由来すると考えられるⅢ層群によってバックされているので、遺物の一括性は相当高い。遺構面全体で散漫的に弥生土器と石器が出土しており、遺構から出土した遺物も遺構面から出土した土器も、凹線文出現以降の土器を全く含まない中期初頭～前葉の土器が趨勢を占める。ここでは、礫集中部（S X 4）と溝2条（S D 2・12）出土の遺物に次いで、Ⅳ層群とⅢ層群の層界付近で検出した遺構面に伴う遺物を記すが、遺構面出土の遺物は取り上げた層位を考慮して、Ⅲ層群出土遺物とⅣ層群出土遺物に分けている。なお、第55図a～fは、S X 4 を構成していた礫の一部の写真である。第56～62図は土器・石器である。第56図には、S X 4 出土の土器13点（356～368）、S D 12出土の土器2点（369・370）、Ⅲ層群出土の土器6点（371～376）、Ⅳ層群出土の壺16点（377～392）を、第62図には、Ⅳ層群出土の壺・鉢・底部30点（442～471）と石器4点（472～475）を図示し、その一部は図版10に写真を収録している。また、第57・58図は、S X 4 出土の土器26点（393～418）、第59～61図は、Ⅲ層群出土の土器2点（419・420）とⅣ層群出土の土器21点（421～441）の写真である。

礫集中部（S X 4） 第55図の礫は、ここで使用されていた石材の一部をサンプルとして持ち帰ったものである。aは丹波古生層系の頁岩、b～dは丹波古生層系の砂岩、eは在地の花崗斑岩、fは布引花崗岩（花崗閃緑岩）を貫く岩脈に由来する玢岩である。第55図で最大のfは、S X 4 を構成する石材では大きく、縦約6.5cm、横約16cm、厚さ約5.0cmである。

S X 4からは土器も集中して出土していて、壺・鉢・甕の底部だけでも20個体を超えていた。第56図の356~358・361~363・368は壺、359・364~367は甕、360は鉢である。

口縁部や体部下半を欠く356は、粗い胎土で淡褐色を呈する。無文の広口太頸蓋の一部で、多孔質の器面は荒れている。細片の壺口縁部357は粗い砂粒を含むもので、明褐色を呈する。口端を櫛で刻み、頸部には櫛描直線文を複数帯通ねるものであろう。壺では、口縁端部に微かな沈文風の線の入る358もみられる。359は、口縁部の内外面をヨコナデする摂津型bの甕(森田1990)で、主に西摂地域に分布する。体部外面は縦・斜めのハケ調整を施す。大口口径の360は外反する口縁部をもつ鉢で、口縁部の端部を「V」字状に刻む。361は、広口壺a形態(佐原1968)の体部上半片。少なくとも10条以上の多条化するヘラ指沈線文帯で飾る。下地の粗いタテハケ調整を含め、I~4様式に帰属する特徴を備える。361と同一個体とみられる体部片362が存在するが、直線文として用いられるヘラ指沈線からは、その同定はできない。363は、扇形の中心点をもつ櫛描文帯の形成は稚拙なものであり、直線文帯に割り込む広角の扇形文の対向を2つ描き、間を消し去るものと思われるが、その断行は確認できない。やや白っぽく焼かれた壺の破片で、II様式の前半に収まる資料とみなせる。364は、中期前葉の甕の破片である。摂津型や瀬戸内形の甕片で、口縁部直下から櫛描直線文で加飾されており、器質は良い。底部片は4点(365~368)を圈化した。365~367は甕で、復元底径12.6cmを測る368は壺であろう。365は外面にケズリを加え、上げ底である。366も心持ち上げ底となり、ケズリを施す。367は器面が著しく劣化している。

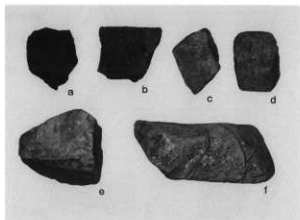
第57図393~399は壺、400~407は甕、第58図408~418は底部である。これらもすべて弥生土器で、大半が中期前葉に比定される。全体的に淡褐色で明るく焼き上げられたものが多いが、甕は焼成不良か二次焼成で黒ずむものが目立つ(400・402~404)。393が壺口縁部片、394~399が甕体部片で、400が壺口縁部片、401~404が甕頸部片、405~407が甕胴部片である。

396は特徴的な付加条沈線をもつ櫛描直線文帯が巡る。異なる二種の原体で施文するものに397がある。壺の加飾は、櫛描直線文帯によるものが多くみられるが、甕体部上半施文率も高い。底部は408~416が壺、上げ底風の417が鉢、418が甕で、径が大きく外面にハケ調整のみられる416は大形甕である。

このようにS X 4出土の土器の中心は第II-1・2様式にあり、前期に遡るものは少ない。

溝 当遺構面から検出した溝2条のうち、S D 2からは、遺物がまったく出土していない。

一方、S D 12からは少量の弥生土器が出土しており、2点を掲載した。外面にハケ調整を加えた369は甕で、



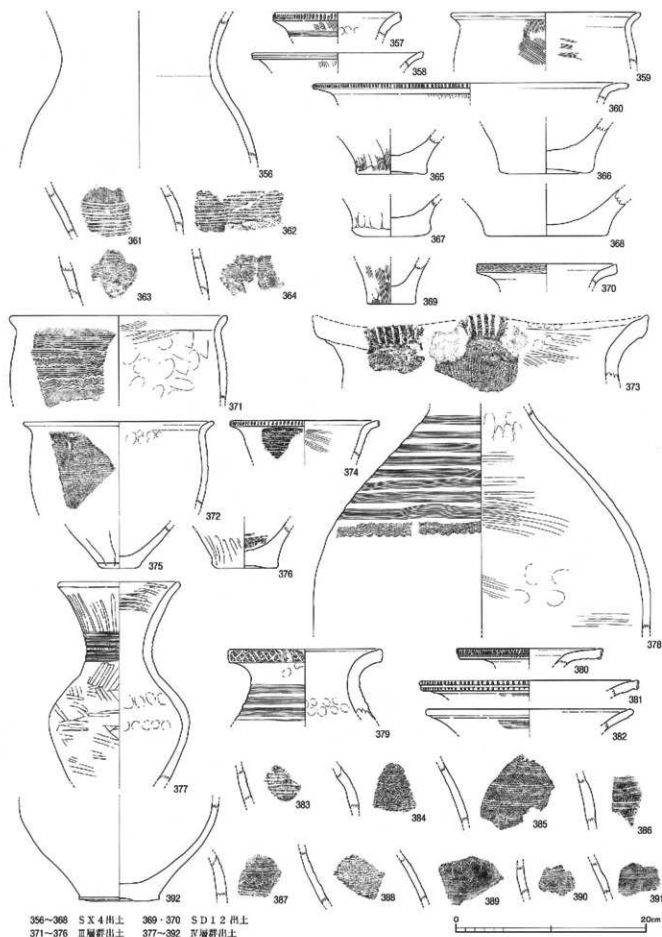
第55図 第4遺構面 S X 04壊

砂粒を顕著に含む。口端にかけて肥厚させる甕370は、端部に波状文を不揃いに描く。砂粒を含み褐色である。

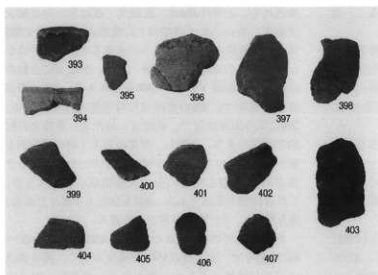
III層群 実報報告書で、「III層群は無遺物層」と記述されるほど遺物の包含が乏しかった。ここで扱っている土器は、III層群下底部、IV層群との層界付近直上から出土したもので、ほぼ中期前葉のものに限られる。371~373・376は壺、374は鉢、375は甕である。

屈折の弱い「く」字口縁の甕371は、黄灰色を呈して砂粒をほとんど含まない搬入品で、復元口径は22.4cmである。器体の上半は櫛描文で飾るが、直線文帯を施したのちに、不整な波状文帯を2帯分挿入するように施文しているのが、文様構成に乱れがある。内面には焼成時の黒斑に加え、カーボンの付着痕も認められる。文様構成原理はII-3様式の範疇で理解してよいが、器形はII-2様式段階を志向する。播磨から入ってきたものである。372の甕もほぼ同時期の搬入品と指摘できる。器形や施文構成は播磨方面のもので、体部の上半に櫛描直線文を2帯重ねて1帯となす複帯構成で、それを2連置く。この間は下地の斜め方向の微細なハケ調整がみられる。胴の張りとは371と類似するもので、II様式第2段階に編年される。373は、本地域では珍しい山城から近江南部の甕で、胎土・焼成は在地的な感懐はあるが、搬入品とも同じ工具を横方向に擦過させて器面調整を行う。明褐色を呈し、石英・長石粒を含む。体部は中位で張るものであろう。文様構成をみると、371と同様にII-3様式の要素を帯びているといえる。なお、同一個体の口縁部片(図版10373c)は、S X 4で出土したものである。

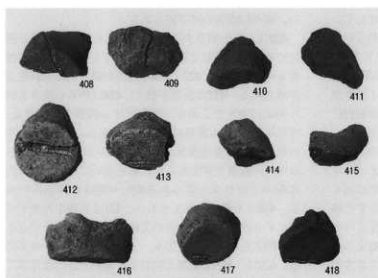
鉢374は先行様式の資料で、10+α状の多条化する沈線文をもつ。こうした伴同関係はこれまでもみられるが、IV層群との関係でいえば、同時並存というより、混在とみなすのが適当と思われる。底部375は壺



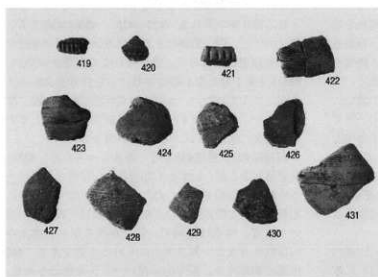
第56図 第4遺構面出土遺物(1) 1/4



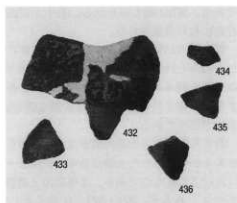
第57図 第4遺構面出土遺物 (2)
393~407 S X 4 出土



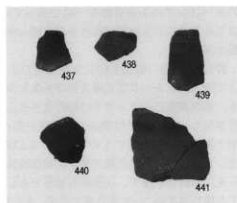
第58図 第4遺構面出土遺物 (3)
408~418 S X 4 出土



第59図 第4遺構面出土遺物 (4)
419・420 III層群出土 421~431 IV層群出土



第60図 第4遺構面出土遺物 (5)
432~436 IV層群出土



第61図 第4遺構面出土遺物 (6)
437~441 Ⅴ層群出土

である。376は壺とみられる。若干上げ底をなし、縦方向に板目調整される。

第59図の口縁部片419は、Ⅱ様式前葉に特徴的なヘラ先刻みを残す広口壺の口縁である。繊細な胴部突起の一部を残す420は、多条に施される突起の最上端のようで、直上には微細な櫛指直線文帯を近接させる。壺上半部片である。

若干先行様式の土器の混在はあるものの、SD12とSX4から出土した土器は基本的にはⅡ-1・2様式に比定されるものであり、Ⅲ層群出土遺物もその範疇で捉えられるが、371・373には若干新しい要素も加わっている。

Ⅳ層群 ここでは、「Ⅳ層直上」「Ⅳ層上部」「Ⅳ層」のネーミングのある遺物を一括で扱っている。377をはじめとする弥生時代前期後半の土器と中期初頭の土器が混成する。

377はb形態〔佐原1968〕を採る壺形土器で、頸部に1帯みられるヘラ指沈線文帯は8条と多帯化している。器面調整のヘラギキは簡略化される。明るい褐色を呈し、胎土中には数mmの石英粒や長石粒をみる。第1様式第4段階期のものである。広口壺体部の378は、8帯以上の櫛指直線文帯下に櫛指波状文1帯を巡らす。器面は平滑で、文様帯も端整である。回転台による描き継ぎは、一ヶ所に集中せず、また目立たない。暗褐色に焼かれ、胎土には白色長石粒が目立つ。内面は粗い横方向の板目調整である。頸胴部界がナイーブで、Ⅱ-2様式に下るものではない。同一頸部に短く外反する口縁部をもつ379は、体部を頸部直下まで櫛指直線文で飾る。用いられた櫛の原体は端整なものであるが、両端ないし一方の端が太くしっかり施文されるものがあり、擦過痕を観察する限り、複数の原体が使用されていることが知れる。僅かに上方への描み上げ調整が看取される口縁部の外端面には、ヘラによる格子目文様を施す。口頸部界には口縁部を貼り付けた残痕が認められる。砂粒を含み、焼成良好で褐色を呈する。口頸部はおよそ2分の1を残している。特筆されるものに、搬入品380がみられる。胎土中に角閃石や金雲母の微粒が看取される。広口壺の口縁部で、端面には一条の沈線帯を施し、上から刻む。明褐色の381は、大きくラッパ状に広がる口縁部をもつ広口壺の一部である。心持下下に肥厚させる口縁部の端部に1条の沈線文を施したのち、縦方向に鋭利な刻み目を入れる。頸部へは縦方向のハケ調整がなされる。ヨコナデが顕著な382も広口壺の口縁部片である。淡い褐色を呈し、器表は平滑である。どちらもⅡ-1・2様式に属するだろう。

断面と拓影を示した383~391は、主として広口壺の体部片で、383は、多条化する平行沈線文が施される前期最終期の時期のものである。383を除いてⅡ様式前半段階のもので、加飾される描画文は直線文が主体

を占める。上半片384は、直線文・波状文の交互施文である。粗いハケ目調整の上に櫛指直線文を施す385は、一見波状文を有するようにみえるが、そうではない。直線文のみのもの(386・391)、直線文に少数の波状文帯を混成する387~390などがある。388は頸部直下の破片で、389の波状文には回転速度を感ずる。390は壺の頸部付近で、直線文・波状文・直線文の配列が確認できる。ただし、原体は2条1組の運動が看取され、櫛ではなく細い半截竹管が用いられている公算が高い。387も同様の壺の文様構成がみられるが、これは体部上半分である。391も体部上半部片である。底部392は、上げ底で体部がよく張る。

第59~61図の421は鉢片、422~436は壺片、437~441は壺片で、壺と壺以外の器種は少なく、第Ⅱ様式の前半に位置するものと思われる。器面から外れた421の突起には、櫛先による刺突がみられ、木目痕を残す。突起上端に櫛による直線文がみられるのは珍しい。鉢の口縁部の可能性がある。

422は、部分的ながらすかに流水文表現を採る壺片であるが、扇形文を重ねたようなものであり、明確なものではない。423・424は頸部の破片で櫛指直線文が施される。423は器質が堅く、424は明るい焼き上がりの広口壺片で7条を一単位とする櫛指文で飾る。体部片の425にも櫛指直線文が施される。426は文様帯の両端が付加条沈線状に仕上げられている。427は3本のみの直線文帯であるが、櫛を用いている。櫛指の直線文と波状文のみられる428~430は壺体部片である。428は不整な波状文をもつ。431は器種の判断がつきにくい、おそらく壺の文様帯の終わる部分であろう。明茶色の酸化粒を含み、土器片粒を混和させている。432は、第56図379と類似する器形の広口壺体部片であるが、櫛指文原体は異なる。一見、付加条沈線、1本併用沈線を思わせる櫛指直線文であるが、これは櫛そのものの原体に由来するものであろう。同一個体となる破片がみられる(433~435)。433は直線文帯2帯文の下に、同一原体による櫛指波状文1帯が確認でき、文様構成からみて、最下帯に在る可能性が高い。436は2条1対となる細竹半截による竹管施文にみえるが、定かではない。土質や焼成状態は432~435に類似するが、ハケ目を下地に櫛指直線文帯が展開しており、施文に使用されている原体が異なる。

口縁部437と胴部439は同一個体とみられる。438は別個体となるが、いずれも如意状に口縁部へと移行する中期前葉の壺である。437・439の2点は一見整齊と不整の櫛指文帯に分かれるが、原体は同一のものが用いられる。焼成は堅緻で、暗い褐色を呈し、胎土中に砂粒を含まない精良感のみられる土器である。440は壺の体部片で、縦方向に粗いハケ目を擦過させる。441は粗いタテハケと櫛指直線文が残るが、ハケと施文に用いられた原体は異なる。



第62図 第4遺構面出土遺物(7) 1/4

これらの土器に用いられた樹原体には、最上部をヘラのように深く摺過するものが含まれる。付加条沈線とは言い難いが、多分にその影響をうけたものといえよう。

第62図の18点(442~459)は、第Ⅰ-4様式~Ⅱ様式前葉に属する甕である。460~463の4点は鉢、464~471の8点は壺・甕の底部である。また、472~475の4点は石器である。

特徴的なものを取り上げると、442は、外面ハケ調整、内面ヨコナデ調整を加える摂津a型・b型(森田1990)の折衷様式で、内面は意識的にヨコナデされる。Ⅱ-1様式でも古い要素を残す。443は442に先行する遠賀川式の甕で、ヘラ描沈線文は13条と極めて多条化を遂げている。体部は上半に張りをもち、第Ⅰ様式第4段階でも後半の時期を示すものである。淡灰黄色の土器である。口縁端部にヘラによる刻目を施す。ハケ調整で仕上げる甕444は胎土も良く、明るい焼き上がりを示す。よくヨコナデされており、より西の地域からの搬入土器と考えて過誤はなからう。445は、体部の上半に横溝の敷いた櫛描直線文を施す。Ⅱ-1様式でも古くならう。ヨコナデが加わる446は摂津b型にみえるが、胎土が異なることから東部瀬戸内からの搬入品であろう。ハケで調整される447は、摂津b型のⅡ様式甕で、ヨコナデ痕跡が内外に行き届く。中期前葉の甕の破片である。448・449も摂津b型の甕片である。450も第Ⅱ様式前半の摂津b型の特徴を示す。内外面のヨコナデが顕著である。451の櫛描直線文は3帯あって丁寧である。452・453は櫛描直線文を重ねる。454は摂津型や瀬戸内形の甕片で、口縁部直下から櫛描直線文で加飾される。逆「L」字状口縁化するもので、淡く曲げられた口縁部の端面は整正な作りである。淡黄褐色の焼き上がりで若干の砂粒を含む。中期前葉の甕の破片である。455は、内甕する口縁部をもつ甕の口縁部片である。時期は不明だが、第Ⅱ様式のものともみられる。456は、口縁の特徴に三鳥・乙訓など淀川流域の地域性が看取される、丁寧な作りの甕である。

457~459は、彎曲や色調から壺とみられる。一見付加条沈線のようにみえる457は、櫛描原体の上下端末を太くしたものである。458は、直線文と波状文を交互に繰り返すが、細い竹を半載した原体を用い、2条が1対になって施文される。459は文様帯が無造作にもつれ合い、重複する。

460~463の器種は鉢とみられる。460は、一見ヘラにも思える太い櫛描文を直線文帯として2帯重ね、いわゆる複帯構成を探る。胎土は粗く、砂粒が目立つ。明るい焼き上がりの461・462は、大型の鉢であろう。焼成は堅い。遠賀川式の如意形口縁片463は、間延びする沈線の施し方や傾きから大型の鉢として大過なからう。胎土に多くの砂粒を含む。

底部は壺(464~466)、甕(467~471)に分かれる。大型壺466には黒斑がみられる。また、470・471には焼成後穿孔がみられる。

石器は4点を掲げた。472は磨製石庖丁である。刃部に使用痕としての刃こぼれや背部に発掘時のキズが残るものの、完形品として得られた資料として貴重である。外彎背直線刀型式の磨製石庖丁で、A面のみに刃部を形成する片刃である。材質が片理構造のみられる緑色片岩であり、紀ノ川流域か吉野川流域が原産地とみられる。研磨痕と使用時の擦痕が確認できる。刃部の刃こぼれは中央の数cmに著しい。最も厚くなる部分から背面側に径0.4cmと0.5cmの2孔を1.5cm間隔で穿つ。色調は淡い灰緑色である。長さ13.5cm、高さ4.5cm、最大厚0.9cm、重量67.1g。一部穿孔前の敲打痕が観察されるが、紐ずれ痕は目立たない。473は半欠しているが、両端に打ち欠き痕をもつ打製石庖丁と思われる。ただし、石材自体はサヌカイト製ではなく、粗質の粘板岩で、層理状剥離による損耗をみる。残存部をみると、半磨製の可能性を有する製品面がうかがえ、片理に則した階段状の剥落面が観察される。大半の色調は暗青灰色で、旧面は風化色を呈する。刃こぼれがみられ、残存長6.5cm、高さ4.8cm、最大厚0.65cmを測る。残存長9.1cmの474は棒状の叩石の損傷残欠品である。当初の大きさは不詳であるが、断面は隅丸方形を呈していた可能性がある。475は太型蛤刃石斧の刃部折損品である。基部の整形は粗く、断面は楕円形。残存長13.5cm、幅6.5cm、厚さ5.0cm、重量810gと重量感がある。閃緑岩質の砂岩製である。

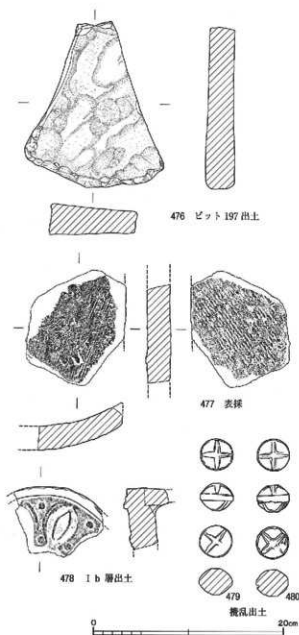
⑤ 包含層・攪乱出土遺物(第63・64図、図版10)

包含層や攪乱から出土した遺物の様相は、遺構から出土した遺物とほとんど変わらない。そこで、ここでは、きわめて特徴的な遺物に限って第63図に実測図5点(476~480)、第64図に写真8点(481~488)を取めた。なお、図版10には479・480と同形の鈴形土製品6点(489~494)の写真を掲載している。

476はビット197出土の石製品であるが、遺構の実態や出土状態は不明であるので、ここに掲載した。珪岩製の扁平な石材は、砥石であろう。自然面1面を残すが、他は形態を整える切断ないし自己的割れによる人為的加工が加わっている。砥面は平らであるが、作業単位面がうかがわれる。仕上げ際には向かないが、古墳時代以前に属する砥石とみて良いであろう。長さ17.6cm、幅14.8cm、厚さ3.1cm、重さ1,100gである。

表探の477は瓦当に近い部位の平瓦で、凸面には縄タタキ痕、凹面には粗い布目痕を残す。奈良時代の瓦で、焼成は軟質である。

478はIb層から出土した。当地域を離れては同型式例のみられない新羅南朝系の軒大瓦である。周縁段下げとなり、花卉もネガティブで形成されており、蓮弁間には珠点が入る。蓮弁は素弁にはならず、單



第63図 包含層・攪乱等出土遺物 1/4



第64図 II層群出土遺物

481・482 IIa層出土 483～488 IIb層出土

弁となり、弁数は8弁構成である。弁周には1条の突線輪郭が部分的に付くようである。これまで、市内では、4遺跡から11点が出土しており、同型式となる資料は存在するものの、必ずしも同范品が分布を広げているわけではない。灰色硬質で白色紅物を数多く含むグループと灰白色を呈する軟質焼成のグループが認められ、本例は前者に属する。瓦当形成は九瓦を包み込むような二次整形で厚さを加えている。

479・480は鈴形土製品で、合計8個が攪乱から出土している。これらは球形というより算盤玉形に近いもので、479・480ともに径3.4cm、高さ2.8cmで、479は9.95g、480は10.5gである。いずれも澁過粘土を軽量に焼き上げた多孔質のものである。色調は外面淡褐色を呈するが、断面色は淡灰白色～暗灰色で、全体的にみて軟質である。ただし、もろさはない。上下の型合わせ接合で作られているが、そのズレがみられるものばかりである。十字状に隆帯の緊束をみせるが、上下の別があったような作りをなす。同形の489～494は、489～491の一部が僅かに欠損しており、492は下面約3分の1を失っている。489は10.0g、490は9.7g、491は9.5g、492は9.8g、493は9.65g、494は10.2gである。

本例と同巧の土製品が、三条岡山遺跡第4次調査で出土しており、7世紀中頃の祭祀遺構に伴う遺物と認識されている〔村川2012、村川行・村川義1986〕。両者の関係性、用途や数のもつ意味など未解明なまま報告するにとどめるが、浮きの機能は考えてもよいだろう。

481・482はIIa層から出土した。481は土師質焼成の鈎鐔形イイダコ壺の把手片である。482は定形の棒状有孔土鍾で、長さ6.5cm、重さ17.2gである。

483～488はIIb層出土遺物で、483は弥生時代の絵面土器片、484は叩石、485・486は炉壁片、487は竈の破片、488は土師器甕の破片である。483はかすかにハケメ調整の残る土器の黒斑部分に長軸4mm、短軸3mmの楕円形の刻印が5mm間隔で2つ並んでいる。線刻ではなく型押しである。調整や胎土から、弥生時代後期の壺と分かる。灰白色の484は砂岩製の叩石で、両端に僅かに使用痕が認められる。長さ6.2cm、幅4.2cm、厚さ3.9cm、重さ157.8gである。485・486はスサを含み、吸炭によって変色している炉壁片である。487は282・283に似た土師質の置き竈の破片、488はハケメ調整のみられる大形の長胴甕で、奈良時代の資料である。

⑥ 小 結

今回の調査では、弥生時代から中世の遺物が大量に出土した。主なものを古い順に並べると、第4遺構面由来の弥生時代中期前葉を中心とする土器・石器類、第3遺構面の遺構出土の弥生時代後期前半の土器、第4遺構面の遺構に伴う弥生時代後期後半～庄内式期前半や布留式期の土器、古墳時代後期～奈良時代の土器や瓦、鉄滓、中世後期（13～15世紀）の土器・陶磁器等である。

7. まとめ

今回の調査において、弥生時代中期前期、弥生時代後期前半、弥生時代後期後半～庄内式期前半、布留式期、古墳時代後期～平安時代前期、中世後期～近世に至るまでの遺構・遺物が検出された。以下に、概略と意義、さらに検討課題を記す。

弥生時代中期前期の段階では、本調査区は扇状地緩斜面から谷状地形に至る地形変換点にあたるためか、遺構は少なかつた。しかし、弥生時代前期末期に遡る土器も混入して、中期前期の土器と石器が一量出土した。これは、本調査地点より北側に集落域、南の谷部に水田などの生産域が存在する可能性を示唆するとともに、前期集団から中期集団への立地点（居住域）の推移を示す好例が報告できたといえる。

この地表面が洪水によって埋没した後、洪水層（Ⅲ層群）上にV字溝（SD4・5）が掘られる。なお、SD4・5に先立ってⅣ層群上面で確認されたSD2・12がⅢ層群中あるいはⅢ層群中上面から掘り込まれていたようである。これら、洪水後に開削されたと考えられる溝の性格を明らかにすることで、本地域のような扇状地傾斜面における災害後の復旧、再開発のありかが理解できるかもしれない。

SD4・5埋没後に設置された弥生時代後期前半の円形竪穴住居1棟（SI11）は、東部瀬戸内地域と関わる強い土器を伴い、他の建物から距離を置いて単独で存在している。この有様は、鉄器工房などの特殊な生産を担っていた性格を想定させるものである。

第2遺構面では、弥生時代後期前半までの土器しか含まないSD3の埋没以降、弥生時代後期後半から中世にいたる様々な遺構・遺物が検出され、多様な削平も加わる複雑な土地利用の遺構がうかがえる。

まず、弥生時代後期後半～庄内式期に竪穴住居SI9が活動する。当該期の明確な遺構はこれのみであるが、他の遺構埋土や包含層から、庄内式期の土器がまともに出土しているので、当該期に集落が展開していたことは明らかであり、寺田遺跡の盛行期の一つをなす。次いで、竪穴住居などの遺構が見出せるのは、布留式期に入ってからである。砥石2点を伴うSI3やSI8・15など、方形の竪穴住居が検出されている。さらに、須恵器出現以降の竪穴住居SI1・2・6・10・13も確認されていて、SI10・13は北壁に竈を伴う。SI6は貼床状の面に伴って鍛冶炉の底部が検出されていて、炉周辺から焼形滓や炉壁片が出土しているもので、5世紀後半の鉄器素材生産工程を含む精錬鍛冶工房と目される。阪神間に大鍛冶工房が点在し始める時期である。

古墳時代には、芦屋廃寺遺跡・月若遺跡など扇状地上に展開する周辺遺跡でも、遺構・遺物が増加傾向にあり、集落域の拡大が推定される。近年発掘調査を实

施した芦屋廃寺遺跡第122地点においては、5～6世紀代の鉄器生産施設や精錬鍛冶滓が検出されており〔芦屋市教委2014b〕、この地に鉄器作りを生業とする人々が居住していたことと、その面的な広がりが確認されつつある。

飛鳥・奈良時代については、確実にこの時期としてよい遺構は少ないが、SB1～3が当該期の遺構である可能性がある。また、土鍾が出土しているSD9は、古墳時代後期～飛鳥時代の遺構、焼土集中ピットならびにSX1は、古墳時代よりは奈良時代の遺構とみている。

この他、中世の遺物を大量に包含するSD6～8・11から、古代瓦や土師器・須恵器、製塩土器が出土している。さらに、地滑り状の不整形の落ち込みと認識されたSX9は、焼土と共に古墳時代後期から奈良時代までの遺物を集中的に出土している。これらの事象から、本調査地点やその周辺に、掘立建物群を伴う古代集落が広がっており、それらは各種生産部門をもつ官衙的な側面をも有していたことが推測できる。

しかし、平安時代になると遺物量は減少し、遺構も確認できない。方形ピットの一部は当該期に下るものかもしれないが確証は得られない。

中世になると、遺物量は増加するが、瓦器を含む13世紀代のものは、SI7ピット1など一部に限られる。総じて遺物量が急増するのは13世紀でも後半からで、東西方向に走るSD6～8と南北方向を指向するSD11からは、東播磨系須恵器鉢などの調理具、土師質・瓦質の羽釜をはじめとする煮炊具を中心とする、13世紀後半～15世紀の生活雑器が大量に出土している。時期の継続性と、他地域からもたらされた煮炊具の多様性などから、これらの溝の性格を耕作用の用水路・排水路とはみえず、在地土豪の居館に伴う区画溝の一部と推測している。

しかし、近世になると、当該地は宅地から耕作地へと変貌したようで、その姿は近代になって当地域が大阪・神戸の郊外型住宅地として開発されるまで継続したとみられる。

なお、今回の調査で芦屋市内において、初めて鍛冶遺構が検出され、焼形滓も出土した。また、新羅南朝系の軒丸瓦や鈴形土製品など、特殊な資料も出土しており、複合度と物証の両面から寺田遺跡の拠点性を物語っている。新羅南朝系の軒丸瓦は外縁部が低くなり、蓮介文がネガティブとなる特殊な造り技法によるものであり、近年、朝鮮考古学の分野では、高句麗系を除き、「高句麗・新羅系」や「新羅南朝系」と改称されつつあるものである。この調査地点こそ、年代的にみて初出の場所となる。市内ではこの後、月若遺跡第81・83・96・98・100・102地点ならびに寺田遺跡第197地点、芦屋廃寺遺跡第62地点などからの出土が知られている〔森岡2012b〕。



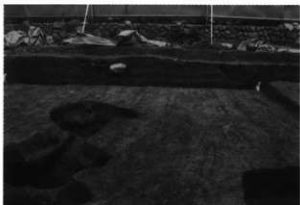
I 区 東壁土層断面 (北西から)



I 区 調査地現況 (北東から)



作業風景



II 区 第1遺構面 琴満状遺構 (西から)



II 区 第1遺構面 井戸 (SE1) (北から)



I区 全景 (南から)



II区 全景 (北西から)



I 区 SB1 (北から)



SB1-P2土層断面 (南東から)



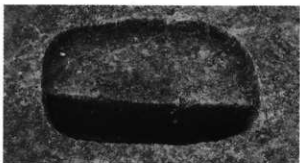
SB1-P4土層断面 (南東から)



SB1-P5土層断面 (南から)



SB1-P6土層断面 (南西から)



SB1-P7土層断面 (南西から)



焼土集中ビット1・2 (北西から)



I区 SB3南列 (西から)



SB3-P1土層断面 (南から)



SB3-P1掘削状況 (南から)



SB3-P2土層断面 (南から)



SB3-P2掘削状況 (北から)



SB3-P3土層断面 (南から)



SB3-P3掘削状況 (北から)



I 区 S 11 (南から)



I 区 S 12 (東から)



I 区 S 13 (東から)



I 区 S 13 遺物出土状況 (西から)



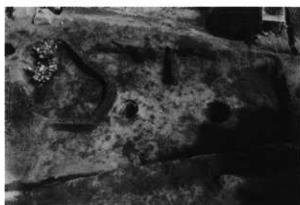
I 区 S 16 (北から)



I 区 S 16 鍛冶炉土層断面 (南から)



I 区 S 18 (南から)



I 区 S 110 (南から)



I区 S110竈完掘状況 (南から)



I区 S110竈東部遺物出土状況 (南から)



II区 S113 (南から)



II区 S113竈完掘状況 (南から)



II区 S115 (西から)



I区 SD3土層断面 (東から)



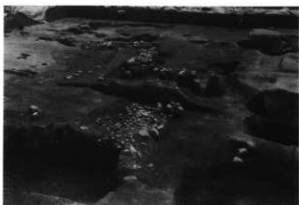
I区 SD3 (東から)



I区 SD6・7・8 (西から)



I区 SD6礫出土状況 (西から)



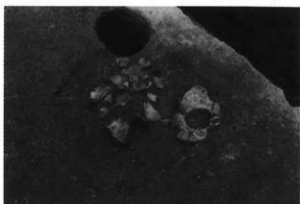
I区 SD7礫出土状況 (西から)



II区 SD9 (南西から)



II区 SD11礫出土状況 (南から)



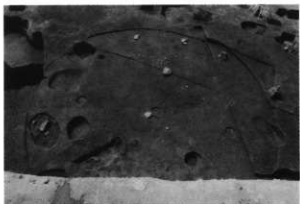
I区 SK4遺物出土状況 (南西から)



II区 SK7およびSX9周辺 (北西から)



II区 SK7 (南から)



I区 S111検出状況 (北から)



I区 S111完掘状況 (北から)



I区 SD4 (東から)



I区 SD5 (北から)



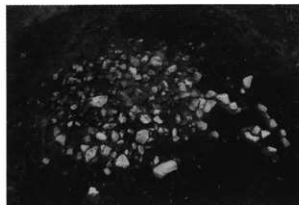
I区 SD5土層断面 (南から)



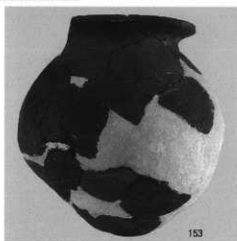
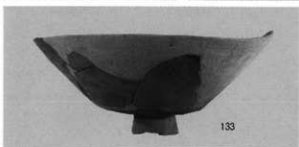
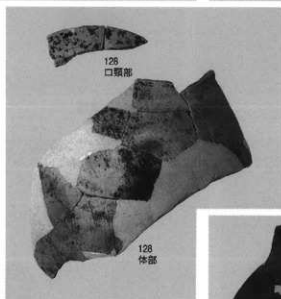
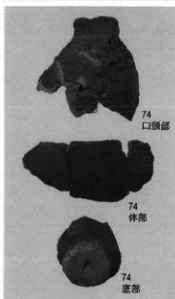
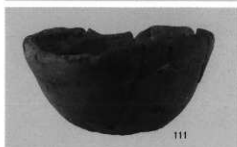
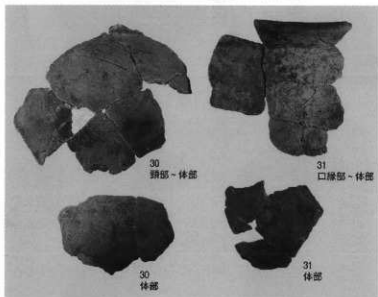
II区 第4遺構面全景 (南から)



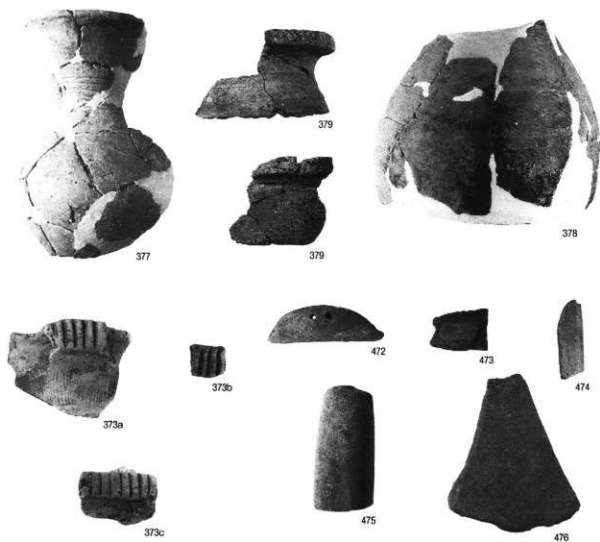
I区 SD2・SX4 (南から)



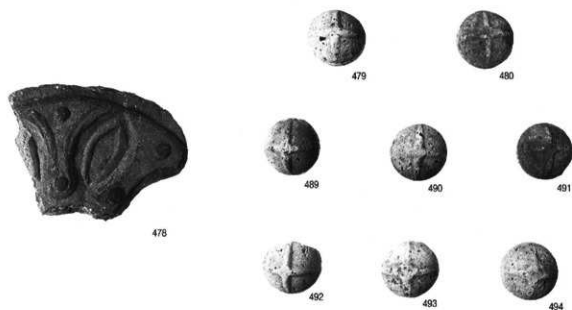
I区 SX4 (南から)



第2遺構面出土遺物



第4遺構面出土遺物



新羅南朝系軒丸瓦

鈴形土製品

報告書抄録

ふりがな	へいせい8ねんどこっこほじょじぎょう(3) あしやしないいせきはつくつちょうさが いようほうこくしょーはんしん・あわじだいしんさいふつきゅう・ふっこうじぎょうにと もなうまいぞうぶんかざいはつくつちょうさー
書名	平成8年度国庫補助事業(3) 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 ―阪神・淡路大震災復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査―
副書名	寺田遺跡(第55地点)
巻次	
シリーズ名	芦屋市文化財調査報告
シリーズ番号	第101集
編著者名	(編集)白谷朋世 (執筆) 白谷朋世・森岡秀人・西岡崇代
編集機関	芦屋市教育委員会
所在地	〒659-8501 兵庫県芦屋市精道町7番6号 TEL.0797-38-2115
発行年月日	2015年(平成27年)3月31日

所収遺跡名		寺田遺跡(第55地点)		調査担当者	神野 信・吉田東明	
所在地		兵庫県芦屋市三条南町23-2				
コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村	調査番号	34度73分34秒	135度29分67秒	19960403～19960809	920㎡	共同住宅建設
28206	TD55					
所収遺跡名	種 別	時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項	
寺田遺跡 (第55地点)	集落跡・ その他の遺跡	弥生 古墳 古代 中世	掘立柱建物・堅穴住居・焼土集中ピット・粘土集中部・溝・土坑・ピット・井戸・畦畔状遺構・犁溝状遺構・地滑り状の不定形の落ち込み	弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・陶器・磁器・土師質土器・瓦質土器・瓦・鉄製品など	上から順に、近世を下限とする第1遺構面、弥生時代後期後半～中世の遺構が集中する第2遺構面、弥生時代後期前半の第3遺構面、弥生時代中期前半の第4遺構面と合計4枚の遺構面が検出された。なお、今回の調査では芦屋市域において、はじめて鍛冶遺構が検出され、鋳形滓も出土している。また新羅南朝系の軒丸瓦や鈴形土製品など特殊な遺物も出土している。	
要 約		弥生時代中期前半の遺構面（第4遺構面）を覆うように洪水層（Ⅲ層群）が堆積し、その上面で弥生時代後期前半の遺構面（第3遺構面）を検出した。さらに上位の第2遺構面では、弥生時代後期後半～庄内式期前半や布留式期の堅穴住居群、古墳時代後期～奈良時代の堅穴住居や鉄器工所、掘立柱建物などを検出した。平安時代の遺物・遺構は乏しいが、中世には遺物量が増加し、13世紀後半～15世紀の屋敷地の区画溝とみられる溝が検出された。また、この溝から、大量の調理具や煮炊具などの生活雑器が出土した。なお、近世には調査地点は耕地化したようである。				

引用・参考文献目録

- 秋山浩三 1996『近畿南部の煮炊具―播磨・摂津・河内・和泉・紀伊・淡路―』『古代の土器研究―律令の土器様式の西・東4 煮炊具―』（古代の土器研究会第4回シンポジウム資料集）古代の土器研究会
- 芦屋市・芦屋市教育委員会 2002『兵庫県芦屋市 寺田遺跡発掘調査報告書 第127・130・132・133地点―都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査―』（芦屋市文化財調査報告 第43集）前田佳久・平田朋子・中居さやか 編
- 芦屋市・芦屋市教育委員会 2003『兵庫県芦屋市 寺田遺跡発掘調査報告書 第132・133・137・139・141・142地点―都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査Ⅱ―』（芦屋市文化財調査報告 第45集）前田佳久・千種 浩・佐伯二郎・平田朋子・中居さやか 編
- 芦屋市・芦屋市教育委員会 2005『兵庫県芦屋市 寺田遺跡発掘調査報告書 第150～153・157～160・166～168地点―都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査Ⅳ―』（芦屋市文化財調査報告 第59集）川上厚志・阿部 功・中村大介 編
- 芦屋市・芦屋市教育委員会 2006『兵庫県芦屋市 栗平遺跡第61地点 月若遺跡第79・81地点 寺田遺跡第178・181地点 発掘調査報告書―都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査Ⅴ―』（芦屋市文化財調査報告 第62集）安田 滋 編
- 芦屋市・芦屋市教育委員会 2008『芦屋市山手幹線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要―総集編―』（芦屋市文化財調査報告 第74集）山本雅和 編
- 芦屋市教育委員会 1989『昭和63年度国庫補助事業 芦屋廃寺遺跡K地点・寺田遺跡第16次地点発掘調査概要報告書』（芦屋市文化財調査報告 第17集）森岡秀人・和田秀寿・後神 泉 編
- 芦屋市教育委員会 1991『平成2年度国庫補助事業 芦屋廃寺遺跡ほか発掘調査概要報告書 寺田遺跡第23次地点 寺田遺跡第24次地点 寺田遺跡第25次地点 寺田遺跡第27次地点 芦屋廃寺遺跡M地点 芦屋廃寺遺跡N地点』（芦屋市文化財調査報告 第21集）森岡秀人・松村朋世・後神 泉 編
- 芦屋市教育委員会 1996『平成7年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査―震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認（試掘）調査―概要報告書 寺田遺跡（第40・41・47・52・55・57地点） 芦屋廃寺遺跡（W地点・第29・38地点） 月若遺跡（第20・25・28・30・33地点） 打出岸造り遺跡（第1地点） 打出小竈遺跡（第17地点） 金津山古墳（第9地点） 久保遺跡（第15地点） 山芦屋遺跡（S8地点）』（芦屋市文化財調査報告 第27集）森岡秀人・木南アツ子 編
- 芦屋市教育委員会 1997『阪神・淡路大震災復興・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（平成7年度分）概要報告書 芦屋廃寺遺跡（W地点） 芦屋廃寺遺跡（第29地点） 月若遺跡（第20地点） 月若遺跡（第28地点） 打出岸造り遺跡（第9地点） 久保遺跡（第15地点）』（芦屋市文化財調査報告 第28集）森岡秀人・木南アツ子 編
- 芦屋市教育委員会 1999『寺田遺跡第95地点発掘調査概要報告書 阪神・淡路大震災復興に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果』（芦屋市文化財調査報告 第32集）重藤輝行・竹村忠洋 編
- 芦屋市教育委員会 2001『寺田遺跡（第117～124地点）発掘調査概要報告書 都市計画道路川西線建設に伴う発掘調査―震災復興調査―』（芦屋市文化財調査報告 第39集）山田清朝 編
- 芦屋市教育委員会 2003『平成12・13年度国庫補助事業 寺田遺跡（第128地点）発掘調査報告書―集落東端部の様相と知見―』（芦屋市文化財調査報告 第47集）森岡秀人・坂田典彦 編
- 芦屋市教育委員会 2005『平成8年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査―震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認・本発掘調査―実績報告書集』（芦屋市文化財調査実績報告集1）
- 芦屋市教育委員会 2008『平成13年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書―市内遺跡及び震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認・本発掘調査の結果―芦屋廃寺遺跡（第74・75・77・79地点） 寺田遺跡（第143地点） 六条遺跡（第43地点） 津知遺跡（第43・69地点） 大原遺跡（第45地点） 打出岸造り遺跡（第35地点）』（芦屋市文化財調査報告 第72集）森岡秀人・竹村忠洋 編
- 芦屋市教育委員会 2009a『平成14年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書―震災復興に伴う埋蔵文化財発掘調査とその成果―城山南麓遺跡（E・F・G地点） 冠遺跡（第23地点） 芦屋廃寺遺跡（第81・88地点） 月若遺跡（第74地点） 寺田遺跡（第144地点） 津知遺跡（第123・187地点） 打出岸造り遺跡（第38・39地点） 久保遺跡（第47・48地点） 打出小竈遺跡（第36・37地点）』（芦屋市文化財調査報告 第78集）森岡秀人・竹村忠洋・坂田典彦 編
- 芦屋市教育委員会 2009b『平成19年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査報告書 寺田遺跡（第191地点） 山芦屋遺跡（S14地点）』（芦屋市文化財調査報告 第79集）森岡秀人・竹村忠洋・守田めぐみ 編
- 芦屋市教育委員会 2010a『平成15年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 芦屋廃寺遺跡（第89地点） 寺田遺跡（第171地点） 清水遺跡（第22地点） 金津山古墳（第12地点）』（芦屋市文化財調査報告 第83集）森岡秀人・竹村忠洋・坂田典彦・白谷朋世 編
- 芦屋市教育委員会 2010b『平成20年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 城山南麓遺跡（K地点） 芦屋廃寺遺跡（第108地点） 月若遺跡（第102地点） 寺田遺跡（第197地点） 岩ヶ平刻印群（第169地点）―徳川大坂城東六甲採石場X―』（芦屋市文化財

調査報告 第84集) 森岡秀人・竹村忠洋・坂田典彦・白谷朋世 編

芦屋市教育委員会 2011『平成21年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 岩ヶ平刻印碑 (第176地点) - 徳川大坂城東へ甲採石場Ⅲ - 芦屋廃寺遺跡 (第113地点) 打出岸造り遺跡 (第56地点)』(芦屋市文化財調査報告 第88集) 森岡秀人・坂田典彦・白谷朋世 編

芦屋市教育委員会 2012『平成22年度 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 寺田遺跡 (第209地点) 若宮遺跡 (第50・51・52・57地点)』(芦屋市文化財調査報告 第89集) 森岡秀人・坂田典彦・白谷朋世 編

芦屋市教育委員会 2013a『寺田遺跡第213地点発掘調査報告書』(芦屋市文化財調査報告 第94集) 坂田典彦・西岡崇代 編

芦屋市教育委員会 2013b『平成8年度国庫補助事業 (1) 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 - 阪神・淡路大震災復興・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 - 三条九ノ坪遺跡 (第15地点) 月若遺跡 (第35・37地点) 月若遺跡 (第36地点) 栗平遺跡 (第26地点) 栗平遺跡 (第29地点) 栗平遺跡 (第31地点) 大原遺跡 (第21地点)』(芦屋市文化財調査報告 第95集) 白谷朋世 編

芦屋市教育委員会 2013c『平成23年度国庫補助事業芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 寺田遺跡 (第212地点)』(芦屋市文化財調査報告 第96集) 白谷朋世 編

芦屋市教育委員会 2014a『平成8年度国庫補助事業 (2) 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 - 阪神・淡路大震災復興・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 - 芦屋廃寺遺跡 (Z地点) 芦屋廃寺遺跡 (第45地点) 芦屋廃寺遺跡 (第49地点) 寺田遺跡 (第77地点) 寺田遺跡 (第89地点) 寺田遺跡 (第90地点) 打出小竈遺跡 (第22地点)』(芦屋市文化財調査報告 第97集) 白谷朋世 編

芦屋市教育委員会 2014b『芦屋廃寺遺跡 (第122地点) 発掘調査報告書』(芦屋市文化財調査報告 第98集) 坂田典彦 編

芦屋市教育委員会 2014c『寺田遺跡 (第223地点) 発掘調査概要報告書』(芦屋市文化財調査報告 第100集) 竹村忠洋・坂田典彦 編

安達厚三・木下正史 1974『飛鳥地域出土の古式土師器』『考古学雑誌』第60巻第2号 日本考古学会

池田征弘 1996『摂津西部・播磨』『古代の土器4 煮炊具 (近畿編)』古代の土器研究会 編

勇 正広・藤岡 弘 1976『古墳時代』『新修芦屋市史』資料篇1 (考古・古代・中世) 芦屋市役所

伊野近富 1995『土師器Ⅲ』『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会 編 真陽社

尾上 実・森島康男・近江俊秀 1995『瓦器Ⅲ』『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会 編 真陽社

古代学協会 1985『芦屋市寺田遺跡発掘調査報告書』南博史ほか 編

古代の土器研究会 1992『古代の土器1・都城の土器集成

古代の土器研究会 1993『古代の土器2・都城の土器集成Ⅱ』

小森俊寛 2005『京から出土する土器の編年研究 - 日本律令の土器様式の成立と展開、7～19世紀 -』堺市博物館 1987『漁具の考古学 - さかなをとる -』

佐藤亜聖 2007『瓦質土器研究の課題』『第26回中世土器研究会 瓦質土器の出現と定着 - 瓦質土器を考える (前編) -』中世土器研究会 編

菅原正明 1990『瓦器』は何を語るか』『中近世土器の基礎研究』VI 日本中世土器研究会 編

菅原康夫 2003『阿波地域』『弥生土器の様式と編年 - 四国編 -』木耳社 菅原康夫・梅木謙一 編

菅原康夫 2006『河内地域の集落と初期古墳』『シンポジウム 邪馬台国時代の阿波・讃岐・徳島と大和』(ふたかみ邪馬台国シンポジウム6 資料集) 香芝市教育委員会

杉本厚典 2006『河内地域』『古式土師器の年代学』財団法人 大阪府文化財センター 編

佐藤 隆 1996『摂津東部』『古代の土器4 煮炊具 (近畿編)』古代の土器研究会 編

佐原 真 1968『近畿地方』『弥生式土器集成 本編2』中世土器研究会 2014『東播磨須恵器控の最新分類および変遷概略図の提示』『第33回 中世土器研究会 東播磨須恵器 (2) - 編年と分布から考える -』

辻 美紀 1999『古墳時代中・後期の土師器に関する一考察』『国家形成期の考古学 - 大阪大学考古学研究室10周年記念論集 -』大阪大学考古学研究室

續 伸一郎 1995『中世後期の貿易陶磁器』『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会 編 真陽社

續 伸一郎 2007『大阪の瓦質土器 - 南部地域を中心に -』『第26回中世土器研究会 瓦質土器の出現と定着 - 瓦質土器を考える (前編) -』中世土器研究会 編

寺沢 薫 1986『畿内古式土師器の編年と二、三の問題』『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所

西村 歩・池峯肇 2006『和泉地域』『古式土師器の年代学』財団法人 大阪府文化財センター 編

奥岡 実 2000『備前焼指鉢の編年について』『第3回中近世備前焼研究会資料』中近世備前焼研究会

白谷朋世 2013『東播磨須恵器生産地周辺の動向 - 兵庫県下の資料から -』『第32回 中世土器研究会 東播磨須恵器 - 編年と分布から考える -』中世土器研究会 編

長谷川 真 2006『瀬戸内東部 - 播磨』『第25回 中世土器研究会 土製煮炊具の諸様相』中世土器研究会 編

長谷川 真 2007『播磨における土製煮炊具の様相』『中世土器の基礎研究』21 日本中世土器研究会

兵庫県教育委員会 1999『白沢3・5号竈 - 山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告ⅩⅩⅨ -』(兵庫県文化財調査報告 第184冊) 森内秀造・添江英恵 編

兵庫県教育委員会 2000『志方遺跡群Ⅱ - 中谷支群 - 山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告ⅩⅩⅩⅠ』(兵庫県文化財調査報告 第203冊) 森内秀造・井本有二・

仁尾一人・岡本一秀 編
 兵庫県教育委員会 2001『志方園跡群Ⅱ－投松文群－ 山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告ⅩⅩⅣ』(兵庫県文化財調査報告 第217冊) 森内秀造・井本有二・高木芳史・仁尾一人・岡本一秀 編
 兵庫県教育委員会 2004『兵庫県遺跡地図』
 福島正和 2006『古代末から中世初頭の煮炊具－摂津地域における壺・羽釜・鍋－』『第25回 中世土器研究会土製煮炊具の諸様相』 中世土器研究会 編
 福島正和 2007『古代末から中世初頭の煮炊具』『中近世土器の基礎研究21 土製煮炊具の諸様相』 中世土器研究会 編
 松尾信裕 2006『上町台地周辺の中世集落』『難波宮から大阪へ』 和泉書院
 村川義典 2012『芦屋市三条岡山遺跡の祭祀遺構』『苑原Ⅱ－森岡秀人さん還暦記念論文集－』 苑原刊行会
 村川行弘・村川義典 1986『三条岡山遺跡(第4次調査)』『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和58年度』 兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所
 森岡秀人 1985『土器の交流－西日本』『月刊考古学ジャーナル』252 ニュー・サイエンス社
 森岡秀人 1993『土器移動の諸類型とその意味』『転機』4
 森岡秀人 1999『摂津における土器交流拠点の性格』『庄内式土器研究』ⅩⅩⅠ(－庄内式併行期の土器交流拠点－『摂津・播磨地域』) 庄内式土器研究会
 森岡秀人 2004『調査成果総括 寺田遺跡における掘立柱建物と本地点の建物S H01について』『寺田遺跡(第128地点)発掘調査報告書』(芦屋市文化財調査報告

第47集) 芦屋市教育委員会
 森岡秀人 2012a『弥生文化の地域的様相と発展 近畿地域』『講座日本の考古学』5 弥生時代(上) 青木書店
 森岡秀人 2012b『考古学・古代史から見た7世紀前後の地域社会変動』『第61回埋蔵文化財研究集会 発表要旨集(集落から見た7世紀)』埋蔵文化財研究会
 森岡秀人・竹村忠洋 2006『摂津地域』『古式土師器の年代学』財団法人 大阪府文化財センター 編
 森岡秀人・西村 歩2006『古式土師器と古墳の出現をめぐる諸問題－最新年代学を基礎として－』『古式土師器の年代学』財団法人 大阪府文化財センター 編
 森島康雄 2006『基調報告－土製煮炊具の諸様相－』『第25回 中世土器研究会 土製煮炊具の諸様相』 中世土器研究会 編
 森田克行 1990『摂津地域』『弥生土器の様式と編年－近畿Ⅱ－』木耳社 寺沢 薫・森岡秀人 編
 森本 徹 2012『摂津地域』『古代学研究会2012年度拡大例会シンポジウム資料集 集落から探る古墳時代中期の地域社会－渡来文化の受容と手工業生産－』 古代学研究会
 山本信夫 1995『中世前期の貿易陶磁器』『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会 編 真臨社
 米田敏幸 1994『河内における庄内式土器の編年』『庄内式土器研究』Ⅷ 庄内式土器研究会
 米田文孝 1983『搬入された古式土師器－摂津・垂水南遺跡を中心として－』『関西大学考古学研究室開設参加周年記念 考古学論叢』 関西大学考古学研究室

芦屋市文化財調査報告 第101集

平成8年度国庫補助事業(3)

芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書

—阪神・淡路大震災復興・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—

寺田遺跡(第55地点)

平成27年(2015) 3月31日 印刷発行

発 行 芦屋市教育委員会
 〒659-8501 兵庫県芦屋市精進町7番6号
 TEL. 0797-38-2115

印 刷 ウニスガ印刷株式会社
 〒677-0054 兵庫県西脇市野村町大坪471
 TEL. 0795-22-3226

Ashiya Archaeological Record 101

2015.3

Ashiya City Board of Education, Japan